003
OK3

ROYAL ASIATIC SOCIETY
NORTH CHINA BRANCH
LIBRARY

上海地名誌

百五拾部限定出版

No. ....

著者印

昭和十六年六月十九日印刷
昭和十六年六月二十日發行

（非賣品）

上海霄樂安路一七一號
著者　沖田一

上海海寗路三百號
印刷所　蘆澤印刷所

上海海寗路三百號
發行兼印刷者　蘆澤駿之助

上海北四川路福德里三二號
上海青年團本部氣付
發行所　上海歷史地理研究會

趣旨

政治經濟都市としての上海は既に縱橫に研究されてゐるが、上海の歷史的研究に至つては我が邦人には全く閑却されて手が着けられてゐない。

文獻の記載するところに從へば、上海は禹貢揚州の域であり、春秋には吳越に屬し、戰國には楚の春申君の封となり、後宋代には市船提擧司を置き、權貨場を設け、上海鎭を創設し、元の至元二十九年上海縣を立て、寺觀學宮林立、文化の發達は千數百年に遡ることを得、眞に南京、蘇州、杭州に比肩すべき江南の名邑である。西歷一八四三年阿片戰爭の結果による租界の開設と共に西歐帝國主義侵入し上海固有の文化に變相を來したのであるが、又一面我が日本との接觸を稽ふるも、遠く入唐宋の僧侶留學生、或は九州邊境の漂民が往來したことが記錄に見え、近世には文久二年幕府の貿易船千歲丸で高杉普作等が來滬し、元治元年遣歐使節池田築後守一行がアスターハウスに投宿した等の事實があり、上海は新日本に對する西洋文明の窓であつたのである。

上海の歷史に就ては外人の手に成る幾多の好著があるが、我が國人の之に著手したものなきは極めて遺憾なことである。殊にこの國際都市の裡に埋沒せる文化を再び發掘して世に現し、所謂溫故知新、以て新しき東亞建設の一助にもと、我等同人、上海に永住し、上海を愛する者集つて本會を結成し、業餘を利し夙夜文獻に或は古蹟に調査研究を續けつゝあるが、先づその第一著として本書を上梓、同好の士に頒布する次第である。爾今御贊同と御後援を賜らんことを切願する。

昭和十六年六月

上海歷史地理研究會

沖田一

蘆澤駿之助

外國語索引

A

Alabaster Road (阿拉白司脫路) 58
Albert, Avenue du Roi (亞爾培路) 40
Alcock Road (愛而考克路) 68
Allegre, Rue Soeur (愛來格路) 38
Amherst Avenue (安和寺路) 49
Azalea Terrace (阿瑞里) 63

B

Balfour Road (巴爾福路) 27
Bard, Rue (白爾路) 36
Battle of Muddy Flat (泥地戰) 26
Bayle, Rue Amiral (貝勒路) 40
Bluntschli, Rue (平濟利路) 36
Boissezon, Route (白賽仲路) 37
Boone Road (蓬路) 52
Boppe, Rue (蒲柏路) 34
Boundary Road (界路) 62
Bourgeat, Rue (蒲石路) 37
Brenan Road (璧利南路) 47
Brenier de Montmorand (白來尼蒙馬浪路) 35
Broadway (百老滙路) 52
Bubbling Well Road (靜安寺路) 29
Buissonnet, Rue (皮少耐路) 35
Bund, The (黃浦灘路) 24
Burkill Road (白克而路) 27

C

Cassini, Route (賈西義路) 40
Chapsal, Rue (薩坡賽路) 36
Cherry Terrace (千愛里) 64
Chevalier, Route (薛華立路) 38
Cimétier, Rue de (坟山路) 42
Columbia Road (哥倫比亞路) 49
Connaught Road (康腦脫路) 47
Consulat, Rue du (公館馬路) 32
Conty, Route (慷悌路) 34
Corneille, Rue (高乃伊路) 38
Courbert, Route (古拔路) 39
Cunningham Road (克能海路) 59

D

Darroch Road (竇樂安路) 58
Dent Road (鄧脫路) 68
Destelan, Route (鐵士蘭路) 37
Dollfus, Route (陶爾斐路) 37
Doumer, Route (杜美路) 39
Dubail, Rue (呂班路) 34
Dufour, Rue (巨福路) 37
Dugour, Rue (杜神父路) 38
Dupleix, Route (巨潑來斯路) 39

E

Edan, Route (愛棠路) 35
Edinburgh Road (憶定盤路) 47
Edward Ezra Road (新康路) 29
Edward VII, Avenue (愛多亞路) 22
Elgin Road (愛而近路) 59

Emmanuel III, Route (愛麥虞根路) 41
English Settlement (英租界) 32
External Road (越界道路) 45
Extra-Settlement Road (同上) 45

F

Fearon Road (斐倫路) 59
Ferguson, Route (福開森路) 40
Ferry Road (小沙渡路) 29
France Bund (佛租界外灘路) 32
Fraser Road (法磊斯路) 48
Frelupt, Rue (福履理路) 37
French Concession (佛租界) 32
Frenchtown (同上) 32
Foch, Avenue (福煦路) 39
Froc, Rue (勞神父路) 38

G

Galle, Rue (茄勒路) 35
Garden (衖路) 64
Garden Bridge (外白渡橋) 31
Garden Terrace (留青小築) 64
Garnier, Route (賈業愛路) 35
Gaston Kahn, Rue (甘世東路) 35
Ghisi, Rue (祁齊路) 36
Gordon Road (戈登路) 27
Great Western Road (大西路) 48
Gros, Rue (葛羅路) 34

H

Haig, Avenue (海格路) 41
Hanbury Road (漢璧禮路) 59
Hardoon Road (哈同海) 27
Hart Road (赫德路) 28
Haskell Road (赫司格爾路) 58
Hennequin, Rue (安納金路) 36

J

Jansen Road (近勝路) 68
Jernigan Road (佑尼干路) 49
Jessfield Road (極司非而路) 46
Jinkee Road (仁記路) 29
Jinrikisha (人力車) 17
Joffre, Avenue (霞飛路) 39
Jordan Road (喬敦路) 48

K

Kinnear Road (開納路) 48
Kirk Road (寬古路) 23
Kraetzer, Rue (愷自邇路) 35

L

Lafayette, Rue (辣斐德路) 39
Lagrene, Rue de (喇格納路) 34
Lane (弄) 58
La Tour, Rue (拉都路) 37
Lay Road (蘭路) 68
Lemaire, Rue (李梅路) 35
Lincoln Road (林肯路) 49
Lloyd Road (勞合路) 28
Love Lane (斜橋路) 29

M

Macgregor Road (麥克利克路) 68
Mac Leod Road (麥克利奧路) 49

Magniny, Rue (麥尼尼路) 37
Magnolia Terrace (麥拿里) 63
Marcel Tillot (麥賽爾蒂羅路)37
March de l'Est (十六舖) 33
Marco Polo, Rue (麥高包祿路)40
Maresca, Rue (趙主教路) 38
Markham Road (麥根路) 28
Mathieu, Rue (麥底安路) 37
Medhurst Road (麥特赫司脫路)28
Meugniot, Rue (孟神父路) 38
Miller Road (密勒路) 59
Millot, Rue (糜鹿路) 35
Mission, Rue de la (興聖路) 42
Molière, Rue (莫利愛路) 38
Montauban, Rue (天主堂街) 42
Montigny, Rue (敏體尼蔭路)35
Morrison Road (瑪禮孫路) 58
Moulin, Rue de (火輪磨坊街)42
Muirhead Road (茂海路) 68
Museum Road (博物院路) 29

O

Observatoire, Rue de l' (天文台路) 38
Orion, Rue (奥利和路) 36
Outside Road (越界道路) 45

P

Paris, Route Prosper (姚主教路) 38
Pearce Road (比亞士路) 48
(被阿司路) 63
Penang Road (檳榔路) 48
Pères, Rue des (自來火行東街)42
Pershing, Rue (潘興路) 40
Petain, Avenue (貝當路) 39
Petiot, Rue du Lieutenant(貝禘鏖路) 37
Pichon, Route (畢勛路) 34
Pidgin-English (東洋英語) 23
Pocket District (ポケット地帶)62
Porte Nord, Rue du la (老北門街) 42
Prentice, Rue (普恩濟世路)40
Protet, Rue (典當街) 42
Public Garden (外灘公園) 30

R

Rabier, Rue (藍維靄路) 37
Range Road (老靶子路) 57
Ratard, Route (巨籟達路) 35
Remi, Rue (雷米路) 37
Road (路) 57
Robert, Rue (金神父路) 38
Robinson Road (勞勃生路) 47
Route 34
Rubicon Road (羅別根路) 47
Rue 34

S

Scott Road (施高塔路) 59
Seymour Road (西摩路) 28
Seward Road (西華德路) 68
Shang-hae (上海) 43
Shanghai (同上) 43
Siéyès, Rue (西愛咸斯路)37

Sikh Road (西克路) 25
Singapore Road (星加坡路) 48
Soeurs, Route des (聖母院路) 42
Street (街) 57

T

Terrace (里) 58
Thorburn Road (韜朋路) 69
Thorne Road (湯恩路) 59

V

Vallon, Route (環龍路) 38
Voisin, Rue (華成路) 35
Vouillemont, Rue (維爾蒙路) 36

W

Wagner, Rue (華格臬路) 35
Wantz, Rue (望志路) 37
Ward Road (華德路) 69
Warren Road (華倫路) 48
Wayside (匯山路) 69
Willow Pattern Tea House (湖心亭) 14
Wills Bridge (威爾司橋) 31
Winchester Road (文極司脫路) 28

Y

Yangkingpan English (洋涇濱英語) 23
Yates Road (同孚路) 28

（二）孤兒院　男女孤兒を收容し、男兒は六、七才に達すれば土山灣の育嬰堂に送り、一般教育と共に各種の技術を教へて生計の途を與へて居る。技術は木工、金屬、履物、圖畫、印刷、寫眞に分れ、製品は直ちに商品として販賣して居る。此の孤兒院で扱つた生徒は現在迄一萬數千名の多きに達すると云ふ。

最後に本文を執筆するに當り、テイトー師より寄贈を受けた「徐匯紀略」に負ふ處大である事を附記して置く。

徐家匯天文台は初め肇嘉浜の畔にあつて平屋造りであつたが、一八八〇年一層を增し、一八九七年擴充すると共に徐文定公の墓の東に別に新台を設けた。今の徐家匯天文台には、地震學部と氣象學部とのみあり、天文學部は佘山に、磁氣學部は崑山の陸家浜に移つた。世界六十餘箇所の天文台、氣象台と聯絡を採つて氣象報告を行ひ字林西報は每日之を揭載して居る。文化に寄與する處極めて大である。

(三)博物院　一八六八年韓司鐸(P. Heude)が天主堂の東に博物院を創始した。Musée Heude の名があるのは此のためである。創立者の志を繼いで日に日に蒐集物は益し、中國古物三千五百件の多きに及んだ。一九三〇年震旦大學內の北部に移轉した。自然科學の部では動物(約千點)、植物の標本あり、その中には全身灰色の長さ六尺餘の四足怪蛇がある。古物部には金屬類(約六五〇點)、玉器類、陶器瓦器類あり。沼澤介類學、中華自然歷史志、中國昆虫誌、中國植物誌、中國介蟲誌等の出版物がある。

(四)聖教雜誌社　一九一二年聖教雜誌(月刊)を創刊。天主教の教理、神學、哲學の外社會、經濟にも及び、徐家匯文化の宣傳機關である。

(五)聖心報館　一八八七年六月の創刊で、月一回聖心報を發行し、天主教の傳播に努めて居る。

慈善事業

(一)聖母院　一八五五年青浦に創設されたのを、一八六四年王家堂に移し、一八六九年徐家滙に移された。修女の團體で、拯亡會、獻堂會、徐匯女子關係學校を掌る傍、孤兒院(育嬰堂)女兒に刺繡裁縫を教へ、その製品は各界の歡迎する處であると云ふ。

匯中學の濫觴である。

(三)匯師中學　小學教師の缺乏に鑑み、一八二〇年創設され、原名は徐匯師範と云つた。

(四)徐匯女子中學　一八六七年創設で、もと崇德女校と稱した。生徒二百餘名あり。

(五)啓明女校　一九〇四年創設。天主教徒に非る者の女子を教育す。

(六)聖誕女校　一九二三年創設。献堂會なる中國女教士の團體があつて、その女教士が教授に當る。

(七)類思小學　匯師中學の附屬小學校で、比較的初期の設立であるが、一九一四年に至つて組織が完備した。

(八)聾啞學堂　聖母院が掌る。

(九)幼稚園

文化事業

(一)圖書館(藏書樓)　明末清初天主教の傳入當時より、マテオ・リツチ等が中心となつて北京に圖書を蒐集したが、十八世紀になつて支那に於ける天主教事業が中斷したゝめ、天主教徒が蒐集した圖書も散逸を免れなかつた。但し之等の圖書が現在の藏書樓の中核をなしてゐる譯で、同圖書館が天下に名あるのは此のためである。一八四七年天主教が復興してよりは、その中心は北京より徐家匯に移る事となつた。前述の通り洋漢書合計二十萬冊を藏有するが、天文台、修道院、徐匯中學等の藏本を合すれば大約三十萬冊に達すると云ふ。

(二)氣象台　一八七三年の創立となつてゐるが、初期耶蘇會士中の偉人達の科學工作に基礎を持つ事勿論である。明末時耶蘇會士が南京に觀象台を設けたが、その遺址は今猶存して居る。

た。奥行二五〇呎、幅三七呎、鐘樓の高さ一六九呎あり、堂内は三千人の會衆を容るゝに足り、祭臺十九座を設け、實に滬上第一の大堂である。

(二)耶穌會修院　一八四四年創立。一八四七年横塘の地より徐家匯に移り、一八六〇年現在の場所に設立。司鐸の住室と、大學院、初學院がある。

(三)修道院　大修院と小修院とに分れる。大修院は一八四三年毋心修院と名けて松江の地に設けられたのが前身である。一八七二年徐家匯に移轉し、一九一八年增築された。教士の住院、卒業生の修業道場である。小修院は一八四三年横塘に創立され、其の後所々を轉々としたが、一九一八年新天文台の南に新築された。

(四)聖衣院　一八六九年の創立で、一八七三年土山灣慈雲橋の東に移轉。嚴齋を謹守し、粗衣糲食をなし、寡欲清心、夜半と雖も起ちて祈禱禮拜し、克己修身の教女の修道院である。

教育事業

(一)震旦大學 (Universite Aurore) 一九〇三年震旦學院の名のもとに、今の天文台の地に開校し、哲學、羅典語、英語、佛蘭西語を教授したに始る。其の後學生の騷動があつて一時閉校したが、一九〇五年再開し、一九〇八年呂班路二二三號に移轉し、一九三〇年には博物院も此の地に移り、一九三六年廣大なる附屬圖書館も開館した。今事變で閉校した大學が多い中で、本校は經營を續行して居る。法政、工、醫の三料がある。

(二)徐匯中學　一八五〇年江南の他に大飢饉があり、徐家匯附近の人民で子弟を學校に送る資力がなくなり、子弟を皆天主堂に送つた。教士は之等子弟は教育するに充分なる腦力あるを認めて之を集めて教授したのが徐

公死後も上海の天主教は榮え、一六四四年前後には松江府内に天主教徒五萬餘に及んだが、十七世紀中葉以後清廷は天主教の傳教を禁じ、後數度の解禁があつたが、十八世紀中葉に至つて此の禁令は益々嚴となり。耶蘇會は解散の悲運に陷つたが、徐氏の子孫のみは正教を信じて惑はなかつた。

徐文公と利瑪竇

一八一四年になつて耶蘇會は勢を挽回し、一八四四年黄埔條約が成立して布教の自由が認められてから、上海天主教は復興時代となつた。初め會士は浦東の金家巷、青浦の横塘等に寓居したが、之等の地は上海より遠く、又土地が濕潤であつたゝめ、ゴテラン（南格祿）會長は、徐文定の紀念の土地である徐家匯の地に會士寓所を定めた。此處に初め小教堂を建てたが、一八四七年三月小教堂の側に土地を購入して修道院を建てたのが今の天主堂の前身である。徐家匯教會は宗教事業の外、教育、文化、慈善と各方面に及び、今之を概觀するのみでも容易でない。

(イ) 宗教事業

（一）天主堂○一八四七年の創立であるが、教友が増すと共に狹隘となつたので、一八九六年右側に新堂を建て

ちらが納得の行く迄説明して下さる。徐家滙は入り難い所であるが、一度入ればその親情に打寛ぎ得る所である。

二、過去と現在

徐文定公、名は光啓、字は子先で、一五六二年四月二十四日の生れである。幼にして穎敏、好學勤讀し、文章亦儕輩に抽んでてゐた。二十歳にして既に金山衛(上海の南方)の秀才であり、一五九六年廣東韶州の教授であつた時、伊太利宣教師カッタネオ(郭居靜)と知つて、天主教に關する知識を得た。一六〇〇年北京に赴く途中南京で西教士マテオリッチ(利瑪竇)に謁してその學識に驚歎し、一六〇三年(明萬曆三十一年)徐文定公は天主教を奉ずるに至つた。一六〇四年進士となり、北京にてリッチの弟士となつた。天文、曆法、算數、火器の學を習ひ、兵器、屯田、製鹽、水利の諸書を編した。公の死後彼の六十卷の農學書は勅命により出版された。

一六〇七年公の父が永眠した爲め歸滬し、翌年冬カッタネオ來滬して上海南門の地に初めて教堂を建てて天主教を傳導した。一六二八年明崇禎帝は公を重用して禮部侍郎を授け、次で禮部尙書に叙せられた。公の入閣後は極力科學を提唱し、又西教士を重用した。一六三三年十一月八日公は逝去した。公は生前公益事業、研究等に私財を消費したゝめ、葬儀を營む金も殘つて居らなかつたと云ふ。一六四一年徐家匯肇家浜北原の賜域に葬られた。墓前の原碑は已に無いが、石人、石馬、革表、牌坊等は殘存して居る。一九〇三年及び一九三三年の三百周年紀念に修築した。石坊の中額には「文武元勳」、右には「熙朝元輔」左には「王佐儒宗」、の額がある。

今度は手紙で日時を打合せて置いて、五月七日第二回の訪問を行つた。今度は約束通りなのでテイトー師が快く迎へて下さり、圖書係のラプラン師に紹介された。處が高齢の同師は佛蘭西語が大部分で、それにちよいちよい支那語が加はるのでよく合らぬ。一人で話して一人で領いて居られる始來。兎も角先づ洋書の書庫に案内され次で階下の漢書の部に導かれたが、洋書八萬冊、漢書十二萬冊の尨大な古書、貴重書が公開される事なく、此の徐家匯の聖域に安眠して居る樣は實に偉觀と云はねばならぬ。我が東亞攻究會文庫も上海の地で誇り得るものであるが、此處の圖書に比べると足元にも寄れない。私は徐家匯教會の經營である震旦大學の圖書舘が出來た時、此處の圖書が一部でも同大學に移されたのではないかと思つたが、さうでなく昔の儘の偉容である。公開もされないのに常に數名の舘員が整理に當つて居るのであるから、その保存のよい事や、排列が整然として居る事は云ふ迄もない。漢書の書庫で特に時間を乞て、萬歴、康熙、乾隆の上海縣志を見せて貰つた。之等は何れも貴重書で、私は常々入手し度いと思つても入手出來ぬ處か、一瞥だになし得なかつたものであるが、短時間ではあつたが遂に意を全うする事が出來た。

夕方ともなつたのでラプラン師に厚く禮を述べ、天主堂の尖塔を仰ぎ見つゝ、孤兒院の側を通り徐匯中學の前に來た頃、後から私の名を呼ぶ者がある。誰かと思つて振返るとテイトー師である。氣の毒にも喘ぎ喘ぎ云はれるには、もう今度來る時には手紙でなく、前の日に電話で打合せて呉れれば何時でも見せるから、之を知らせに來たのだとの事であつた。此のテイトー師にしろラプラン師にしろ、流石宗教家であるだけ、謙遜で懇切丁寧であるのには頭が下つた。ドアーを自分で開けられても、決して自分が先に入られようとはしない。又何事でもこ

が推薦狀を欲するのであるから、本館に行つてその由を述べて呉れ、との事であつた。本館に行つて色々交渉して貰つた結果、愈々推薦狀を書いて貰ふ事となつた。但し此の種の書類は滅多に發行せぬとの事であつた。

四月二十九日天長節の日は午後から暇があり、推薦狀が先方に到着して居る頃と思つたので、佛蘭西租界の赤バスに乘つて、租界内を曲折して徐家匯に到着した。天主堂に行つても仕方がないので、その北隣の徐匯中學の一部分と想はれる建物に入つて行くと、家の中から合唱の聲が聞える。刺を通ずると待つ間もなく黑服白髭の佛蘭西僧侶が現はれた。

私は佛蘭西語の會話が出來ぬので英語で話しかけると先方も英語で話される。ゆつくりした調子なので大變好都合である。手紙を昨日出したが受取つたかと尋ねられる。之を否定すると、その手紙のコピイを持つて來られて、書いてある佛蘭西文を丁寧に英語に譯される。時々適當な譯語に困られる事があるので、私が知つて居る場合には助け船を出す。詰り總領事から推薦されて居るのであるから入館せしめるが、先方も都合があるから、豫め訪問の日時を通知して貰はぬと困るとの文面である。私も遠路態々訪問したのであるから一寸でも見せて貰ひ度いと賴むと、テイトー師はニコニコしながら、

"You know, we are busy. we are in charge of many poor Chinese. Our bibliotheque……"

と英語と佛蘭西語とがごつちやになつて來る。仕方がないので圖書目錄でも戴けないかと賴むと、目下準備中とのこと。歸宅して見ると果せる哉テイトー師よりの手紙が來てゐた。かくて第一回の訪問は失敗に終つた。

徐家匯

一、訪問記

徐家匯教會には二度行つた事があり、その側は數度も通つたが、教會が世界に誇る附屬事業である。天文台博物館、圖書館は遂に今迄見る機會を得なかつた。特に上海の歴史地理的研究に從事して居る私としては、貴重な圖書を多數藏有して居る圖書館には羨望の眼を向けて居つた。

先づ入館手續方法を知るため、直接教會宛照會して見るのが捷徑と考へて手紙を出した。處がいくら待つても返事が來ぬので苛立つて、總領事發行の身分證明書を持つて直接訪問して見ようと考へ、學校長の副申を添へて身分證明書の下附願を總領事に提出する一方、念のため今一度教會宛手紙を出した。

下附願は總領事館の學務關係の部屋に行つたらしいがすぐ電話で、今迄此のやうなものは發行した事がないから見本を書いて出して吳れ、との事であつたので早速見本文をタイプして提出して置いた。處が此の類の書類は旅劵課で發行するから、同課に行つて吳れ、と云ふ返事と共に先に提出した下附願は返送されて來た。

兎角する中徐家匯教會から佛蘭西文で認めた返事が來て、同圖書館はプライヴェイトのものであるから、公開せぬものであるが、總領事の推薦ある方には特に見せる、との事であつた。此の返事を持つてアスター・ハウス・ホテル內にある旅劵課に出頭すると、色々研究された結果同種のものは旅劵課の關與せぬものであり、特に先方

又ドライデン(一六三一―一七〇〇年)は「眠き罌粟」と歌ひ、プライアー(一六六四―一七二一年)は「紅き色のはにかめる罌粟」と詠んで居るが、之等は何れも Papaver sonniferum の事で、ヒナゲシではないやうである。花詞でヒナゲシは「慰安」を表はすのに、罌粟は「睡眠」とか「忘却」の心である。

五、結論

虞姫墩とか虞姫廟とかは他の地方にもあるのかも知れぬが、上海の虞姫廟に就ては、その起源は分明ではないが、一八四七年里人が重建したのを、一八六一年賊軍が之を破壞し、一八八九年頃又重建され、その後修理に修理を加へて今日に至つて居る。

虞美人草に就ては、希臘神話から由來する多くの花名と同樣にさして根據あるものでなく、虞姫を偲ぶよすがとなる程度のものである。

鴻門玉斗粉如雪　十萬降兵夜流血　咸陽宮殿三月紅　覇業已隨煙燼滅　剛强必死仁義王　陰陵失道非天亡
英雄本學萬人敵　何用屑屑悲紅粧　三軍散盡旗旌倒　玉帳佳人座中老　香魂夜逐劍光飛　青血化爲原上草
芳心寂寞寄寒枝　舊曲聞來似斂眉　哀怨徘徊愁不語　恰如初聽楚歌時　滔滔逝水流今古　漢楚興亡兩丘土
當年遺事久成空　慷慨尊前爲誰舞

我國へは何時頃から輸入されたものか分らぬが、「ヒナゲシ」と云ひ、雛罌粟の漢字が當てゝある。倭訓栞後編に、

けし「罌粟ヲ云フ、芥子ノ音ヲ謬稱セシナルベシ」

とある。然し虞美人草や罌粟は歐洲原産のものであるから、今少しその方面の文獻に徴して見よう。

罌粟に三種類あつて、(一)レッド・ポピイ(フヰールド・ポピイともコーン・ポピイとも云ふ)、(二)スカーレット・ポピイ、(三)ホワイト・ポピイで、此の第一の學名で Papaver rhoeas (赤い罌粟の意)と呼ばれる種類が、「ヒナゲシ」即ち虞美人草に當り、第二のものは別種であるが、第一種と餘り區別されて居らない。第三のものは學名で Papaver somniferum (睡眠を催す罌粟の意)と呼ばれ、この種子から阿片を採る所謂罌粟である。

罌粟の種子から阿片を採つて、睡眠劑として喫煙する事は早くから知られて居り、英國の例で云へば沙翁に、

罌粟でも、惡魔林檎（マンドラゴラ）でも、世界中のどんな睡劑（ねむりぐすり）でも、もう昨日までのやうに心持よく眠ることは出來ない。

（オセロ一三幕三場三〇〇―三三三行）

小高い所へ行く。地圖で分る通り、昔は蘇州河が迂回して、その地點に廟も墩も同一河岸にあつたものが、舊江以南に近路の新河が一直線に掘られたので、墩だけが島に殘された形にあつてゐる。昔は可成の小山の上に虞姬の墓があつて、そこからは天氣のよい日には崑山が見えたとの事であるが、今は墓もなく、小山も農夫が平たく耕して了つて、野猫（ヤーモウ）の洞穴が隨所にあるだけである。小山の北に三基の石柱が深く埋つてゐて、之は太平賊の亂の時賊軍が大砲の基台として使用したとの事である。小山一面に芋が植ゑてあるので、虞美人草も咲きさうになく唯見るものは長閑な田園風景と、蘇州河を上下する民船や筏のみであつた。

四、虞美人草

虞姬の事と云へば、古來有名な麗春花即ち虞美人草を逸してはならぬ。之は罌粟科の一年生又は二年生草本で高さ六十糎内外で全株に粗毛を生ずる。葉は羽狀に深く裂け、裂片は鋸齒を有する。七・八月頃莖頭から花梗を抽き、徑五—十糎の四瓣花を開く。花色は紅・紫・白・絞など數種ある。壺狀の裂果を結び、中に微小な種子を藏する。

虞美人草の由來に就ては類說に、「褒斜山谷中、有虞美人草、狀如雞冠、大而無花葉、皆相對、或唱虞美人曲、則兩葉如人撫掌之頗中節拍」とある。但し褒斜山谷とは陝西南部の山であるから、虞姬の史實と關係あると思へない。古文眞寶の注には、「項羽死して、虞姬自刎す。其墓上の草、人呼びて美人草と云ふ」とあるが、その墓の所在に就ては知る由もない。又虞美人草と云へば曾鞏の詩をすぐに想出す。

讀された文字である。今度の事變で天井が落ちたとの事で、村人がせつせと修理に當つて居る。村人はこれはユーチーニヤン〳〵(虞姬娘娘)だと敎へて呉れる。

何處で金を苦面するのか知らぬが、此の物價の高い今日、せぬでも濟む廟をこんなに修理するからには、祖先崇拜と云ふ觀念以外にそこに何かなければならぬので、里人に之を糺すと「病氣、結婚、安產その他何によらず效驗あらたか」と云ふ返事を得た。此のあたりで蘆澤君の上海語が大に役に立つ。再度廟内に進んで見るとおみくじ帳があり、虞姬部の部を見ると、

笑裏藏刀豈可猜　鮮花移向右邊栽

一言聞報君消息　家道中門與復衰

三女莫相逢　盟言說未通

門裏心肝桂　編素見重重

註解　三女姦字也與絹人相犯情

必成疾病恐惹是非宜謹愼

とある。昔はお祭の時には、里人が多勢で轎子に虞姬像を乘せて擔つて步いたとの事であるが、今はその轎子はない。

私達は之で今日の主要見學は濟んだのかと思つて、廟に些少のお賽錢を上げて歸りかけると、此處は廟であつて、虞姬墩そのものは別にあると云ふ。之は是非とも見ねばならぬと、廟前の渡船で蘇州河を橫斷して河の北の

へ來た。迚も此處は一人や二人で來れる所ではない。もう一生二度と來れぬかも知れぬ。文献のみで知つて、實物を見た事のない私は、あの赤煉瓦の廟がそれだと聞いて、近づくにつれて恥しいながら胸がどきどきする。どんな物があるか、どんな古記錄が殘つて居るか、久しい前からの懸案であるだけ、好奇心はいよいよ研ぎ澄まされて、一行のトップを切つて進む。

來て見ると廟前はすぐ蘇州河で、民船が慌しく往來し、縣志にある如く二本の公孫樹が高く聳えて廟の標識となつてゐる。廟内は支那兵の駐屯所になつて居り、一行が着くと村人も群り來り歡迎して吳れた。

廟内に古ぼけた帳があり、その上の正面には「神靈感應」「虞府正堂」の二面の扁額がある。帳をあらけなく左右に開けば、そこには虞美人がありし日の姿の儘椅坐してゐる。その瞬間脊筋にヒヤリとしたものを感じた。いくら虞姬廟だからと云つて、虞美人の實物大の像が、こんなに着裝つて安置してあるとは思はなかつたからだ。こんな事だつたら村人の前でこんなに亂暴に開帳するのではなかつたにと後悔するが後の祭だ。尙よく兩側を見れば、虞姬像を守るが如く施相公と上天王との像もある。二千年前英雄項羽の寵を一身に鍾めた美姬であるだけ、容姿端然として而もチヤームがあるのは、餘程支那人の工人も苦心したものと思ふ。

此の間私は杭州に行き、あの名所舊跡に無闇矢鱈と邦人の落書が多いのを見て暗然としたが、此處は流石邦人も來ぬ僻地であると見えて、落書がないのは嬉しい。正面の扁額に傍書があつて、

龍飛大淸光緖十五年歲次己丑嘉平月穀旦、神靈感應、安徽古將信士鮑有餘敬獻、徐鄌敬書

とあるが、之は鈴木君が梯子をどこからか持つて來て上に登つて塵埃にまみれた板を、雜巾でこすりこすり判

八時出發の豫定の處、地圖や其の他携帶品の準備で大分遲れたが、蘆澤君、民團の西原君、第四國民學校の鈴木君、女子商業學校の奥山君計五名の顏觸も揃つたので、いよいよ自動車で出發。運轉は腕に自信あるとの事で蘆澤君にお願する。法租界霞飛路を西進して租界外に出ると、すぐ復旦大學附屬中學があつて、その構内に入つて李鴻章の銅像を見、法華寺に詣でて、其處で都合よく市政府滬西分局に勤めて居られると云ふ錢寶榮先生を道案内にお願する事が出來た。實は今日の見學の一大目的は、虞美人が祠つてあると云ふ虞姬墩を訪問するにあり、錢先生がその場所を知つて居られると云ふので、非常に好都合であつた。次で觀音禪寺を見たが、之等の事は別の機會に讓るとして、一路北進して蘇州河畔に出、更に西進して比亞士路を走り、北新涇市と云ふ、六百年位前の上海を彷彿せしめるやうな小村を過ぎて、比亞士路の最西端に來て了つた。道案内の錢先生自身も位置がはつきりしないらしく心細くなつて來た。

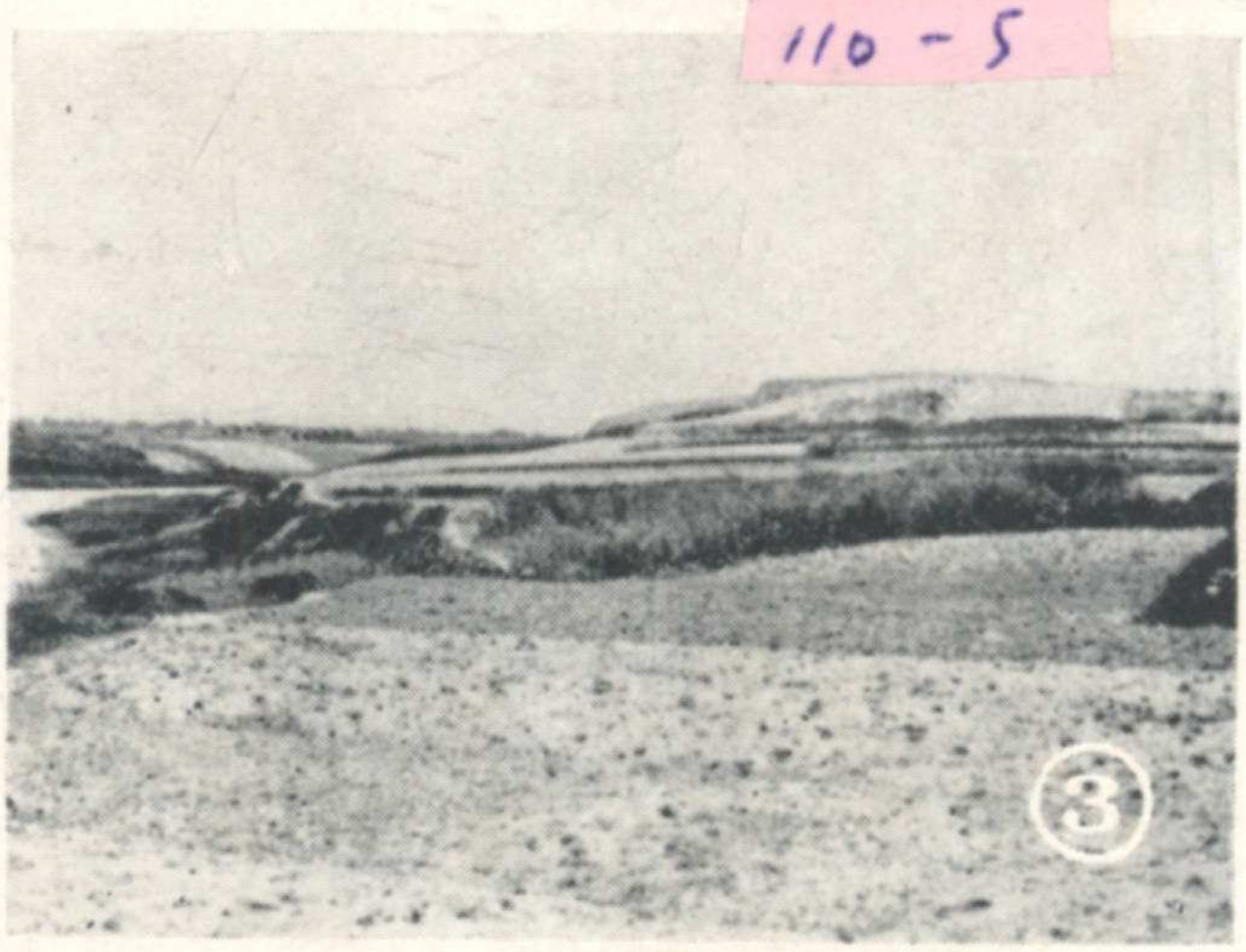
縣志類で私が前以て研究した位置は、碑坊路を北進して蘇州河畔に出た所と云ふ見當だが、そこは一面の田畑で、徒歩で北進出來るやうな小路さへない。村人に數度尋ねて見ると大分行過ぎて居り、而も自動車で行ける場所でないと云ふ。支那の里數で三里あると云ふのを聞いてがつかりしたが、然し此處まで來て今更歸るのも殘念であり、後進して一軒茶屋に歸り、そこに自動車を預けて徒歩となつた。

圖に示す田舍道を經て蘇州河畔に出た。此のあたり今度の事變で激戰があつたので、未だ骸骨がそこら中に散亂してゐる。又田舍道に出て里人に問ふ事數度。問へばどの支那人でも知らぬと云ふ者がないのをみて、虞姬廟は有名な所であると合點した。恐らく三粁も歩いたかと思ふ頃、姚家宅と云ふ小村落を經て、いよいよ待望の所

1 虞姫廟

2 虞姫廟内に祀る虞美人の像

110-5



110-6

3 右手の小高い丘が虞美人を葬つたと傳ふる虞姫墩、左に呉淞江（蘇州河）舊江が見える

4 虞姫墩の上にある長髪賊が大砲の基石に用いたといふ石

二、史　實

虞姬に關する史實は甚だ乏しい。十八史に一寸記述があるが、世人周知のものである。

「漢王因りて諸軍を帥ゐて項羽を垓下に圍む。項王兵少く食盡きて重圍の中に陷り、壁を圍む者四面に楚歌するを聞き、乃ち驚きて曰く、漢已に皆楚を得たるか。これ何ぞ楚人の多きやと。起ちて帳中に飮む。將士皆悲歌慷慨し、悽愴の氣座に滿つ。項王乃ち寵する所の虞美人をして舞はしめ、自ら歌て曰く、力拔山兮、氣蓋世兮、時不利兮、騅不逝、騅不逝兮、虞兮虞兮奈若何。歌ふこと數曲、美人これに和す。項王淚下ること數行、左右皆泣きて能く仰ぎ視る者なし。虞姬又淚を押へ、纖手劍を把りて自ら刎ねて死せば、項王乃ちその駿馬に跨がり、八百餘騎を從へて夜圍を潰して南に出づ。」

歷史辭典を見ても之以上の記錄はなく、曾子固の「虞美人草」も單なる抒情詩で、虞姬は何國人で、その死骸は如何に處分されたかに就ては何れも不明である。唯項羽は徐州附近の人で、叔父項梁と共に兵を蘇州府に起して居るので、之が虞姬の素性に就て多少の暗示を與へてゐるに過ぎない。即ち虞姬は蘇州府の人で、死後その死體は鄉里に運ばれて埋葬されたものとすれば、蘇州河上流の虞姬墩も、一片の傳說として葬り去る事は出來ぬ。

三、訪　問　記

昭和十六年四月二十七日（日曜日）七時起床。少し寢過ぎたので慌てゝパン食を濟ませ、蘆澤君を訪問す。午前

虞姫墩

一、研究の發端

邦人側には殆ど知られて居らぬが、支那側の案內書には簡單ながら虞姫墩(ユーチートン)の項がある。然し私が興味を持ち、是非行つて見度いと思ふやうになつたのは、縣志に次のやうな記載を發見してからである。

虞姫廟在八圖中塑女神像廟前有大銀杏二株後江坍毀國朝道光二十七年里人張化麒等捐募重建咸豐十一年燬於賊

(同治上海縣志卷三十一)

道光二十七年即ち西歷一八四七年里人が重建したのを、咸豐十一年即ち一八六一年長髮賊が之を破壞した。

上海縣續志(卷二十七)には更に詳しい記述がある。

虞姫墩　嘉慶志古上海圖作漁姫墩　前志寺觀有虞姫廟　或云當作漁姫廟今訪稿據諸翟人朱孔陽歷朝陵寢備考定墩名爲虞姫以符前志廟名陵寢備考見前志藝文在三十保八圖俗名野雞墩

沈學淵詩

漢殿秋風雌雞啼江東坏土拜虞兮項劉不是爭墩客誰把墩名誤野雞

之等の記錄から見れば、古くから漁姫墩(ユーチートン)又は虞姫墩(ユーチートン)として知られた墓があつたが、訪客が恐らく戯談半分に誤つて野雞墩(ヤーチートン)と呼ぶに至つた。

3 支那開港場誌　東亞同文會編　大正十三年

4 支那租界論　植田捷雄著　昭和九年

5 上海開敎六十年史　東本願寺上海別院發行　昭和十二年

同院の歴史を知るのみでなく、明治六年頃よりの上海に於ける邦人の活動を知る絶好の資料である。

6 江南文化開發史　岡崎・池田著　昭和十五年

7 上海風土記　澤村幸夫　昭和六年

8 對支回顧錄　上下　昭和十一年

ル・スタイルには好感が持てぬ。佐藤弘氏が「大幇の都上海」と題して邦譯して居られる。

21. Shanghai. E. Thorbecke. 1940.

繪と寫眞入の美しいクリスマス・プレゼント用、又は應接間向の通俗書である。一九四〇版であるのに邦人居留民數を四萬としてゐる。

22. Annual Reports of S. M. C

年次報告書は工部局も公董局も毎年夫々英佛文で發行してゐる。工部局のには華文譯もある。

(附記)英文上海史で最古のものはの J. W. Maclellan の The Story of Shanghai. 1889. であるが、稀覯書であるため筆者は未だ見る機會を得ない。

三、邦　書

1 上海新報　上海修文書館發行

明治二十三年六月五日の第一號より、同二十四年五月二十九日の第五十二號（終刊號）に至るもので、もと井手三郎氏が藏せられてゐた時、水口民次郎氏が重要記事を拔萃されたのが殘つて居るのみで、井手氏の死後は原本は行方不明である。筆者は水口氏の好意によりこの筆記を見る事が出來た。

2 上海案内　大正二年初版同十三年第十版

金風社の發行で、一般案内書として古くから知られて居り、洋文書華文書のそれと比べて一段勝れて居る。

13. Sidelights on Shanghai. L. Z. Yuan. 1934.

上海のみでなく、支那各地に就ての繪入雜記。

14. All about Shanghai. The University Press. 1935.

今迄掲げた參考書を礎にして出來た通俗案内書であるが、年代表の附錄があつて便利である。

15. The Shanghai Problem. W. C. Johnstone. 1936.

米國ワシントン大學の政治學の教授で、從つて此の書も政治的に見た上海史である。越界道路問題は興味あり有益に扱はれて居る。

16. Shanghai. M. Karns & P. Paterson. 1936.

上海歡樂街案内を揶揄的に書いたもの。

17. The Diamond Jubilee of the International Settlement of Shanghai. 1938.

珍らしい寫眞や繪の滿載してある上海史で、上海研究資料を提供して吳れる處が多い。

18. Shanghai: City of Refugee. The China Weekly Review. 1940.

最近の楊樹浦への猶太人の流入を詳述する。

19. Guide to Shanghai. American Express Co. 1930.

20. Shanghai: City for Sale. E. O. Hauser. 1940.

ハウザーは米國の極東評論家で、上海の裏面史を面白く描いて居るが、そのジャーナリスチツクなサチリカ

れた。

8. Histoire de la Concession Francaise de Changhai. B.Maybon et J. Fredet. 1929.

佛租界のみの歴史を扱ふ。公董局は人名を盛んに路名に採用するで、路名の研究に役立つ。

9. The Status of Shanghai. Ching-lin Hsia 1929.

共同租界の歴史的回顧で（實は支那側から見た租界侵略史で）、更に外國と支那との提携に依る租界の發達と可能性とを論じた、夏敬觀の英文著作である。

10. Report of the Hon. Mr. Justice Feetham to the S.M.C. 4 vols. 1931.

工部局は共同租界行政の改革を圖るため、一九三〇年南阿聯邦の高等法院判事フヰータム氏を招聘して、上海の政治問題を研究せしめたのに對する回答が、此の報告書四卷となつて表はれた。先づ歴史的に掘下げて、それより將來の見透しを得んとしたものだが、此の尨大な報告書も、その基調とする處は、外支協調の新しい政治團體を構成して租界を治むるのがよいとしてゐるが、工部局は未だ之を採用實行してゐない。

11. Shanghai Country Walks. E. S. Wilkinson. 1932.

上海の郊外散歩と云つても、外人に都合のよい滬西方面のみの散歩路を扱つたに過ぎぬ。但し大いに得る處がある。

12. The Map of Shanghai. S. M. C. 1933.

工部局監修の地圖で、正確な筈だが、文字が不鮮明なのが缺點である。

支那の門戸は即ち上海である。此書は一九〇〇年前後の上海風物の想出である。著者は婦人であるだけあつて支那人の風俗結婚上海の買物、慈善事業等に纎細な筆を振つて居る。

4. Shanghai: A Handbook for Travellers and Residents. C.E.Darwent. 1920.

著者は上海聯合教會の牧師であつた人で、上海に深い愛着を持ち、それが紙面に溢れてゐる。上海には立派な寺院があり、日光東照宮を除いては日本にも匹敵するのがあるまい、とは著者の序文の一節である。

5. The History of Shanghai. G. Lanning & S. Couling. 1921.

可成權威あるもので、ランニシグ氏はパブリック・スクール（現在の公立及漢壁禮西童男校の前身）の校長であつたが、工部局より上海史を著述する事を委囑され、十三年間資料を蒐集して起稿したが、不幸一九一九年病で倒れ、次でクーリング博士が繼續して一九三一年第一卷を出版する事が出來たが、同博士も亦一九二二年倒れて完成するに至らなかつた。從つて同書は上海史の初期の部分を扱つたに過ぎぬが、史實の詳細を極めて居るので、正確なる點に於ては比肩するものがない。因にランニシグ氏所藏の支那に關する貴重書は、その死後競賣に付され、その大部分は我が居留民團の東亞攻究會文庫（同文書院大學に保管）に編入せられてゐる。

6. The China Who's Who. C. Lunt. 1923.

7. A Short History of Shanghai. H. Pott. 1928.

手頃な上海史で、著者は上海聖約翰大學の總長であつて、「支那史」の著作もある。初期の時代より一九二七年頃迄を扱つて居る。昨年土方・橋本兩氏は「上海史」、帆足・横谷兩氏は「上海の歴史」と銘打つて邦譯出版せら

28　上海新地圖　商務印書館印行　一九三八年

地圖は多くのものを參照したが、路名・地名の漢字に就ては右のものが正確なやうに思ふ。上海の小路に就ては昨年宇宙輿地學社より「上海里衖詳圖」なる便利と思へる地圖書が發行されたが、一體に杜撰な上に吾々に親しい北部方面は極めて待遇惡く、敏德坊も千愛里もない。

29　中國古今地名大辭典　商務印書館

30　吳淞江　吳靜山著　一九三五年

31　其の他通俗案內書には「上海門徑」一九三一年、「大上海指南」一九三六年、「上海新指南」一九三九年等がある。

二、洋書

1. Guide to Shanghai. Hotel Metropole. 1903.

卷頭の上海小史は有益な文字である。此の外各飯店から古く案內書類が發行されたが、今では何れも入手し難いものとなつてゐる。

2. Historic Shanghai. C. A. Montalto de Jesus. 1909.

佛租界公董局から資料を得て編輯したもので、各種の圖版があつて有益である。

3. The Gateway to China. M. N. Gamewell. 1916.

21　點石齋書報　十六卷

之は一八八五年頃より發行された書報を聚めたもので、當時の珍奇な時事を畫にし、それに說明文を附けたものであるが、上海に關する事柄が多い。

22　上海鄉土史　李維淸著　一九〇七年

縣志類より拔萃して、敎科書向に編輯したもの。

23　上海縣竹枝詞　秦榮光著　一九〇八年

七絕の土俗、歷史地理的瑣事を咏じて、之に註したもの。參考になる部分が多い。

24　上海租界問題　王揖唐著　一九二四年

書名の如く租界問題を論じたものでなく、歷史地理的案內書である。

25　戊申全年畫報　三十六卷　時事報館印行

前記の點石齋畫報に類し、一九〇九年發行。

26　繪圖騙術奇談　掃葉山房石印

27　上海研究資料　正續二卷　上海通社發行

主に大晩報に揭載された記事を取捨選擇したもので、佛租界、南市の路名の起源の外各種雜多な且有益な項目に亘つてゐる。必讀の書である。

之等の文書は何れも官廳當局の編輯にかゝるものであるが、何處迄信用出來るか疑問を持てば際限がない。嘉慶上海縣志でも試みに其の卷十七を採れば「王氏顧蓁の妻、年二十にして夫を失ひ、家貧にして子無し。四十四年節を守る」と云ふやうな節女傳で、全卷百十七頁此のやうな記錄で埋つてゐて、支那婦人の貞操觀念の强かつた事に驚くのであるが、此のやうな澤山の例に誤記又は虛記がないとは云へない。古地圖でも大ざつぱなもので、之等には餘程科學的批判を加へる必要がある。然し私の此の小著は、之等の縣志類がなければ完成しなかつたので、深く感謝する處である。

18　上海掌故叢書　第一集　十卷　上海通社發行

之は古文書蒐集の勞が省けて便利である。明・清時代の上海に關係のある天文、倭寇、滬城、製鹽等に及ぶ記錄の集成である。

19　滬游雜記、四卷　葛元煦著　一八七六年

著者が同治年間（一八六二——一八七四年）上海に寓居してその間の見聞を收錄したもので、開港直後の上海の情景、地理風俗を偲ぶのに面白い。但し同書は王韜(紫詮)の「瀛壖雜志」から勝手に拔萃した跡が見えるとの事である。

20　上海繁昌記　三卷　藤堂蘇亭編　一八七八年

之は江戶の人藤堂蘇亭なる人が來滬して、前揭の滬游雜記を入手して江戶に持歸り、之に訓點傍註を施して三卷に纒めて印行したもので、日本文の傍註は簡單であるが要領を得て正確である。

5 乾隆上海縣志　十二卷　一七五〇年

清の乾隆十五年知縣李文耀が監修し、葉承が編した。前記の圖書館にある。

6 乾隆上海縣志　十二卷　一七八四年

清の乾隆四十九年知縣范廷杰が監修し、皇甫樞、喬鍾訴等が編纂した。徐家匯圖書館にもなく、南京國學圖書館にあると云ふ。

7 嘉慶上海縣志　二十卷　一八一四年

8 同治上海縣志　卅二卷　一八六七年

9 重脩華亭縣志　廿四卷　一八七八年

10 光緒南匯縣志　廿二卷　一八七九年

11 嘉定縣志　卅二卷　一八八〇年

12 上海市自治志　八　卷　一九一五年

13 上海縣續志　三十卷　一九一八年

14 江灣里志　十五卷　一九一九年

15 法華鄉志　八　卷　一九二二年

16 民國上海縣志　二十卷　一九三五年

17 川沙縣志　廿四卷　三一九六年

參考文獻

一、漢書

1 弘治上海志 二卷 一五〇四年

明洪武元年（一三六八年）類彧が上海縣志編纂に着手したが完成せず、弘治十七年に至つて知縣郭經が監修して成本した。現在は浙江寧波范氏の天一閣に一部を秘藏するのみである。筆者は民國二十六年上海市通志館が複版したものに依つた。最古の上海縣志である。

2 嘉靖上海縣志 八卷 一五二四年

明の嘉靖三年知縣鄭洛書が監修し、高企が編した。現在は北平圖書館、南京圖書館に藏せられてゐる。筆者は民國二十一年百部限定にて複版したものに依つた。

3 萬曆上海縣志 十卷 一五八八年

明の萬曆十六年知縣顏洪範が監修し、張之象が編した。徐家匯圖書館が藏有する。

4 康熙上海縣志 十二卷 一六八三年

清の康熙二十二年知縣史彩が監修し、葉映榴が編した。徐家匯圖書館が藏有する。

海能路 (Hannen Road) 一八九一年總領事となつた Sir Nicolas Hannen より。

Market Street 狄思威路から東西華德路と東百老匯との中間を走る。虹口市場があるから此の名があるのであらう。

伯頓路 (Purdon Road) 開港初期よりの亞米利加商人で、一八七四―六年、一八九二―三年工部局市參事會議長となつた。

施高塔路 (Scott Road) Scott, Harding 商會に屬した J. L. Scott より由來。一八九四―七年工部局市參事會議長となつた。現在の鴨綠路を昔施高塔路と云つたが、新路が出來るに及んで路名の移轉が行はれた。

湯恩路 (Thorne Road) 英國の茶商 Conelius Thorne より。

楊樹浦

兆豐路 (Chaoufoong Road) Jenner Hogg & Co. の華名。格蘭路(Glen Road) 同路內の土地を所有して、こに居住したグレン大尉を紀念するため。一九三〇年現在の如く改稱した。

公平路 (Kungping Road) Probst Hambury & Co. の華名で、ハンブリー氏に就ては本文中漢璧禮路を參照。

周家嘴路 (Point Road) 楊樹浦の東端が黃浦江に突出して所謂楊樹浦ポイントを作つて居る。そこより楊樹浦の北方を東西に走る延々たる長路で、周氏の家があつたから支那名で周家嘴路と呼ぶ。

滬西

Crescent Avenue 極司非而公園附近の小路で、クレッセント即ち三日月は Brunner Mond 商會の商標であつた。

羅薩納路 (Lucerne Road) ルサーンとは和名でムラサキウマゴヤシ。

凱旋路(Keswick Road) ジャーディン・マヂソン商店に勤めた William Keswickより由來。一八六五—六年工部局市參事會議長を勤めた。

虹口

阿拉白司脫路 (Alabaster Road) Sir Chaloner Alabaster を紀念する道路で、彼は一八五五年には領事館の通譯であつたが、一八六四年には會審衙門 (Mixed Court) の最初の判事となり、ゴルドン將軍を援助する處大なるものがあつた。一八八四—七年には上海の總領事代理となり、一八九二年廣東の總領事となつた。

白保羅路 (Barchet Road) 同師は亞米利加宣教師で、亞米利加裁判所の通譯官でもあつた。

狄思威路 (Dixwell Road) 一八七〇—一年工部局市參事會議長であつた G. B. Dixwell より。

Fortune Terrace ロンドンの農藝協會の植物蒐集員である Robert Fortuneに由來する。一八四三年支那に渡來し、支那から印度に茶を輸出したりした。

Route Lorioz 前歐洲大戰で戰死した Camille Loriozより。

Route Lorton 前歐洲大戰で散華した Francois Lorton より。

Route Magy 前歐洲大戰で戰死した Francois Leonard Alfred Magy より。

菜市路 (Rue de Marche) 市場の路。

馬斯南路 (Rue Massenet) 十九世紀の佛蘭西作曲家より。

麥陽路 (Route Mayen) 絹絲の檢査官であつたが、前歐洲大戰で戰死した。

邁而西愛路 (Rue Mercier) 一九一四―一九一八年白耳義教會の高僧であつた。

白爾部路 (Rue Paul Beau) 一九〇一年當時の駐支公使。

鐵士蘭路詳しく記せば Route Guy Picard Destelan と Route Herve Charles Louis Picard Destelanとの兩路があり、兩路名の主共前歐洲大戰で戰死した。

巴吉路 (Route Pottier) 一九〇〇年當時東洋艦隊の司令長官。

Route Riviere 一八八三年東京で殺害された陸軍少佐。

太古路 (Rue de Taikoo) Butterfield & Swires の華名。

Route Voyron 一九〇〇年當時の佛蘭西東洋艦隊の司令官。

Route Winling 前歐洲大戰で戰死した Jerome Antoine Winling より。

Route Bridou 西南部の小路で、一九一〇—一九二〇年の佛商人名。

格洛克路 (Rue Clarke) 六八年間支那沿岸で暮して、一九三一年八七歳で往生した Brodie Clarke より。彼は一八六五年聖アンドリュー協會の最初の會員となり、一九〇〇年には義勇隊の隊長となつた。寗波路附近の小路。

永安街 (Rue Colbert) 佛蘭西東洋艦隊の軍艦名。

Route Cohen 前歐洲大戰で戰死した Andre Samnel Cohen より。

Route Culty 前歐洲大戰で戰死した Charles Culty より。

Route Delastre 前歐洲大戰で戰死した Rene Delastre より。

Rue Delaunay 印度支那の銀行員であつたが、前歐洲大戰で散華した。

格羅希路 (Route de Grouchy) 前歐洲大戰で戰死した Jacques Adrien Grouchy より。

Rue Henry 海軍士官で、北清事變で北京で戰死した Paul Henry より。

Rue Hue 一八二九—五四年宣教師とし、又探險家として活躍したフツク師より。

Route Jupin 前歐洲大戰で戰死した Albert Jupin より。

國富門路 (Route Kaufmann) 雲南省郵政局に勤務し、前歐洲大戰で戰死した。

Route de la Laguerre 一八五五年當時の東洋艦隊司令長官。

Route Legendre 一九二七年當時公董局秘書であつた Paul Legendre より。

愛文義路（Avenue Road）路名に一新機軸を出さうとして、道路の意義を持つ單語を二つ重ねて路名とした。「並木道路」とでも譯すべきか。

卡德路（Carter Road）開港初期よりある Carter & Co. から採用したが、一八八三年同商會は Wm. Little & Co. と改稱された。

Gas Street 澳門路の西續きの街路で、瓦斯會社があるからの稱であるが、普通の地圖には載つて居らぬ。

Majestic Road は Majestic Hotel があるため。

Mc Bain Road 元來マツクベイン家の土地であつたが、一九二五年此の地にマヂエスチツクホテルが建てられ、その側道が歴史を物語つて居る。

馬霍路（Mohawk Road）字林西報の古い社長であつた Henry Morris の邸宅であるモホーク邸から採用された。モリス氏は愛馬家であつたので、彼の一愛馬にモホークと稱したのが居つたので、それを邸宅名とし、更に路名となつて殘るに至つた。

梅白格路（Myburgh Road）一八八三―四年工部局市參事會議長であつた。

Tmple Lane 靜安寺の側道。

佛蘭西租界

Rue Adina は Real Estate Company の秘書で、その土地の所有者であつた婦人名より。西南部の小路である。

補遺と訂正

本書の校正を殆ど完了してから、

A. H. Gordon-Streets of Shanghai: A History in Itself. 1941.を入手した。此の書は少年團聯盟上海支部の團員によつて、過去十年間機關紙 The Totem に掲載された記事を纒めたもので、外人側公共團體を動員して調査したものだけに、記事は可成正確なやうである。筆者も最初から此の書を參考して居つたなら、外人名道路に關する限りは餘り苦勞せずにすんだものと思はれる。但し此の書は少年團用に編輯したものだけに餘り詳しいものでなく、採用路名數も約一七〇であり、筆者の記述したもので本書中にないのが相當にある。筆者の採錄した外國關係路名も約一七〇に達したが、本書を見て初めて由來の分明になつたものが可成ある。故に筆者の集錄したものに更に本書よりの拔萃を加へれば、略完全に近いものが出來ると思ふ。

舊英租界

東西に走る道路は Canton, Foochow, Hankow, Kiukiang, Nanking, Peking, Soochow Roads とアルファベット順に排列されたが、後此の順序が忘れられて Jinkee Road (Gibb, Livingston & Co., Ltd. の華名)、Tientsin Road 等が入つて今は此の順序が少し亂れて居る。

附錄

虬江（對岸の虬江に對するの稱）、扛魚浦（魚を持上げる河）、小黃浦（小黃浦に對し母流を大黃浦と云ふ事がある）野猫塘、三林塘、鹹塘、鹽鐵塘、漩河潭（舟を旋回させるたまり）等で、海と聯絡するため洋涇と云ふクリークがあり、轉じて洋涇鎭、洋涇區となつて殘つてゐる。

川沙地方　穿心溝は中心にある河の意で（城內にも穿心河あり）、窪泥涇は字義の通り低い泥濘の河で、運鹽河、鹽船港はその歷史を傳へてゐる。高橋區には高昌鄉、高家行、高墩沙、海高路等「高」の附く地名が多いが、その土地が特に高いと云ふよりか、周圍が海や河であるので、自然その土地が高く見えるのである、南滙は南方にて水の廻り流れる所の意で、長人鄉に就て「長讀如長幼之長蓋取易乾文言君子體足以長人之義」とは川沙縣志の傳へる所である。高行鎭北隅に玉盤橋があるが、松蟹の穴が橋下にあつて、明月朗時には玉盤が水際に出ると云ふ。又欽公塘は激浪の進入を防ぐため、雍正年間欽公璉が知縣の時捐築した海塘である。卷頭弘治上海志所藏の地圖中、海岸に沿ふて一直線をなして居るのが古い海塘の一であると思ふ。

珊瑚を云ふ。烏泥(ウーニー)涇(チン)は黒き泥土のクリークで、此の泥土は木棉の栽培に適したと云ふ。龍華の更に上流に語兒(ユール)涇(チン)なるクリークがあり、又禦兒(ユール)に作る。俗に魚泥(ユーニー)涇(チン)と云ふ。之だけの材料を以て若し推斷が許されるならば、魚族を魚兒(ユール)と稱するので、此のクリークには魚族が多く、孩子に命じて之を捕へしめた事に由來するのではあるまいか。此の上流に鹽鐵塘と云ふクリークがあるが、呉越王が鹽や鐵を運送するのに使はしめた。滬西の西部を南北に曲折して流れる蟠龍(ベールン)塘(ドン)は、その形狀が龍の蟠つてゐるのに似てゐるからである。龍華上流の黄道婆祠(又は黄婆廟)は、黄女史を祠るもので、同女史は家は貧であつたが、自分では木綿を織つて生活の資を得て、郷人の教育をなしたと云ふ。死後郷人趙如王が之を祠つた。元代兵火に罹つたのを、明の成化年間知縣劉琬が故人の德を偲んで重建した。

浦東地方　ノーマンズランドと云はれる位で、人口極めて疎で、勿論黄浦の東部にある意で、北は西溝附近より南は白蓮涇に至る一體の碼頭、倉庫地帶である。今事變では敵軍が此の地に蟠居して抵抗したゝめ、我軍の反撃を受け、民家の燒失し道路の破損したもの多數に上つたのは止むを得ない。此の地は綿、鷄卵が特產物である位であるから、路らしいものは黄浦江岸に民生路(ミンセンル)、塘橋路(ドンジョール)、陸家嘴路(ロカツル)(陸深の家のある岬)、源深路(ニユセンル)、東南路(トンネル)等があるのみである。陸家嘴路に就て附記せねばならぬ事は、此の浦東の地は明の時代より陸家の一族子孫の居住した地で、今でも陸家宅があり、陸行鎭も之に因むものであらう。此の陸家の祖先に陸深なる人物があり、例の小東門外の萬雲橋を捐建したのは彼で、彼は學士であつたから學士橋とも呼ばれた。

浦東には海と聯絡の出來る東西に走るクリークが無數にあつた。此の内注目すべき名稱のものは、上海浦、東(トン)

嘉定方面　青浦鎮は昔の青龍鎮の址であり（前出）、嘉定縣（前出）に至れば練祁塘なるクリークがあり、河水の靜かに澄徹して居る樣が白の練絹に似て居る故此の名があると云ふ。練圻、練川、練渠、祁江等の別名もある。封家濱は承事隱が此の地に封ぜられた故の稱である。靜安寺の傍には沸井浜があつて、例の海眼の水が騰湧して晝夜息まない事に由來する。因にクリークは單に地名のみでなく、地理歷史を初め一般文化に非常に關係のあるものであり、クリークだけで重要な一研究をなすものであるから、今その名稱を分類して見れば左の如くになる。

一、水色（瀏河、練祁塘等）
二、土狀（烏泥涇、黃泥浜等）
三、形狀（虬江、窪泥涇、横浜等）
四、樹木、草（楊樹浦、蘊藻浜等）
五、位置（穿心溝、西浦等）
六、故事（封家浜、春申塘等）

蒲淞は吳淞江と蒲里塘がその南北を並流して西に向ふ故その名がある。眞如（又は眞茹）は唐時眞如院法堂を創立したのによる。古くは桃溪と稱した。曹家渡は里人曹氏の捐建にかゝる。

虹橋南部　青浦縣東南の余山は余姓の者此處に退隱したからで、蘭の如き香のする筍の名產地であるので、清の聖祖が蘭筍山の稱を與へたと云ふ。七寶鎮は寺を以て名あり、七寶とは金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、琥珀

第十章　上海の周邊

上海市街を出て、足を一歩郊外に運べば、隨所に今上海戰の戰跡があつて感慨の深いものがある。以上の各章でその起源を分明にしたものも多くあり、本章では說き殘りの村落やクリークに就て述べよう。

寶山地方　我が陸軍が敵前上陸した方面に眼を注げば寶山(ポウセ)がある。明時寶山なる小山を浦東に築いて海上の標識となしたのによる。後になつて黃浦江口の兩岸の地域も含めて寶山と呼ぶに至つたが、今は黃浦江の西岸の地のみの稱である。寶山は一八四二年英軍が上陸占領した。呉淞クリークは西歐人の命名したもので、支那名は蘊藻浜(ウエンツアオパン)である。河岸に同名の驛があるのを以ても之を證する事が出來る。扨蘊藻は和名でモバと云ふ水草で、之が繁茂するクリークの意である。呉淞鎭なる名稱の由來に就ては既に述べたが、嘉靖倭寇以後は江南の重鎭となり、淸代に入つて五口通商以後は長江流域の外貨輸入の總入口となり、同時に軍事上の要塞となつた。若し上海に租界が設置されなかつたら、上海の繁榮を凌いで居つたかも知れぬ。廟行鎭(ミヤオオンツエン)、楊行鎭(ヤンオンツエン)、殷行鎭(インオンツエン)（殷家行鎭の略稱）等「行」の附くものは「並列せる所」の意で、夫々「廟の並べる所」、「楊樹の並べる所」、「殷盛なる家の並べる所」の意である。引翔(インアヤン)は又の名を尹翔と云ふが語義不明。彭浦(パンプー)は「盛んなる河」である。大場鎭は小場鎭に對する稱と思ふが、其の名は唐代より見える。走馬塘(ツオウモドン)に就ては、塘は「土石を築いて水をためたつゝみ」で、從つてクリークの義も生ずるが、此處では前義である呉越王錢鏐が開鑿したので、舊名を錢宗浜と云ひ、後韓蘄王が駐軍して此の堤を馬で走つたので、現在の走馬塘の名がある。

第一期工事を完了した。

現　在

昭和十五年末新國民政府との係約成るや、改正路名が支那人に親しみがないので、日支協同新東亜建設を意圖する我國としては、それに因んで新市街の路名全部を再變更する事となつた。左に揭ぐるのは、上段は事變前名で、中段が事變直後、後段が現在名である。勿論之は主要なもの一部分である。

黃興路（ワンシンル）——加納通——合作路（ハツオル）
其美路（ヂイメイル）——松井通——維新路（ウエイシンル）
翔殷路（ヂヤシイン）——特務通——共榮路（コンヨンル）・共存路（コンゼンル）
閘殷路（ザインル）——長谷川通——平安路（ピンエル）
軍工路（チユンコンル）——皇軍路——東華路（トンウオル）・軍營路（チユンインル）
五權路（ウヂエル）——及川通——興亜東路（シンヤトンル）
三民路（セミンル）——畑　路——興亜西路（シンヤシル）
江心沙（コンシンソ）——昭和島——華亭島（ウオテイトウ）

此の內黃興は國民黨領袖であり、最後の江心沙（Point Island）は島と云ふより、黃浦に出來た淺瀨が堆積して水面に出たものであるが、後方にクリークが出來て自然陸地から分離したものである。

第九章　新市街

事變前

支那側が租界の繁榮を奪はんとして、前上海事變後より着々と市政府廳舍を中心として、縱橫に整然とアスファルトの立派な道路を築いた。上海市を全支の模範市たらしめんとした意氣は物凄く、同じく道路に命名する場合でも、閘北の賓を抱いて平和に暮し度い式の路名は廢されて、國民黨に功績のあつた人や、三民主義に因んだ三民路（サミンル）、五權路（ウヂイエル）、國和路（コウール）、民慶路（ミンチンル）、其美路（ヂーメイル）等が附けられた。其美路は國民黨領袖であつたが暗殺された陳其美から由來する。

事變直後

事變後は支那名は殆ど日本名に變へられて了つた。今事變の將星（加納通、飯田通等）、我國の大人物（乃木通東鄕通、近衞通等）、年代（大正通、昭和通等）、出征將兵の出身府縣（熊本通、廣島通等）、其の他軍關係物（軍行路又は皇軍路、西陸戰隊通等）を以て命名された。之以外のものは京都に倣ひ、星ケ辻を東西に走る畑路を中心として南北に分け、南部には南一條、南二條より南九條通迄あり、北部も同樣にして北一條より北八條通迄となつてゐる。共同租界より新市街に至る幹線道路の其美路は、松井通と改稱されたが、將來大上海建設の大動脈となり、軍事上でも重要であるので、小野部隊は軍務の餘暇を利用して路幅の大擴張を行ひ、昭和十三年十月一日

横浜橋の南、川公路内に三義里があるが、前上海事變で、陸戰隊の苦戰した處で、「三義里の歌」は今尙記憶に新しい。その南、虬江路（浦東の東虬江に對し西虬江と呼ばれる事もある）はその昔虬江と云ふクリークがあつて、呉松江に對して舊江と呼ばれてゐた。うねく〜と廻り流れたからその名があるので、フリヂヤのミアンダー河（廻り流れる河の意）を聯想する。虬江は乾隆時代に堙塞し、民國三年埋立てられて道路となつた。八字橋はその形狀から由來するので、從つて同名の橋は上海近郊だけでも數箇所にある。新公園北方の廣中路は普通の地圖には載つてゐない程の道路であるが、今事變で一躍有名になり、陸戰隊の最も苦戰した所で、貴志部隊長初め多くの犠牲者を出した。同路にある駱駝の脊なる地名は、惟ふにその形狀より邦人の命名したものであらう。

高等女學校前の歐陽路はその土地の所有者名から由來する。

塔路入口の四達里（スーダリ）は四通八達を願つたものである。

因に支那街路名に「路」が使用され出したのは最近の事で、昔は皆街、街を一般に使つてきつたが、外國語のロウド（實際使用の場合は語尾は殆ど聞えぬ）、ルーと發音が近似してゐるので「路」が使はれるに至つた。「路」は古くは「要處」とか「行政區域名」で今の省に似て居り、南京も杭州も元時には夫々南京路、杭州路に屬してゐる。

横浜路（ワンパンル）は支那人の中にも、横浜橋附近は邦人の居住する者が多いので、日本の横濱を採つたものと云ふ人がある、之は今遽かに首肯し難い說である。何故かと云へば、上海市内で日本本土の地名を採つたと思はれるのは、昔の楊樹浦の東京路（今の武定路）があるのみで、處が之には既述の通り疑義があり、其の他では東本願寺別院の側に昔あつた大和街とか、北四川路底の千愛里が日本を一寸偲ばせる位のものであるから、閘北の路名に態々日本都市名があるとは思へないのである。あるとすれば長崎路が第一にあつてよい筈である。事實は横浜は民船の繫留されるもの多く、横に細長い濱（クリーク）である事を思へば不思議はない。抑々クリーク成立當初は、今蘇州河附近に例を採れば、南北に走つて直接蘇州河に開口するものは總て縦浦と呼ばれ、此の縦浦を東西に聯絡するもの、即ち蘇州河と大體平行するものを横塘と呼ばれて、その間に圩田を作つてゐた。其の後クリークは埋められたり掘られたりして複雜な形狀となつたが、後に至る迄此の縦浦横塘の普通名詞は保持される場合があつて、遂には半ば固有名詞化されるに至つた。クリークたる事を示す漢字には樣々あるが、縦（又は漎）や横が付くものが多くあつて、今問題とした閘北の横浜もその一例である（滬西の漎涇參照）。

第八章　閘　北

起源と沿革

蘇州河には閘即ち水門を諸所に構築したが、潮流のため壞れ、乾隆二年十月竣工した水門を、從來の水門に對して新閘と呼んだ。共同租界愛文義路（アベニユール）の北方をやゝ並行して走る新閘路（シンザル）は此のための稱である。閘北（ザボ）(北京音でチヤペイ)は此の新閘以北の名である。

此の地の拓けたのは三十年程前からの事で、それ迄は荒涼たる田野の中に小村落があつたに過ぎない事は想像に難くない。北四川路、江灣路等の越界道路の開築と共に開かれた。此の地の繁華な中心は寶山路で、商務印書館印刷工場、東方圖書館、水道タンク等があるが、此の邊は前上海事變で多大の傷手を受け、創痍未だ癒えない中に今事變となり、呉淞路の北と南とを問はず一面の燒野原と化した。

路　名

寶山路（ボウセル）は縣名(第十章參照)から採用したが、之に倣つて閘北には寶の字を取入れたのが多い。寶昌路（ボヴツアンル）、寶興路（ボウシンル）、寶通路（ボウトンル）、寶德里（ボウタリ）、寶源路（ボウニユル）等で、日本高等女學校北方の寶安路（ボウエル）は此の代表的なもので、財寶を抱いて安らかに暮し度いと云ふ支那民衆の本性が遺憾なく表明されてゐる。施高塔路から日本高等女學校に行四達路（スーダル）や、施高

には此のあたりに太平寺と云ふ寺があるから、寺名を採つたものと思ふ方が隱當である。

○地名や無意味の當字が多い中で、郵船滙山碼頭と大阪商船碼頭との間の短路怡和路(イーオル)は純粹の抽象支那名で「誠實なる路」の意である。此のあたりに英商怡和紗廠があるためと思ふが、ジャーデイン・マヂソン會社の華名を怡和と云ふ。

韜朋路（W. Thorburn）開港初期より在住してハーグリーズ商會を經營した。

華德路（F. T. Ward）英人（一八三一——一八六二年）名で、太平賊平定に功あり、支那の旅團長に任命せられ、寧波附近で流彈に當つて斃れた。此處で一言附記し度い事は、此の道の西方に西華德路と云ふのがあつて、華德路の西にあるから西華德路と云ふのだ、と云ふ風に思ひ易いが、之は東洋人の記憶に便なやうに此處が特に選定されたので、事實は前述の通り獨立した人名である。

滿洲地名の優位　此の地域の路名の特色として初期には近東の都市名が多かつたが、之が變更後は滿洲方面の都市名が優勢となつた。培開爾路、（ヤクト語で、富める湖の意）哈拉路、哈爾濱路、朝陽路、黑龍路、（蒙古語mur「大河」より發生）大連灣路、遼陽路、東鴨綠路、吉林路（匯山公園の北方）齊々哈爾路、湯恩路の東續きの墨克登路（奉天路）等である、濟物浦路は朝鮮の仁川附近の地名があるが、明治十五年暴徒が京城の日本公使館を襲撃した事件が起つて、その解決の條約をなした處である。

其の他　ウエイサイドは元外人が路傍にある區域位の意味で命名したものに、威賽又は匯山（滙は俗字）の漢字を當嵌めたものに思へ、之より匯山路、匯山公園、匯山碼頭等が出來た。百老滙も此のあたりに最初に出來た幹線で、此處を米人が根據地としてゐたゝめ紐育のブロウドウエイに倣つて命名したものであらう。もう之だけで道路の意を表はしてゐるのであるから、百老匯路と書くのは二重である。工部局監修の地圖はブロウエイとのみ書いてロウドはない。然し習慣上百老匯路と書かれる。

虹口クリークの東側の太平路は、太平と云ふ都は支那に數箇所あるから都市名と思へない事はないが、古地圖

部を占めてゐるから、トンキン説の方が正しいやうに思ふ。

外人名路 改名したと云つても未だ未だ支那人に親しまれさうもない外國名が可成殘つてゐる。

愛而考克路(R. Alcock) 一八四六年當時の第二代英國領事で、英國領事館建設のため土地購入方を本國に要請し、義勇團を組織したり、稅關を外國の監督下に置いた。

鄧脫路 一八二七年支那にデント商會が出來、その一族は稅關に勤めたり、香上銀行に關係したりして支那で活躍してゐる。

近勝路(D. C. Jansen) 一八六〇年アスター・ハウスを創建し、博物院の第四次名譽院長であつた。

蘭路(H. N. Lay) 英人で上海稅關總稅務司であり、日本最初の鐵道である京濱鐵道の敷設にも與つて力があつたと云はれてゐる。

麥克利克路(Macgregor) 一九〇九年開設の虹口公園(新公園)は同氏の設計になるもので、當時の工部局公園課長であつた。

茂海路(W. Muirhead) 英人牧師で、同師は一八四八年青浦で土民に襲擊せられた事があつたが、よく傳導に力を盡した。

西華德路(G. F. Seward) 一八六三年當時の亞米利加領事で、上海市を自由市にせんと提議した人である。此の路は虹口内にあるが、後述する華德路との比較上本章に置いた。此の道の楊樹浦への延長を東西華德路と云ふ。西華德路は熙華德路とも書かれる。

勒克諸路—寧武路（山西省都市）
麥特拉司路—平涼路（甘肅省都市）マンドラ神の國土。
密索爾路—平定路（山西省都市）
浦那路—鄱陽路（江西省都市）
開答路—松潘路（四川省都市）
西貢路—丹陽路（江蘇省都市）「金を飾ふ」意。
三寶瓏路—騰越路（雲南省都市）
山達剛路—定海路（浙江省都市）
辛拉路—洞庭路（洞庭湖）
東京路—武定路（雲南省都市）

右は上海研究資料に依つたのであるが、臨青路の由來は不明であるし、最後の東京路が我國の首都から由來したものか、又はトンキンから由來したものか疑問である。此の路名の變更される前既に舊英租界叉袋角に東京路があつたので、態々混同されるやうな名稱が同一租界内に置かれてゐたとは考へられぬから、東京路とも考へられる。但し共同租界内に重複する路名がない事はないので、東京路の新名の武定路が抑々重複してゐるので、同武定路は靜安寺北方にもある。又比亞士路と披阿司路とは漢字では書分けてあるが、發音は同じである。故に同一音であるからと云つてトンキン說を退ける譯にも行かぬ。又舊名が香港以南より印度方面にかけてのものが全

路名の改革　一九一四年迄此の區域の道路の特徴として印度を主として近東方面の地名が多かつた。然るに一九一五年になつて工部局は之等の路名が永久に支那人に親しまれぬ事を恐れて夫々次の如き支那名に變更する事となつた。（アルフアベツト順に並べ、舊名の語源の分つてゐるものは、それを附記して置いた）

愛根路―濟寧路（山東省都市）
朋卡路―福寧路（福建省都市）
倍耐而司路―海州路（江蘇省都市）
孟買路―河間路（河北省都市）　ポルトガル語 Bomb-Ahia「良港」。
加爾各答路―黑龍路（胡倫路又は呼倫路とも書く。滿洲國省名並江名）印度語 Kali Katta「聖地への玄關」
康樸爾路―桂陽路（湖南省都市）
科隆布路―廣州路（廣東省都市）　Kolumbu「港」
但里路―廣信路（江西省都市）
客勃爾路―涼州路（甘肅省都市）
剛達哈爾路―臨青路
剛狄路―黎平路（浙江省都市）
客拉契路―眉州路（四川省都市）
賴霍爾路―寧國路（安徽省都市）

第七章　楊樹浦

起源と沿革

古圖に楊樹浦（ヤンズープ）又は楊木浦（ヤンムプ）なる名が見え、他にも桃樹浦、椿樹浦等の名があるから、其の地にある樹木を以て浦名とした事が分る。此の地には楊柳が多かつたゝめ此の稱がある。

前世紀末より漸次發達を遂げた區域で、東は飯田棧橋（舊虬江碼頭（デユコンモード））より西は朝日碼頭（舊虹口碼頭）に至る迄多數の碼頭・工場・倉庫が並立してゐる。日清戰爭前は外國人所有の絹織物工場を除けば、上海には生産工場はなかつた。然るに日清戰爭後戰勝國たる日本が躍進を始めたので、之に刺戟せられてジヤーデイン商會初め外國商館が棉花工場を作り始めた。之より楊樹浦の地に煙突の數が增して來たのであるから、此の地域は日清戰爭により發展を遂げたものと斷言して差支ない。

今事變では激戰地となり、兵火を受けて無數の家屋が燒失した。此の荒廢した街址に、時恰かも歐洲の地を追放された猶太人が續々と流入し始め、一九四〇年八月迄に約一萬八千名を數へた。之等避難民が携帶した金額は法幣にして二百五十萬弗にしか達せず、一人當り百三十弗位の貧弱さである。從つて甚だ貧弱ながらも此の地に猶太人街が突然にして誕生した。

道路

は躑躅里の意である。千愛里（チエリ）（チエリー・テレス）はその土地及び建物が日本の東亞興業の所有であつて日本人が多く居住したから、櫻の國を聯想してかく命名したものであらう。施高塔路内の留青小築は英名でガーデン・テレスと云ふ。

支那名路

例の緣起を祝ふ式のものが多いので、積善里（ツエゼーリ）、敏德坊（ミンターフアン）、餘慶坊（ユーチンフアン）、恆豐里（アンホンリ）、厚德里（オウターリ）、榮華里（ユンウオリ）、克明路（クミンル）（益々明らかなりの意）等皆それである。

工部局が命名した道路はロウド、ストリート、ガーデンズ、レイン位のもので、其の他は支那人が勝手に附けたのである。工部局は之等の小路を固有の名で呼ばず、全く號のみですますか、又はその一群をレインで表はして、例へば呉淞路内の大興里（ダシンリ）は、呉淞路レイン四二九（四二九弄）で表はす。然し一般市民は數字より固有名の方が便利であり、郵政局でも都合がよいので之を使用するまでゞある。然し注意しなければならぬのは、同名のものが多いから、何路何里と云ふ風に書かねばならぬ。

ロウド。此の外老靶子路(ロヴポーツル)は昔の射的場を意味し、黄浦路(ワンプル)は黄歇が開鑿したのに由來する事は前述した。

吳淞路と乍浦路とに挾まれて蘇州河寄りの所に頭壩路(ダーポル)と云ふ南北に走る小路がある。頭は「第一」とか「最上」、壩は「防波堤」、「碼頭」の意であるが、古文書又は古書に吳松江（今の蘇州河）の口に頭壩なる地名が見えるので、古い地名を今に傳へてゐるものとして面白い。地圖によつては頭垻ともあるが、垻も壩も大體同意義である。北河南路(ポホーナンル)には以前吳淞鐵道が蘇州河邊迄走つてゐたので、古くは鐵馬路(テイモル)と呼んだ。今でも支那人間にはさう呼ばれてゐる。

土地家屋の所有主名

永安里(ユンエーリ)は永安公司の所有である。因に永安里なる里名は上海に十箇所以上もある。黄陸路(ワンロル)は前述した通りで、披阿司路(ピアスル)（滬西の比亞士路(ピアスル)と嚴重に區別するを要す）はピアース・アパートがあるためである。工部局は此の路にプライベイト（私路）と註してゐる。私路は工部局が監督するも修理の任を負はない。アスター・ハウス・ホテルの華名を禮查飯店と云ふので、その横通は禮查路(リーサル)と呼ばれる。

花名路

之は上海全體にも通ずるものと思ふが、北四川路北部方面は特に花に因んだ名が多い。東照里の北の花園里(ホンユエンリ)は云ふ迄もなく、麥拿里(マグノリ)(マナリ)（マグノリア・テレス）は日本式に云へば木蓮里であり、阿瑞里(アゼリ)（アゼリア・テレス）

偏のが正字である。

揚子江なる稱は、揚子縣の側（今の江都・丹徒間）を流れる大河の意であるが、之を西歐人が長江全體に及ぼした。一部を以て全體の稱としたのである。一六五八年澳門より支那に入り、內地を旅行したナヴアーレットの記述には、揚子江は「大洋の子」の義なりとし、支那人が Yangtsze-Kiang と發音したのを「洋子江」と間違へたもののやうである。更に「子」は一種の助詞で、名詞などに慣用的に附けられて他意はないのに、child と解して二重の過誤を犯した。一八三二年發行の Chinese Repository には Yangtsze-Kiang と記し、一八四一年七月發行の同誌中に英船コンウェイの江口測量記事中には、之に洋子江の誤字を當て、且つ Child of the Ocean と註して居る。佛人フックの旅行記（一八五四年）にも the son of the sea と註があるが、今世紀初頭に至つては大體西歐支那學者間にも此の誤謬が分つたもの丶如くである。但し一九〇五年發行の Lippincott's Gazetteer of the World の如き專門書にも尙 son of the great water 又は son of the sea と說明して居る。事實は揚は「水勢強し」の意で、昔此のあたりは長江は激流してゐたものと見へる。長江で水勢の激しい所は此處だけに止まらなかつたであらう。例へば三狹の險などがあるのに揚子の地名を採用したのは前述の通り西歐人が部分を以て全體を命名したからである。起源から考へても語源から考へても、揚子江の方が正しい事が分る。

土地の特色を示した路名

界路は云ふ迄もなくポケツト地帶と共同租界との境界線に當るから此の樣がある。工部局名はバウンダリー・

書いた。陳書候瑱傳に「與景戰於吳松江」とあるのが最も古い。租界が設置されてから西歐人が蘇州河と改名した。吳松江とは吳縣或は蘇州の松と云ふ河なる意で、他にも松江なる河があるので之と區別したのである。蘇州河即ち吳淞江は上海の沿革にも述べた通り、西暦六二〇年頃には幅七哩もあり、それより黃土の堆積、流水の分割、碼頭構築等により三〇〇年後には三哩に縮小し、それより漸次哩、一哩と狹くなり遂に現在のものとなつた。幅七哩もあつた頃には廣く東に流れて黃浦江と合流し、之が當時の主流で、吳淞鎭迄を吳淞江と稱した。そして吳淞江の江口にある村落であるから吳淞鎭なる名が與へられた。今の吳淞クリークはもと蘊藻濱（第十章參照）と云ふクリークであつたのを、吳淞鎭の側にあるので西人が勝手に吳淞クリークと稱した。

揚子江の語源

北揚子路（ポヤンツル）舊英租界の章でも言及したが、揚子路即ちバンドが蘇州河より北に延びた部分で、揚子江から由來してゐる。扨揚の字を楊と書くのは誤である。岡崎・池田兩氏の「江南文化開發史」の如き、江南の河川の專門書であるに係らず終始一貫楊子江とせられてゐる。但し書中の華文の引用文中には屢々揚子江とある。又簡野氏の「字源」にも楊子江とあつて「もと揚子江と書いた」と注してあるが、之等は實に誤導（ミスリーディング）的であると云はねばならない。

同音ではある誰にも分る通り、楊と揚とは全く別字で、楊とはハヤナギで水邊で枝を揚げてゐる柳で、揚は「水勢强し」とか「あげる」の意である。支那人の中にも當字で木偏のを使ふ者があるが、康熙字典の示す通り手

崑山花園(クンセ ホーユエ) 所謂ベイビー・ガーデンの南に位する道路で、工部局名はキンサン・ガーデンズであるが、ガーデンズと云つても花園ではない。數條のガーデンが集つて其の總稱をガーデンズと云ふので、之は實地調査をすればよく分る。北部の紀家花園(キーブル・ガーデンス)も同様である。

乍浦路(ズオ プ ル) 江蘇省の港市。

閔行路(ミン オン ル) 上海南方の小市。閔港又は敏航とも書かれる。「行」は地名によく使用せられるが、「ツラナル」と云ふ元義から、「貨物を積んで賣買する商店」とか、「道路」更に「街の並ぶ町」を意味するので、此の方には大した意味はなく初字に注意を要する。然し閔に就ては未だ不明。廟行、殷行、曹行を參照。

支那地名路

江灣路(コン ウエ ル) 古く同地方が灣をなしてゐた時の稱。

南潯路(ネー ジン ル) 浙江省都市で、潯は「水際」の意。

七浦路(チエ プ ル) 江蘇常熟縣東南。又の名を七浦塘とも云ふから七流のクリークがあつたゝめの稱。

青浦路(チン プ ル) 青龍鎭に同じ。第一章參照。

海寧路(ヘー ニン ル) 浙江省都市。「靜かなる海」

鴨綠路(アー ルー ル) 鴨綠江より。「水色如鴨頭。故名」

吳淞路(ウー ソン ル) 此の道の誕生に就ては前述の通りであるが、吳淞は河の名で、普通吳淞江と書く。又吳松江とも

ある。前歐洲大戰當時は英國の諜報員として働いて功があつた。

漢壁禮路（ハンブリール）（ヘーベエリル）（T. Hanbury）英國王立亞細亞協會に盡力し、後歐人子弟のために虹口にハンブリー校を創設した。此の學校は後工部局立パブリツク校と合併されたが、今でも此の人の名を冠して居るのは創を耆ぶためである。

克能海路（カニンハムル）（E. Cunningham）英國駐滬副領事で、工部局の土地章程を作製して功があつた。

愛而近路（エルジンル）（コノヘル）（Lord Elgin）太平賊の亂時英國東洋艦隊司令長官で、次で北京に行つて駐支公使となり、英佛聯合軍をして圓明園（舊英租界の路名となつて殘る）の宮殿を燒かしめた。北京全市に損害を與へず、淸帝の最も好んだ宮殿を燒棄する事によつて淸廷を恐怖せしめ、北京條約を結ぶに至らしめたのはエルジン伯の手腕であると云はれて居る。

斐倫路（フイロンル）（C. A. Fearon）工部局最初の職員名。

密勒路（ミラール）（J. Miller）開港初期から居住した英人で、競賣を業とした。

湯恩路（トーンル）（A. Thorne）開港初期からワトソン商會に勤務した英人。

施高塔路（スコツトル）（Sir G. Scott）一八四七年ビスコーパル・トリニチイ敎會が建てられたが軈て破損したので、一八六六年スコツト卿により設計せられて一八七五年竣工した。

ドと呼ばれ、他のものはそれ以下の小さい横道で、レイン又はテレスと呼ばれる。今それ等を分類して見よう。

外國人名道路

瑪禮孫路（モリソンル）(R. Morrison 一七八二——一八三四年) 前世紀初頭の通譯官ロバート・モリソンから採つたので、聖書を支那語に譯したり、華英辭典（一八一七——一八二三年）を編纂したりして眞面目な精力家であつた。當時は支那人が外人に支那語を教へる事を死を以て禁じてあつたので、彼は夜間燈火に被をして支那人教師から支那語を學ばねばならなかつたと云ふ。モソリン譯の支那語聖書（一八二三年印行）は各地に行亘り、偶然その一書は廣東の洪秀全の手にも入り、遂にかの太平賊の亂を起す一誘因となつた。

赫司格爾路（ハスケルル）(R. S. Haskell)米人で一九一七年來滬し、米國商業會議所々員、消防隊、義勇隊に屬した。

阿拉白司脫路（アラバスタル）(G. H. Alabaster)一八八八年生れで、ロンドン大學卒業、天津が主居留地で、上海義勇隊にも屬した。

竇樂安路（ダラツクル・ドロエル）(J. Darroch) 一九一一年越界道路として開築された。今の日華倶樂部附近にドクター・ダラックが居住してゐたから此の稱があるので、當てた漢字には深い意味はなく、竇は盆地であるから、此の低い土地でも樂しく安かに暮し度いの意。事實一寸の降雨でも水が溜つて同路内の住民は迷惑せられて居る。華名で大生路と云ふ。ダラッチ氏は一八七七年支那に渡來し、支那奥地の布教に從事してゐたが、山西國立大學の飜譯局を擔當するため上海に來た。同大學の教科書編纂の功により進士に叙せられたので、ドクーター・ダラックの稱が

デンは大きな池であつた。郵便事務は明治九年領事館內で開始せられたが、其後事務室の狹隘を感じて來たので、今の篠崎醫院の建物に移往して獨立した郵便局となつた。當時上海中の郵便局で日本のが一番新しく美しかつたと云ふ（The Gateway to China, P. 34)。現在の老靶子路（ローポーツル）の所には上海義勇隊の射的場がある始末で、此の射的場は一八九七年になつてから取拂はれ、虹口公園（オンクーコンユエ）即ち新公園の東側に移された。老靶子路とは昔射的場のあつた路の意で、英語のレインジ、ロウドも同樣の意味である。然し中には今でも靶子路（ポーツル）と云ふ人があり（華中バスも之を採用してゐる）、同一道路が三樣に呼ばれてゐる譯で、事變前電車が走つてゐた時分は、興亞院華中聯絡部前の終點を電車會社は公園靶子場と云つて區別してゐた。一九〇三年北四川路は老靶子路との交叉點から越界道路として延ばされ、一九一六年更に陸戰隊裏迄延長された。此の道は第一次上海事變前には支那大商店が櫛比して、吳淞路の繁榮を奪ふかに見えたが、前事變で寂れ、其の後稍々殷賑を回復したかに見えたが、今事變で彼我の對峙する線となつて大破した。然し事變後は今見る通り邦人商店が相並んで、ネオンサインの一大繁華街と化してゐる。榮枯盛衰の跡が偲ばれてうたた感慨無量である。一九〇三年邦人住宅地の江灣（コンウェル）路、翌年黃陸路（ワンロル）（支那人の土地所有主の名を採つたものと思ふ）が築造された。長屋式の建物であれば、大抵この端の家の外側に竣工の年が刻られて居るから、その道路の開築の年月も略想像がつく。俗に北蘇州路以北・斐倫路以西を裏虹口、狄思威路以東を外虹口と呼んでゐる。

虹口地帶、特に其の北方は滬西と同樣支那街であつたものが越界道路として取込まれたものが多く、各種の路名が散見する。街・衖・邨・里・坊・弄等があつて、街と衖とは同意義で、英語ではロウドに次ぐのはストリー

を知らず。揚々乎として之を他に誇示するの勢あり。男子も亦彼等を遇するに同等の禮を以てし、儕輩として酒宴を開きなどするものありとの評あり。外人は日本旅館は醜業婦媒介所なりと評するものあり。日本人は體面を維持せんとすれば、醜業婦を西洋人と同じく公席に列することを避けねばならぬ。」（同紙二十一號――明治二十三年十月廿五日）

「日本旅館の奮發――東和洋行は日本人の體面を維持せんため一大改革を施し、醜業婦と認むべき女子の宿泊を拒絶することゝせり。」（同紙二十二號）

「上海の日本人はポルチュギーズを馬鹿にすれど、葡人にて日本人を妾とするもの多けれども、日人にして葡人を妾とするものなきは如何。」（同紙三十九號）

明治廿四年には獨立自營、一致團結、邦人の體面維持を主旨として領事館内に會合が開かれたが、之が日本人倶樂部の濫觴である。日清戰爭が勃發して日本へ引揚げた者も多數あつたが、尙二百餘名の者は踏止つてゐた。

虹口の發達と現在

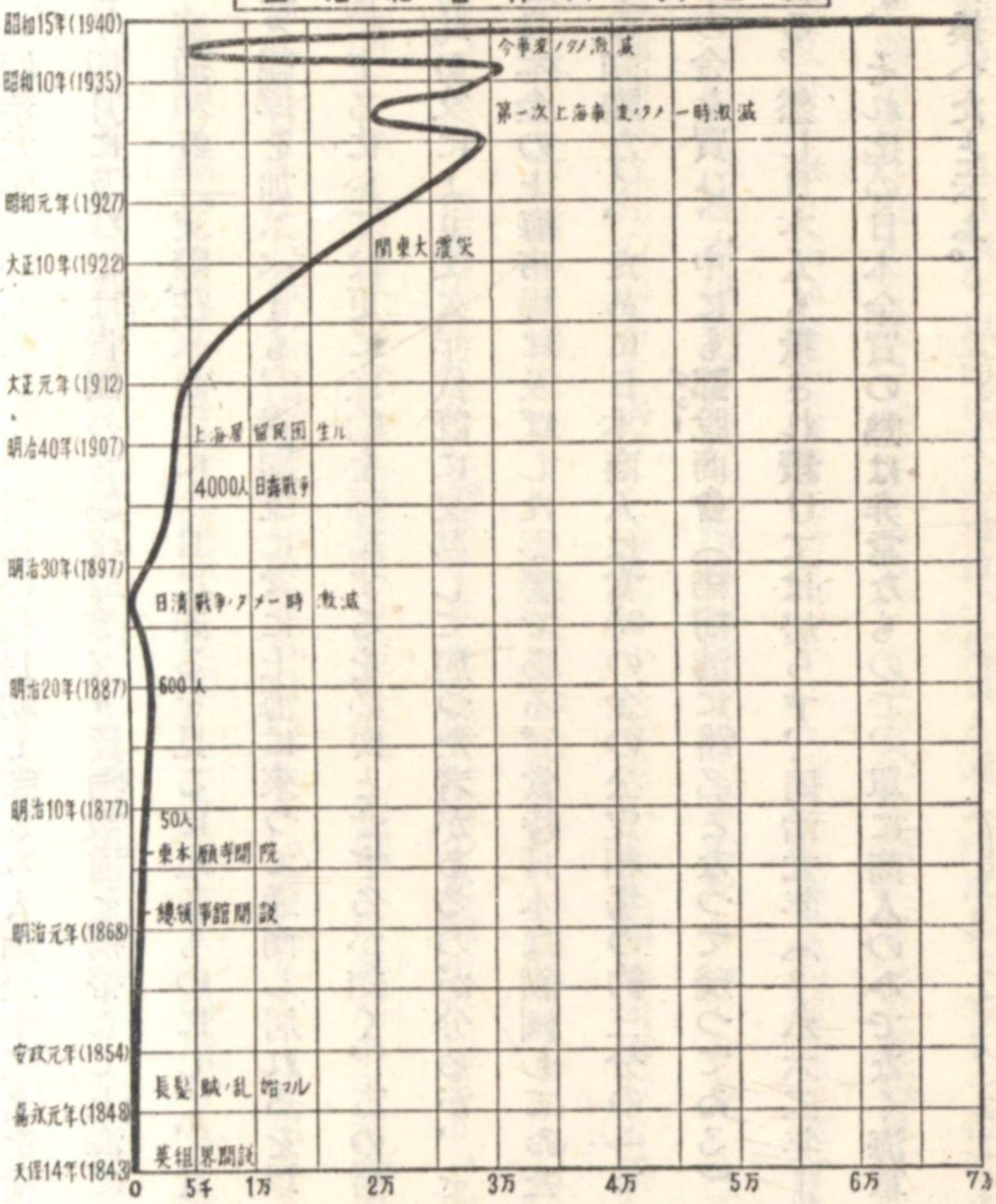
虹口が共同租界となつてから移り住む者が漸次增した。武昌路（ウーツアンル）は古い路名であるが、勿論現在とは位置が多少異る。一八七八年吳淞に陸揚された海底電線は、支那側との數度の談合商議の結果、漸く虹口迄地上線で連絡される事になつたので、その地を吳淞路（ウースンル）と云ふ。此の頃海寧路には穿虹江と云ふクリークがあり、今のリツツ映畫館の北に廣肇醫院が寄附金で建てられ、之は後寺院の如きものとなつて今でも殘つて居る。又ベイビー・ガー

邦人の漸增

明治初年には東京丸、名古屋丸、玄海丸の三船が神戸から聯絡して居つたので相當の往來があつたものと思へる。河南路の東本願寺別院で明治九年語學校を開き、邦人女子一名の入學者があつたが、同十年九月には同院內に育嬰堂が開かれた。同十三年には邦人數一躍一八六名となつた。先の育嬰堂はその後斷續があつたが、明治二十一年同院內に開導學校が設立せられて生徒數十名を得た。之が上海に於ける邦人教育の嚆矢と云ふ事が出來る。其の後日清戰爭迄邦人數は增加する一方で（明治二十三年六月には男三三九人、女三〇五人、戶數五八）、明治廿四年の邦人數八百を以て初期の最高とする。此の間の邦人の活動狀況を知る材料は甚だ少いので詳細には知り得ないが、醫業、藥物業、海產物業に從事した者は相當成功を收めた。特に醫師、齒科醫、藥屋は支那人間に信用を得た。中にも岸田吟香氏經營の樂善堂は明治十三年の創立にかゝり、支那全土同房の藥劑の行亘らざるはなかつた。又我等の注意を惹くものは、休職陸軍大尉故荒尾精氏の發企にかゝる、今日同文書院大學の端となつた日清貿易研究所が明治二十三年九月勞合路（ロイドル）に開所した事である。同研究所は商業の實習を旨とし、最初生徒百二十人、職員二十名を擁した。又邦人婦人で外人の妾となる者多く、彼等の資力によつて商業を營む事が出來た者の多い事は我等の傳聞する處である。今上海新報より記事を掲載すれば。

「在留邦人男女併せて無慮六七百名（日清貿易研究所生徒を除く）の內女子は殆んど全數の二分一を占む。其の女子は二三を除くの外身を皆洋人又は淸人に托するものなり。醜業婦なれども彼等は無教育にして醜業の醜たる

上海在留邦人人口表



明治三年（一八七一年）には日本人は僅か七名であつたが、明治六年には五十餘名となり、同年馬車路（今の卡德路）に日本人共同墓地が出來た（但し現在の如く火葬する事は許可されなかつた）。此の明治六年と云ふ年は記憶すべき年であつて、蘇州路にあつた上海出張所の稱のあつた日本領事館も虹口の地に移された。やがて河南路にあつた支那人の所謂東洋廟である東本願寺別院も今の地に移されたので、領事館、特東本願寺が邦人生活の中心となつたので、此處に虹口が邦人蝟集地帯となり、小東京の異稱を採るに至つたのである。

「滬游雜記」を見ると十六舖の北の新開河河口に日本碼頭があり、東本願寺別院の附近に大和街がある。之によつても明治初年既に邦人が集團的生活をしてゐた事が分る。又同書に滬北の地に日本の藝人が來て、子供を使驅して輕技を見せ、その技絶妙であつたと云ふ。

現在虹口は邦人居住の中心地であるから、本章で邦人發展の跡を簡略に回顧して見ても妥當を缺くことはないと思ふ。開港以前の上海と日本との關係は城內の章で略記したから、本章では開港後の狀態を略述する。

明治初年我國が日支修好條約を結ばんとして我國が提出した要求に對し、支那側の回答の中に次の如き文がある。

「同治元年（一八六二年）貴國の頭目助七郎等八人商民十三名を從へ、海產物を携へて上海に來りて貿易し、三年四月に及びては貴國の官錫次郎等又々貨物數種を携帶して上海に來り貿易して歸れりと云ひ、中國と貴國との交通和好、交際往來の已に一日に非るを見るに足るものにして、貴國は隣近の國なるを以て、必ずや自ら今後愈々親厚を加ふべきも、貴國既に常に上海に來つて通商し居れるを以て、爾後も即ち前例に照して辨理し、彼我相信ずるに於ては更に條約を締結するを必要とせざるが如く、古の所謂大信不約の意に有之候」。（日支交涉外史）

此の文により文久年代既に交易して居つた者があるのが分るが、その數は問題でなく、寧ろ問題となるのは當時日本金の上海市場に及ぼした影響である。當時日本は鎖國してゐたゝめ外國貨幣との換算率の知識や一般經濟學の知識なく、ために日本商人は當時の金の公定相場の約三分の一で取引した。爲に上海の外國商人は競つて日本の金を買ひ、中にも鄧脫（デント）商會（楊樹浦に路名となつて殘つてゐる）の如きは此のため巨大な利益を得たと云はれる。然し日本人も欺され續けては居らず、同治元年（一八六二年――我が文久二年）になつて漸く目が醒めたが、それ迄の日本金買の熱は非常なもので、單に商人のみでなく海軍士官などでも、退官すると銀を全部日本金に換へたと云ふ。

恐らく一八五四年以前は此の地は、虹口と云ふ村はあつても一帯にクリークや沼地のある荒涼たる野原で、雉子や鶉が群れ遊んで居つたであらう。一八五〇年頃になつて英租界に住む商人で安い土地を郊外に求める者が出て、虹口に移り住む者が出來て來た。それと同時に亞米利加監督敎會はブーン師を長として此の地を活動の根據地と定めた。日本倶樂部前の道路は同師の名を採つたものである。文監師路又は蓬路と書かれる。商務印書館發行の地圖口は此の兩名を掲げて居る。一八五四年亞米利加領事が着任してから官邸に米國旗を掲げて米租界と稱した。然し之は勝手に稱しただけで米租界が認められた譯ではなかつた。初め米國は此のあたりに百老匯（ブロードウエイ）なる道を作つたが、地面が低いため滿潮になると糞の混つた穢土で埋まり、家々を汚水で水浸しにした。米國領事も之には閉口して英租界の方に官邸を作る始末で、米國人は秩序ある清潔な英租界に羨望の眼を向けて居つた。それに加へ虹口には六名の米國巡査しか居らぬのをよい事にして、英租界を追立てられた無頼の徒が此の地に群れ集つて狼藉を働いたが、之等を米國側で逮捕しても收容する場所もなくほと〳〵困惑して居つた。當時英租界の住民は虹口を「租界のシンデレラ姫(燃屑)」と惡口して居つた。此の時に當り長髪賊の亂が起り、外國側の一致團結が要望されたので、一八六三年に至つて米租界も英租界も解消し、此の地を含めて共同租界の中に繰入れられる事になつて、上海は世に所謂「世界で最も奇妙な小さな共和國」となつた。此の時分より移り住む者が漸次增して來た。

第六章　虹口

虹口の語源

虹口（オンクー）の語源に就ては、虹は「にじ」であるから「にじ」に關係したものである事は疑ない。一例を擧げれば虹橋（オンヂョ）と云ふ所が城内と滬西とにあり、之は柱のない特に虹形の立派な橋が存在したゝめの稱である。虹口とは虹口クリークが虹形になつて居り、その口に位するから虹口と云ふのだ、と云ふ簡單な語源を聞かされて今迄滿足してゐたが、文獻上調べて見ても何處にもそんな説明はない。ホークス・ポット氏によると、黄浦が虹形に彎曲して、その口に當るから虹口と云ふのであると。

嘉慶上海縣志卷頭の地圖には虹口と云ふ地名もクリークも見えないが、本文中に虹口と云ふ地名が散見するから可成古くからの稱である。或は之は他の所を指して居るのかも知れない。同治上海縣志によると「虹口市は縣東北五里にあつて、道光年間（一八二〇年代）市をなした」とあるが、市と云つても村落程度のものであつたであらう。然しクリークそのものは昔からあつたか否か不明で、又あつたにしてもクリークは一體に曲折して居るのが多く、虹形をしたクリークは他にも多くあつたであらうから、あのクリークだけに虹と云ふ名を與へたのは一寸首肯し難い。寧ろポット氏の説明の方が妥當のやうに思へる。

が、今事變のため完成されるに至つて居らない。上海の西にあるので西方を平安ならしめると云ふ意味で、西和路(シーウール)、西寧路(シーニンル)、安西路(エンシール)、定西路(チインシール)等の路名が目に著く。

佑尼干路（Jernigan）同年築造。駐滬亞米利加總領事。同氏は辭任後も辨護士として上海に在住し、市政に興味を持ち、支那に關する著述もある。

碑坊路（又は馬牛門脫路）同年築造。大山大尉の殺害された紀念すべき道路で、滬西越界道路の西端を占めて居る。ペイパー・ハント倶樂部（二隊に分れて乘馬し、前隊は紙を撒きながら走るのを、後隊が之を追ふ競技）の部員で、前歐洲大戰で散華した人の紀念碑があるので此の稱がある。今は草に蔽はれたピラミツドの上に、微かにセメントの碑を見るのみである。

麥克利奧路（Mac Leod）同年開設。英人醫師で、上海に初めてX光線と自動車とを齎らした人だと云はれてゐる。

哥倫比亞路（Columbia）同年開設。米人のコロンビヤ・カントリー倶樂部があるからである。

以上の外亞米利加大統領名の林肯路（Lincoln）、一八一六年特命全權大使として支那に來た印度總督アマースト（Amherst）より由來するアマースト・アベニユーがある。支那人は此の道を法華路又は安和寺路と呼んでゐる。

滬西支那路

中山路が最大のものである。國民黨總理故孫中山（逸仙）を偲ぶものと思はれるが、閘北青雲路から起り、共同佛租界を西部より取圍み、龍華に迄走る延々八十華里（約十三里）の大幹線で、一九一四年開築に着手された

檳榔路（Penang）一九一一年築造。馬來半島の彼南から由來するが、同地方に檳榔樹が多く、又發音も似て居る處から此のやうな當字を使つたのである。

星加坡路　同年開築。海峽殖民地の港市。「獅子の市」。

地豐路　同年開築。

大西路　同年開築され一九二七年更に延長された。獨逸學校より西南に走る大路であるから外國名も大西路と云ふ。

華倫路（P. Warren）一九一二年開設。英國總領事ペルハム・ワルン氏で、英國上海俱樂部を開いた人である。

愚園路　同年開設。東端は光緒十六年甯波人張氏築く處の愚園と云ふ名があつたからの稱であるが今は同園はない。張氏が謙遜して愚園と稱したのであらう。昔は此の東の張園と共に紳士淑女の遊覽地であつた。

開納路（Kinnear）一九二二年開設。米人醫師で、一九一一年の革命に當り傷病兵を看護した功により支那赤十字社の名譽會員となつた。

法磊斯路（Fraser）一九二五年築造。駐滬英國總領事。

喬敦路（Jordan）同年築造。駐支英國公使。

比亞士路（E. C. Pearce）（虹口の披阿司路と區別する事）同年築造。一八九四年迄上海消防隊長をし、一九一一年から八年間工部局總長をした。

——古ひ見るに富み豐かな公園の意）があるからである。その眞僞の程は保證の限りではないが、此の名には一聯のロマンチツクな傳說が絡つて居る。租界初期にポルトガルの一紳士が虹口を歩いて居ると、曲馬團が天幕を張つてゐて、その中から少女（一本に支那少女とある）の虐待される泣聲が聞えたので、之を不憫に思つて身柄を買取り米國に遊學にやつた。卒業後歸滬してからその紳士はその少女と結婚し、その女の名をゼーシーと云つたので、彼の所有地である今の極司非而公園の地所にゼーシーの原即ちゼスフヰールドなる名を與へたと云ふ。

縣志に依れば、此園はもと西商某のもので、園主で商賣に失敗して、ために一時園が荒れたとある。

勞勃生路（ロビンスンル／ロウバセンル）　日華紗廠や內外棉紗廠のある此の路は一九〇〇年に築造せられた。筆者は支那開港に當つて盡力した東印度商會の特別會員 (Sir G. B. Robinson) の名を採つたと思ふが、「上海の郊外散步」の著者ウヰルキンスン氏は古い英國の居留民 (W. F. Robison-Bull, Nye & Co.) の名を採用したのだと書いて居る。

羅別根路（ルビコンル／ルピクンル） (Rubicon) 一九〇一年開設。伊太利とシーザー領のゴールとの界の河の名で、シーザーはポンペイと戰ふため此の河を渡つたと云はれる。轉じて境界線の意味になつた。

白利南路（ブレナンル／パリネール） (E. H. Brenan) 一九〇一年開築。牛津大學卒業後北京領事を勤めた英人。

虹　橋　路（ホンジョールル）　一九〇一年築造。

憶定盤路（エディンバラル／エディンベール） (Edinburgh) 一九〇年開設。一八六九年エディンバラ公が來滬されたのを偲ぶためである。上海への國賓は公が初めての事とて熱烈に歡迎申したとの事である。

康腦脫路（コンノートル／コンナータル） (Connaught) 一九〇六年開築。一八九〇年來滬されたコンノート公に由來する。

で、面積七・九二三エーカー（エーカーは約四段）に及んで居る。今越界道路發達の跡を辿つて見る。

(一)第三章に説いた通り小刀會、長髮賊の亂により租界內は外支人で滿員狀態となり、擴張の止むなきに至つて居つた。

(二)一八四五年成立の土地章程には租界擴張の規定はなかつたが、一八六六年に改訂せられた土地章程には土地を買收する口實を與へるやうな規定を挿入する事に成功した。

(三)從つて內亂に際して租界外に警備に赴いた義勇隊は、內亂平定後も種々の施設をなしたる事を口實に中々徹退せず、その儘越界道路に繰入れて了つた。

(四)實は外人は乘馬用、ドライヴ用として郊外に道路を熱望して居つた。

(五)かゝる情勢にあつたのに、一八九四年の日清戰爭で支那が大敗北したので、支那はこの弱腰を見透され、外國側の要求を拒絕し切れなかつた。事實一八九九年以後の數度に亘る擴張は驚くべきものがある。

(六)支那側は此の越界道路が國權侵害の一つであるとして回收運動を起して居つたが、一九一五年支那が前歐洲大戰で聯合國に味方したゝめ、此の頃から支那は勢を得て、一九二七年支那側が上海特別市制を施いてから擴張は阻止せられるに至つた。

滬西越界道路

極司非而路（ゼスフキールドル）（ヂエスフイールル）　一八七六年開設され、更に一九一三年延長せられた。西端に極司非而公園（華名で兆豐花園（ゾオフオンホウユエ）

呉淞帆影　呉淞は今の蘇州河。
無梁夜雪　無梁殿は法華寺附近觀音寺內にある。
殿春花墅　殿春は春の末に咲く花即ち牡丹で、今は殆どその跡を止めないが、昔この區域は牡丹の名產地であつた。
叢桂早秋　叢桂堂は一名北園と呼ばれ、王璞の別業。
滿月春晴　滿月閣は法華寺內にある。
古岡風荻　古岡は觀音寺の後にあつて、宋代一萬人の工人を以て造つたので萬工山の別名がある。
兎も角も此の方面は前世紀末より今世紀初頭にかけての越界道路の延長されるに連れて發達し、支那道路と工部局道路とが入込んで極めて錯雜な狀態となつてゐる。

越界道路

越界道路又は越界築路は共同租界の道路で、外國人は之をエクスターナル・ロウド或はアウトサイド・ロウド（外側の道路）又はエクストラ・セツルメント・ロウド（租界外道路）と路ぶ。邦人はよくエクステンションと云ふが、之は「擴張」と云ふ抽象名詞で道路の意味にはならない。文字通り租界外に擴がつた道路で、工部局は右の道路上及び之から派出す袋路並に之等の道路に接續する家屋に對し或程度の行政權、即ち警察權、課稅權、其の他衛生上の諸權利を持つて居る。所謂越界道路は主に滬西と北部（即ち虹口）とにあつて、その延長四八哩

へば「ニセ紳士」の事で碌な意味はない。上海は昔から餘り評判のよくなかつた所らしく、事實「滬遊雜記」あたりにも當時上海には流氓(ごろつき)、折梢黨(詐欺漢)、野鷄(荷物の持逃)、惡車夫、掉包(すり)、剪綹(きんちやくきり)、白撞(ひるとんび)の類が夥しく、當時豆腐屋が多くあつたが、之等が何かの理由で失業して無賴漢になる者が多く、之を豆腐黨と呼んだとある。東本願寺上海「開教六十年史」にも、東本願寺の別院建築材料も知らぬ間に少し宛減つて居ると云ふ始末で、偷人が多くて困つたとある。「繪圖騙術奇談」などの本が發行されたのも、元來好奇心を惹くため詐欺の種々相を書いたものだが、一面詐欺手段を知る事によつて被害を免れようとする用心書とも見られぬ事はない。

滬西の發達

前世紀初頭に於て徐家匯、靜安寺、法華鎭、周家橋は既に一つの部落をなして居つた。同治二年(一八六三年)英商が曹家渡を拓いた。小刀會の亂、長髮賊の亂と內亂が打續いて荒廢したが、又一面道路は軍用として開築されたのもある事は見逃す譯に行かない。次に縱溪八詠を載せて當時を偲ぶ事とする。縱溪は即ち縱涇(ゾンキン)で、法華寺附近を貫流するクリークである。從つて縱涇は法華の別名でもある。李公祠が河畔にあるので、他の縱涇と區別するため普通李縱涇と呼ばれる。

重元曉鐘　重元寺は靜安寺の古名。

斜陽塔頴　龍華寺に落ちる斜陽。

第五章　滬西

區域

滬西とは城內の西方、即ち梵王渡（法華渡の轉じたもの）方面より同文書院大學に亘る地方を指す。此の地方を妙法蓮華經の寺である法華寺があるから法華鄕とも呼ばれる。現在我國の警備區域である。

上海の語源

上海の語源に就ては諸說があるが、一番首肯の出來るのは、「其名上海者地居海之上洋故也」（弘治上海志）である。即ち楊樹浦方面に下海と云ふ所があつて、それに對して滬城の地を上海と云つたと云ふ說である。上海を一名上洋と云ふのもそのためであらう。今でも昆明路と茂海路との交叉點に下海廟と云ふのが殘つてゐる。外國語のシヤンハイ（古くはShang-haeと書かれた）なる言葉は亞米利加では一八七一年、英國では一八八七年夫々初めて文獻に現はれて居る。

上海の世評

面白い事には此の上海なる固有名詞が動詞化して使用される事で、海洋俗語で「麻藥をかけて又は泥醉させて、水夫として使役するため船へ連れ込む」意味がある。又少し古い用法では、上海から輸出される脚長の鳥からの聯想で「丈の高い伊達者」だとか、「大安賣の競賣向の拙劣な繪」だとか、又シヤンハイ・ゼントルマンと云

南翔は此の地を梁の時代に德齊法師が開いた時、何處からともなく二羽の鶴が舞ひ來つて長く留つてゐたが、其の後此の鶴は南方に飛翔して再び歸來しなかつた。故に南翔寺と稱し、寺名が町名となつた。

其の他

典當街（テイトンカ）　支那人は質屋が多いのでかう呼ぶが、佛人は長髪賊の亂の時義勇軍を指揮して戰死したプロテ大將より、ル・プロテと云ふ。同大將の紀念像は今尙佛公會堂內にある。

老北門街（ロウポモンカ）　佛語ではル・ド・ラ・ポルト・ド・ノール（北方城內の入口）と呼ぶ。

興聖路（シンセンル）　佛語ではル・ド・ラ・ミション（傳道路）。

自來火行東街（ヅレフオントンカ）　瓦斯會社の東にあるから此のやうに呼ぶが、公董局名はル・デ・ペール（長老街）である。

坟山路（ヴエンセル）　此の路を進めば佛蘭西墓地に出るから此の稱がある（坟山は墓地の意）。佛語のル・ド・シメチエールも同意である。

天主堂街（テイツドンカ）　天主堂があつたからの稱であるが、公董局は天津進軍の時の指揮官よりル・モントーバンと呼んでゐる。

聖母院路（センモウユエル）　尼僧の路、ルート・デ・スール。

自來火行西街（ツレホーオンスーカ）　瓦斯會社の西の街で、公董局名はル・デ・サイゴン（西貢街）。

火輪磨坊街（ホルンモブオンカ）　製粉工場があつた。ル・ド・モーラン。

愛麥虞限路(V. Emmauuel III) 前歐洲大戰で同盟軍より聯合軍に轉向せられた伊太利皇帝エマヌエル三世。

海格路(Haig) もと長髮賊の亂の當時常勝軍が軍用に築成した道であるが、前歐洲大戰の英國名将の名を付けた。

支那人名

善鐘路 一九〇二年同路開築の時善鐘なる一家の馬小屋があつたゝめだと云ふ。

朱葆三路 定海人で、一九一八——〇二年上海總商會長で佛租界のため盡力する處大であつた。佛租界東端典當街附近の小路で、恐らく上海で最短の道であらう、キヤバレーと酒場の街で、夜間各國の水兵で賑はひ、よく口論の末流血事件が起るので流血路の俗名がある。

靈桂路 一八四九年當時の上海道台(地方官)。

徐家匯路 除光啓なる熱心な天主教徒の後孫が今の徐家匯の地に教會を創立したのに依る(第一章參照)。匯は上海の地名に多く表はれ、その地を中心として水の廻り流れる所を云ふ。

支那地名

共同租界と重複する支那地名から採用された道路がある事は本章の初めに指摘したが、之は兩當局が協當する事なく別々に命名したのによる。其の他支那地名から由來するものに吳淞江路、寧波路、南翔路等がある。

貝勒路(Bayle) 佛蘭西ベイル將軍。

佛國關係物及人物

賈西義路(Cassini) 長髮賊の亂の時派遣された軍艦名。

麥高包祿路(Marco Polo) 軍艦名で、四明公所事件當時佛陸戰隊を上陸せしめた。

福開森路(John C. Ferguson) 米人で一八六六年ボストン大學卒業。一八八八――一八九七年南京大學總理、一八九七――一九〇二年南洋公學總理、一九〇二――一九〇三年交通部秘書、一九〇三――一九〇五年鐵道監理局秘書長、引續き支那政府顧問となり、一九〇三年には上海租界擴充に盡力したゝめ、米人でありながら佛租界の路名となつて殘つて居る。一寸附言しなければならないのは、工部局監修の上海地圖に Route Fergusson とあり「上海研究資料」にも同樣の綴字を示して居るが、之は Route Ferguson の間違である。前者の綴字を持つた人も上海に居住し居つたが、その人は佛租界と少しも關係のない人で、排他的な佛人がかゝる人名を採用する筈はない。

潘興路(Pershing) 前歐洲大戰で英佛側を援けた亞米利加名將。

普恩濟世路(J. Prentice) 在滬五十餘年に及んだ造船家。

亞爾培路(Albert) 舊名は寶隆路と云つたが、前歐洲大戰で聯合軍側として戰はれた白耳義皇帝の名を採つて改名した。

見せたが、不幸墜死した。今でも顧家宅公園内に同氏の紀念碑があつて、「君中國第一の飛行家となす。君の奮勇及び死義は、實に佛蘭西の光榮を增す云云」の文字が見える。

杜美路(ドメル)(Doumer)一九〇〇年安南巡査二十九名を連れて來滬した安南總督。

巨撥來斯路(デュプレクスル)(Dupleix)英佛の印度侵略に當り兩國が鎬を削つた時、佛の英傑デュプレクスが一七四二年印度殖民地總督となつて大に腕を振つた。

將軍

貝當路(ペタンル)(Petain)前歐洲大戰の佛名將。

霞飛路(ヤヒル)(Joffre)以前は寶昌路(ポーチヤンル)と呼んだが、前歐洲大戰の佛ジョフル元師が一九二二年日本に來遊し歸途上海に寄つた時公董局は大歡迎をし、その時寶昌路が新式に改築されたので盛大な開路式を行ひ、同元帥の名を付けた。一九一八年頃迄には上海には露西亞人は少かつたが、同年即ち革命後白系露人の流入する者が多數に上り、霞飛路あたりを根據地としたので、此の路は俗に小露西亞(リツル・ラシヤ)又はブールバール・モスコウと呼ばれる事がある。西部方面は高級住宅地である。

古拔路(クールベル)(Courbet)一八八四年清佛戰爭當時の東洋艦隊司令長官クールベ海軍中將。

福煦路(フツシユル)(Foch)前歐洲大戰の勇將フッシュ元帥より。舊名は大西路(ダーシル)又は長濱路(ザンパンル)。

辣斐德路(ラファイエトル)(Lafayette)前歐洲大戰の陸軍名將より採つて一九一四年開築した。

趙主教路 (Mgr. Maresca) 董家渡の天主堂牧師で、法租界未成立以前に來滬した。

姚主教路 (Prosper Paris) 耶穌會主教。

金神父路 (Pére Robert) 天主堂神父ロベール師で、公董局の市參事會員でもあつた。以上の三路に何故趙姚、金の漢字を當てたのか不明である。

孟神父路 (Pére Meugniot) 市參事會議員でもあつたメーニオ師の頭字を採用した。

勞神父路 (Pére Froc) 一八六三年の創設にかゝる舊天文台があつたので、天文台路 (Rue de l'Observatoire) と呼ばれてゐたが、新天文台が徐家匯に出來たので、その主任勞績勳師の頭字を採つて新名とした。

杜神父路 (Pére Dugout) 南京に傳導中、一九二七年死亡した。

愛來格路 (Allegre) 尼僧であつた。

薛華立路 (Stanislas Chevalier) 徐家匯天文台神父であつた。

佛國名士

高乃伊路 (Pierre Corneille) 十七世紀の劇詩人。

莫利愛路 (Molière) 同じく十七世紀の劇詩人で「僞善者タルチユーフ」とか「ドン・ヂヤン」等の作品で有名。一九一四年前路と共に開設された。

環龍路 (Vallon) 佛飛行家で、一九一一年來滬して江灣競馬場から靜安寺路競馬場へと飛行機に乘つて

望志路（Wantz）技師長であつた人。

藍維靄路（Rabier）一九一五年當時巡捕房總監であつたが、前歐洲大戰で戰死した。舊名は肇州路と云ふ。

白賽仲路（Gustave de Boissezon）技師長。

佛國居留民

雷米路（Remi）廣東で時計や洋酒の業を營んで居つたが、一八四八年上海に來て土地會社を興した。

麥賽爾蒂羅路（Marcel Tillot）一九〇七年當時上海中法新彙報の主筆。

蒲石路（Bourgeat）民國初年に辯護士であつた人。

麥底安路（Vincent Mathieu）もと工部局路と呼ばれたが、前歐洲大戰で戰死した佛人の名を採つて現在のものとした。

貝禘鏖路（Lieutenant Petiot）、陶爾斐斯路（Dollfus）（舊名は軍官路）、福履理路（J. Frelupt）（舊名は靶子路——射的場路の意）、西愛咸斯路（Hervé de Siéyès）、拉都路（R. Tenant de la Tour）、巨福路（Louis Dufour）、麥尼尼路（Magniny）は皆前歐洲大戰の戰死者の名を傳へて居る。

鐵士蘭路（Picard Destelan）多年中國郵政局に勤めた人で、舊名は台斯脫郎路。

宣教師

あつて、寗波人で上海に出稼ぎに來て居る者の集會所であり事務所であり、特に上海で死亡した寗波人の棺を假安置する場所であつた。寗波附近に四明と云ふ所（四面玲瓏にて明かな、四窗とも云ふ、故に四明と云ふ）があるから寗波を四明と云ふので、此の假墓場の如きものを取拂つて新道を開築しようと强硬に主張したのが此のワサン氏であつた。此のために暴民が蜂起して、支那人十七人を殺した四明公所の流血的慘事を起した。然し結局は同氏の主張が通つて寗波路（ニンポル）（舊英租界にも同名の道路がある事に注意）と自來火行西街（ズラフオンシーカ）とが開通した。華成路は云ふ迄もなく中華民國を完成繁榮せしむる意味を含んで居る。

安納金路（エネキンル）(Hennequin) 一八七四年當時の市參事會議長。

平濟利路（ブランチル）(Bluntschli) 一八八一年當時の市參事會副議長。

奧利和路（オリオンル）(Orion) 一八八四年當時の市參事會議長。

維爾蒙路 (Vouillemont) 一八八五年當時の市參事會議員。

薩坡賽路 (Chapsal) 一八九〇年當時の市參事會議長。

白爾路 (Eugine Bard) 一八九七年當時の市參事會議長で、寗波路と自來火行西街を更に延長しようと提議して、第二次の四明公所事件を惹起した。

祁齊路（ギシール）(Ghisi) 一九〇四年市參事會員となる。

公董局職員

上海駐在領事

敏體尼蔭路 (Montigny) 一八四八年初代總領事。
愛棠路 (Edan) 一八六〇年當時の總領事。「棠」は「梨の一種」を意味する。
華格臬路 (Wagner) 一八六三年當時の總領事。
白萊尼蒙馬浪路 (Brenier de Montmorand) 一八六四年當時の總領事。
賈業愛路 (Francis Garnier) 一八八〇年當時の總領事。
愷自邇路 (Kraetzer) 駐滬總領事。
李梅路 (Lemaire) 一八八四年當時の總領事。
巨籟達路 (Ratard) 一九〇七年當時の總領事。
甘世東路 (Gaston Kahn) 一九一三年當時の總領事で、顧家宅以西徐家滙に至る地域を佛租界に編入した。

市參事會員

皮少耐路 (Buissonnet) 製絲業を營んだ佛商人で、一八六二年市參事會員となつた。
麋鹿路 (Millot) 一八六六年當時の市參事會員。
茄勒路 (Galle) 一八七二年當時の市參事會員。
華成路 (Voisin) 一八七四年當時の市參事會議長で、當時城內西北方に當つて四明公所（寧波會館）が

間の支那史を詳細に知つて居る人が、自動車にでも乘つて佛租界を馳驅して路標を見るならば、阿片戰爭以來の支那史が走馬燈のやうに頭を過ること〻思ふ。

佛蘭西語では道路の大きさの順にアベニュー、ルート、ルーがあり、又城壁の跡に作つた道をブールバールと云ふ。之等を霞飛路、高恩路、蒲柏路、敏體尼蔭路のやうに路名の頭につけて發音するが、此處では煩雜を避けるため一樣に支那音の路で以て代用し、路名の後につけた。佛租界の路名を分類すると次のやうになる。

公使及び大使

喇格納路（Lagrene）駐支第一代公使。

葛羅路（Baron Gros）一八六〇年當時の駐支大使で、英公使エルヂン伯と共に英佛聯合軍の北京侵入に際し活躍した。舊名を嵩山路（ヨモギの山）と云つた。

呂班路（Dubail）一八九八年當時の駐支公使で、租界の擴張に盡力した。南市魯班路參照。古くは市參事會議長の名を採つて Avenue Paul Brunat と呼ばれた。

畢勛路（Pichon）一九〇二年當時の駐支公使。

愷悌路（Conty）一九一四年當時の駐支公使で、佛租界第三次大擴張は同氏の外交手腕によつた。

蒲柏路（August Boppe）前歐洲大戰當時の駐支公使。

め支那人の避難民が多數流入した結果又佛蘭西側もそれを理由に支那側と交渉を續け、一八六一年の第一次擴張一九〇〇年の第二次擴張、一九一四年の第三次擴張を經て現在の如き廣範圍となつた。

十六舖 城內の東方に黃浦江に至る迄の小區域があるが、之を十六舖(セロプー)と云ふ。商店が十六軒あつた事に由來すると思ふが、一八六〇年長髮賊が上海を攻擊した時、佛軍がよく戰つて之を退却せしめた功により翌年支那側より割讓を受けた土地である。此の十六舖に洋行街(ヤンオンカ)と云ふのがあり、嘉慶上海縣志にもその名が見えるから、餘程古くからあり、又租界開設以前から外國貿易があつた事の證據ともなる。

此の十六舖に福建路(フチール)、大沽路(タークール)、閔行路(ミンオンル)（江蘇省都市名）、舟山路(ツーセール)、台灣路(デーウエール)と云ふ路名があるが、困つた事に共同租界にも同樣の名の道路がある。兩當局が何等聯絡協議する處なく命名したのによる。共同租界のと混同する事を防ぐためであらうか、大沽路は太古路とも書かれる。

佛租界路名の特徵 共同租界には支那省名・都市名の道路があつて比較的親しみがあつたが、佛租界の道路は殆ど全部佛蘭西關係のもので、其の內人名が大部分を占めて居る。之を緣起のよい漢字に當嵌めて居るので、一寸見ては發音も出來ぬものがある。「ポウ」を寶、「ト」を德、「マ」は麥のやうに規則的に當嵌めてあるのもあるが、優麗な名を付け度いのは人情の常であつて、結納の目錄に似た如き目出度い中國文字を勝手に組合せて原音から遠ざかつて居るのが多く、ル・カウフマンが國富門路(コフモンル)、ル・ルメールが李梅路(リーメール)、ル・デユフールが巨福路(デーフール)になる類である。

共同租界を步くと支那地理の勉强になるが、佛租界を步き廻ると今度は東洋史の勉强になる。恐らく近世百年

第四章　佛蘭西租界

租界と公董局

佛蘭西駐滬初代領事モンティニ氏が支那側と交渉し、一八四九年四月六日佛租界が誕生した。舊英租界をイングリッシュ・セツルメントと呼ぶに對し、佛租界はフレンチ・コンセションと云ふ。今セツルメントとコンセションの相違を調べると、前者は外人が住居し營業するための地域を、支那政府が劃定して指定し、その地域內で外人が土地を得るには、直接支那人の土地所有者と交渉して、所有權に等しい永代借地權を買取り、支那當該官廳及び自國領事館に屆出て登記する方法によるものを云ひ、後者は外人が住居して營業するための一定地域全部の永代借地權を、支那政府から外國へ讓渡すので、其の國の領事はそれを區分して主として自國人に拂下げる方法によるものを云ふ。又工部局に對し佛租界（又は法租界）市役所を公董局（コンミトンヂヨ）と呼ぶ。此の最初の公董局の建物の正面に大時計があつたので、支那人は公董局の事を大自鳴鐘（ドズミンツオン）と俗稱する。ピヂン・イングリッシュ（東洋英語又は洋涇浜英語）では佛租界をフランス・タウン或はフレンチ・タウンと云ふ。

街路

擴張　一八五六年フランス・バンド（法租界外灘路）が開築され、續いて公館馬路（コンクエモル）（領事館がある街路）を中心とする部分に道路が出來た。最初は佛租界は城內北側の小區域であつたが、英租界と同樣屢次の內亂のた

國語ではパブリック・ガーデンに統一せられた。ガーデン・ブリッヂの名はその南詰に外灘公園がある事によるのは勿論である。「滬城備考」巻頭に「上海未築城古蹟圖」なる地圖があるが、之に今の乍浦路橋（二白渡橋）の所に闕橋と云ふ橋が見えるが（實は十五世紀末の建造）無論木橋であつたであらうからやがて朽落して、それからは蘇州河には久しく橋の便なく、渡舟を利用して居つた。處が前述した通り一八五三年小刀會の賊軍が上海城を占領するに及び、支那人が租界に殺到し、急に蘇州河北に渡る者が多くなつて、橋の便が痛感された。此の情勢を見て利に敏い英人威爾司（ウヰルス）なる者が、一八五六年元の闕橋の附近に木造の橋を架け、威爾司橋と稱し、渡賃毎回一人に付き二文徴收した。世上よく此の橋の圖を示してガーデン・ブリッヂの前身と云ふ者があるが、今のガーデン・ブリッヂとは位置が大分違つて居るから、その前身と云ふ事は出來ない。

ウヰルスは此の橋で大分利益を得たので、一八七一年別の所に今度は鐵橋を架けようとしたが、工事に疎漏な點があつて橋身の一部が河に落ちて完成しなかつたのである。此の頃外國人の中には渡錢を出さぬ者もあつたのに、支那人のみからは之を嚴重に徴收したので不平が次第に昂まり、此の情勢を見て工部局は一八七二年浮橋を作つて無料とした。

威爾司橋は木造でもあり大分年數も經つたので腐朽して使用出來なくなつたので、一八八九年工部局は工務處主任メインをして今のガーデン・ブリッヂの所に鐵橋を造らせた。それを更に一九〇六年現在の如きものに改築したのである。もと蘇州河に架つて居る橋の内で一番外側の橋と云ふ意味で外擺渡（ガーパドジョー）橋と書かれたが、今では一樣に外白渡橋と書かれる。現在では蘇州河に十二の橋が架つて居る。

云ふ。之は同寺の前に海眼（ハイイエン）と稱する井戸があり、炭酸瓦斯の發生のため常に泡立つてゐるからである。現在では瓦斯が出盡して餘り泡立たない。世界中に七つの興味ある道路があつて、靜安寺がその一つだと云ふ。此の路の西方以大帮街と同意語である。

南京路の中央、直隷路（チーリール）の突當りに紅廟弄（オンミヨーロン）と云ふ路次があるが、之は花柳界で人氣のある保安司（ボオエス）徒廟（トミヨー）と云ふ觀世音を祀つたお寺があつて、紺字に紅の垣があるから俗に紅廟（虹廟と書く事もある）とも云ふ。此の裏側及び北京路には家具類や木器類を賣る店が相並んで居る。更に北京路の西方の保康里（ボオコンリ）は鐵物店の町で、衣服店は石路が專門で、新古の書店は四馬路や泗涇路（スーチンル）の突當りの棋盤街、及び三馬路の揚子飯店東方の區域が占めて居る。五馬路の滿庭坊（マンテインフアン）は贓品市場があるので有名で、贓品が庭に滿ちてゐる町だと解するとユーモラスである。

雜　錄

嘴と叉袋角　陸地が水中に突出した所、即ち岬に「嘴」と「叉袋角」との名が與へられてゐる。前者は同じ岬でも先が餘り尖鋭でないものと云ふ。例へば浦東にあるバンドの突當りの陸家嘴（ロカツ）（プートンポイント）とか、龍華の向ひの龍華嘴（ルンフオツ）（ルンワ・ポイント）がそれである。其の他周家嘴、曹家嘴、高昌嘴等がある。後者は三角に尖つた部分を云ふので、內外綿會社工場のある莫干山路附近に叉袋角（ツオデエコ）がある。支那人が道傍で南京豆を入れて賣つてゐる三つ袋を思出す。

外灘公園と外白渡橋　パブリツク・ガーデンは上海で最古の公園である。バンド・ガーデン、外國花園、公家花園、公共花園、大橋公園、外擺渡公園、黃浦灘公園と色々に呼ばれて來たが、近來は支那語では外灘公園（ガーテコンユエ）、外

圓明園路(ユエンミンユエル)　北京の離宮名。

澳門路(マカオル)(オモン)　廣西省のポルト領の港市。もとは亞媽澳(マカカオ)と云つて「天妃の港」の意味であつたものが現在の如く短縮した。

大沽路(タークル)　沽なる名の大小二川があつて、小沽に對して大なる方が大沽と呼ばれた。

外國路名　南北は四川路と江西路とに挾まれ、東西は南京路と九江路とに挾まれた小路は英語では古い英國居留民の名を採つて Edward Ezra Road と呼ぶが、支那人には新康路(シンコンル)である。博物院路(ポーワユエル)には一八七四年の創立にかゝる博物院があるので Museum Road と云ふ。仁記路(ゼンチール)は英商仁記商會があるためである。西部方面では蘇州河に小沙渡なる渡場があるので小沙渡路(ショーソードル)の名があるが、工部局名は Ferry Road である。

靜安寺競馬場西方一粁の地點に斜橋路(シャジョール)があるが、クリークに斜めの橋が架つて居つた事に由來する。處が外人は之を戀愛路(ラヴレイン)と呼んでゐる。又極司非而公園内にも俗稱で愛人路(ラヴァーズ・レイン)がある。戀人達の逍遙に適するのでかく命名したのだが、此處に東洋人と西歐人との特色が分明に表はれてゐる。勿論戀愛の概念に就ては東西で相當の懸隔ありとは云へ、東洋人は男女愛を奥床しいものとして表面に出さぬに反し、西歐人は公然と之を路名などに採用して居る。ベーゼに就ても東洋人は之をベッド・チェンバー内に限るのに(Yuan: Through a Moon Gate)、英米人は可成公開的である。

西部方面の幹線道路である靜安寺路(アンエズル)が完成したのは一九二一年の事である。龍華寺と同樣二千三百餘年に及ぶ古い歷史と傳說とを持つた靜安寺が此の道路の西端にあるから、その名があるので、英語では泡湧泉路(バブリング・ウェル・ロウド)と

園を一名愛儷園と云ふ。此の横の道が哈同路である。

赫徳路 (R. Hart) 一八六二年上海税關長となり、支那の燈台・郵政等に盡力した。

勞合路 (G. T. Lloyd) 「ロイド週刊」、「船舶評論」、「サウス・チャイナ・モーニング・ポスト」の主筆であつた。

麥根路 (Markham) 長髮賊の亂當時の英國副領事。一八七六年英軍輸送用に築造したものを後改修した

麥特赫司脱路 (W. H. Medhurst) 上述した如く工部局最初の市參事會員の一人で、路名を支那地名に變更した。

西摩路 (Adm. Seymour) 拳匪事件當時活躍した英國海軍大將。

文極司脱路 (C. A. Winchester) 一八六八年當時の英國領事。

同孚路 (M. T. Yates) 十九世紀中葉上海に在住した米國宣教師。同路には婦人裝身具店が多いので、ベチーコウト・レイン又は下衣路の俗稱で有名である。

其の他の支那地名路 前記の洋名より變更された支那地名路以外で主要なものは左の如くである。

蕪湖路 安徽省の都市で、水淺く雜草が生ひ茂るから此の稱がある。

無錫路 南北に分れ、江蘇省の都市。昔錫が產出されたが、それが掘り盡されたので無錫と云ふと。

香港路 紅香爐山と呼ばれた巖石嵯峨たる島。Hongkong なる發音は廣東音を摸したもの。

莫干山路 「吳王鑄劍之地、劍名莫邪干將」。

兵士が戰鬪中クリークを渡つてひどく濡れたと云はれて居るので、元來泥脚戰と云はれるべき所、誤植か何かで泥地戰となつたのであらう」と云つてゐる。然し英語のフットがフラットに誤傳されたと云ふのも一寸首肯出來ない所である。此のやうに西洋の學者は頭を惱まして居るが、吾々には泥地戰と云ふ名は極めて自然に響く。本章の初めにも述べた通り、當時あの地方は沼やクリークの地であつて、且つ戰鬪に當つてはクリークの泥土を積上げて保壘とし、そのやうな土地狀況のもとで戰爭したのであるから、之を泥地戰と云つても吾々には少しも不自然に思はれず、疑問も起らない。今でも老上海が泥城橋と云つてゐるのは、之を證して餘りあると思ふ。

外人名路　十九世紀末より今世紀初頭にかけての打續く內亂によつて、支那人の租界に流入する者無數で、ために租界は擴張せられ、競馬場の西へ西へと延びて行つた。此の頃になると開港に盡力した人とか、租界に功勞のあつた人を偲ぶため英米人名が路名に採用されるやうになつた。（アルフアベット順）

巴爾福路（G. Balfour）　一八四三年十一月着任の第一代英國領事で、在職三年。博物院路と北京路との交叉點附近の小路。

白克而路（A. W. Barkill）　競馬場西北方を東西に走る路で、バーキル商會主で、工部局職員ともなつた。

戈登路（C. G. Gordon）　日本の紡績會社が多くあつて、邦人間に馴染が深い。長髮賊の亂に當つて、官軍側の常勝軍を指揮して功があつた。

哈同路（Hardoon）　南京路より靜安寺に行く途中廣大な哈同園が見えるが、之は英系猶太人ハードーンの私園で、現在主人は此の世になく、廣東人の未亡人が守つてゐる。此の未亡人の名を儷蕤と云つたので、同

Seventh とも呼ばれる。

西藏路　次で西端に西藏路（シーザンル）が築造されたが、此の路と南京路との交叉點を老上海で今でも泥城橋（ニーズンジョー）と呼ぶ。その譯は長髪賊の亂の頃は西藏路は周溪河と云ふクリークであり、賊軍の侵入を防ぐ目的で此の地點、即ち南京路より靜安寺路に渡る橋にクリークの泥土を積上げて保壘となしたゝめである。後周溪河は埋立てられて西藏路と呼ばれてゐたが、數年前工部局市參事會員でもあり上海總商會長でもある支那人の名を採つて虞洽卿路（ニューヤチンル）と改名された。同路の蘇州河北へ延長が北西藏路（ポシーザンル）と呼ばれて舊名を殘して居る。因に西藏の語源を探れば、此の地域はもと衛、藏、阿里、康の四部に分れ、前二者が主要部であつたので西藏を衛藏とも云つた。更に藏が主部を占めるので西藏と呼ばれる。

泥地戰　前述した通り一八五三年小刀會賊軍が上海縣城を占領したから、清朝は兵を派して之を平定せんとし此の官軍が租界西方に蟠居してゐたゝめ、此の官兵が租界に侵入したりして絕えず問題を惹起したので、租界當局は義勇隊を組織して之を追放せんとし、一八五四年四月五日工部局義勇隊と支那官軍との間に、周溪河を挿んで戰鬪が行はれた。此の戰がバトル・オブ・マディー・フラツト（泥地戰）と呼ばれるが、どの歷史家も此の泥地戰と云ふ名前の解決に困つて居る。先づモンタルト・ド・ジーサスは「歷史的上海」（一九〇九年）で此の語源は不明と逃げ、ホークス・ポツトは「上海小史」（一九二八年）で、「此の日天氣晴朗で、全く乾いた土地の上で戰はれたのであるから、此の泥地戰と云ふ名の源を知る事は困難である」と述べてゐる。ランニングは「上海史」（一九二一年）で、「天氣良く土地は乾いてゐて、渡るべき泥地はなかつたので、泥地戰と云ふのは可笑しい。一

西克(シーク)路(ル)――廣西路(クワンシール)。西克とは北方印度の一階級で、上海で門番や巡捕をして居る者は殆どそれである

路名の俗稱　工部局は地圖によつて順次省名や都市名を採用したに過ぎぬのに、支那人中にはかく支那の各方面の地名を路名となすのは、外人が支那全土を併呑する工作ではないかと邪推する者もあり、折角の路名の變更も支那人には餘り喜ばれず、彼等は勝手な俗稱に從つて居る。彼等に從へば北京路は後馬路(オウモル)、南京路は大馬路(ダモル)、九江路は二馬路(ニモル)、漢口路は三馬路(セモル)、福州路は四馬路(スーモル)、廣東路は五馬路(ウンモル)、北海路は六馬路(ロモル)である。

盆湯衖(ベンタンロン)　山西路北方一帶。湯屋が多かつたため。

致遠街(ツーユカ)　山西路以西一帶。致遠堂があつた。

晝錦里(ツーチンリ)　山西路南部。

抛球場(パオヂユーザン)　河南路中央。昔運動場があつた。

大新街(ダシンカ)　湖北路一帶。

偸鷄橋(トウチージヨー)　芝罘路一帶。昔クリークがあつて、田舍から鷄が輸送されて此處に集められてゐたのを、苦力達がよく偸んだからだと云ふ。

靖遠街(チンユエカ)　滿庭坊の南方。

寶善街(パオゼーカ)　廣東路東方。

棋盤街(ヂベカ)　河南路の南部。租界開設前からある古い名で、文字通り碁盤の目の如く縦横に區割されてゐるため。東西の二街に分れてゐる。Avenue Edward the Seventh (愛多亞路)はその愛稱を採つて Avenue Eddie the

黄浦灘（ワンプーエ）──揚子路（ヤンツール）。一八五〇年同路が築造された時は幅二十五呎に過ぎなかつたと云ふ。揚子路と云ふよりザ・バンドと云ふ方が耳に近い。此の道は更に虹口に延びて北揚子路（ポヤンツール）と呼ばれて名殘を留めて居る。因にバンドとは印度英語で「海岸通」の意で、上海固有のものではないので、定冠詞を附ける方が正しい。エスプネイド「海に面した平垣な堤」とも云ふ。

橋街（ジョーカ）──江蘇路（コンスール）。後更に四川路（スツエル）と改名。昔は今のガーデンブリツヂの所には橋はなく、今の四川路の附近にウヰルス橋と云ふ木造の橋があつたので、橋街と呼ばれてゐた。四川なる名稱は舊說に蜀境に岷瀘雒巴の四川があつた故と云ふ。

教堂街（チヨドンカ）──江西路（コンシール）。舊名の由來は、此の道と九江路との交叉點に大禮拜堂があるからである。

界街（カカ）──河南路（ウーネール）。昔の租界と支那街との境界線であつたから界街と呼ばれた。

廟街（ミヨーカ）──山東路（セートンル）。九江路との交叉點に外人墓地がある。太行山脈の東にある故山東と云ふ。一說に嵋函の東にある故と云ふ。

老閘路（ロウザル）──山西路（セシール）。舊稱は新閘に對し昔の水門があつたからである。太行山脈の西に位する故山西と云ふ。

石路（ザル）──福建路（フーチエル）。昔は石疊の道であつた。

蘇州路（スーツユル）──浙江路（ツエコンル）。浙江とは今は省名であるが、元來は文字通り河名で、古くは漸水と呼ばれ、それが曲折多いため浙江（折れた河）と云はれるに至つた。

上何も附けるべきでないので、洋涇浜クリークなど云ふのは三重の云ひ方となる譯で滑稽である。此のクリークが埋立てられて愛多亞路となつたので、今でも外洋涇橋、二洋涇橋、三洋涇橋と云ふ地名になつて殘つてゐるが、昔橋があつた事を指してゐる。洋涇浜英語、又は洋涇濱語と云へば支那語と英語と混つた一種異樣な所謂ピヂン・イングリッシュ（支那の港市で使用せられる簡便な實用英語）で、此のありが中心となつて使用されてゐたのによる。

領事館路――北京路。舊名は英國總領事館がその東端にあるからの稱。

寛克路――寧波路。カークとはスコットランド語で、英語の教會に相當する。スコットランド教會があつたからの稱。老公園路とも云ふ。

球場弄――天津路。昔の球場即ち競技場の跡。

公園弄――南京路。

縴道路――杭州路。後更に九江路と改名。當時クリークがあつて、其の傍の道に沿ふて舟を挽いたらしいので縴道路と云つた。

海關路――漢口路。

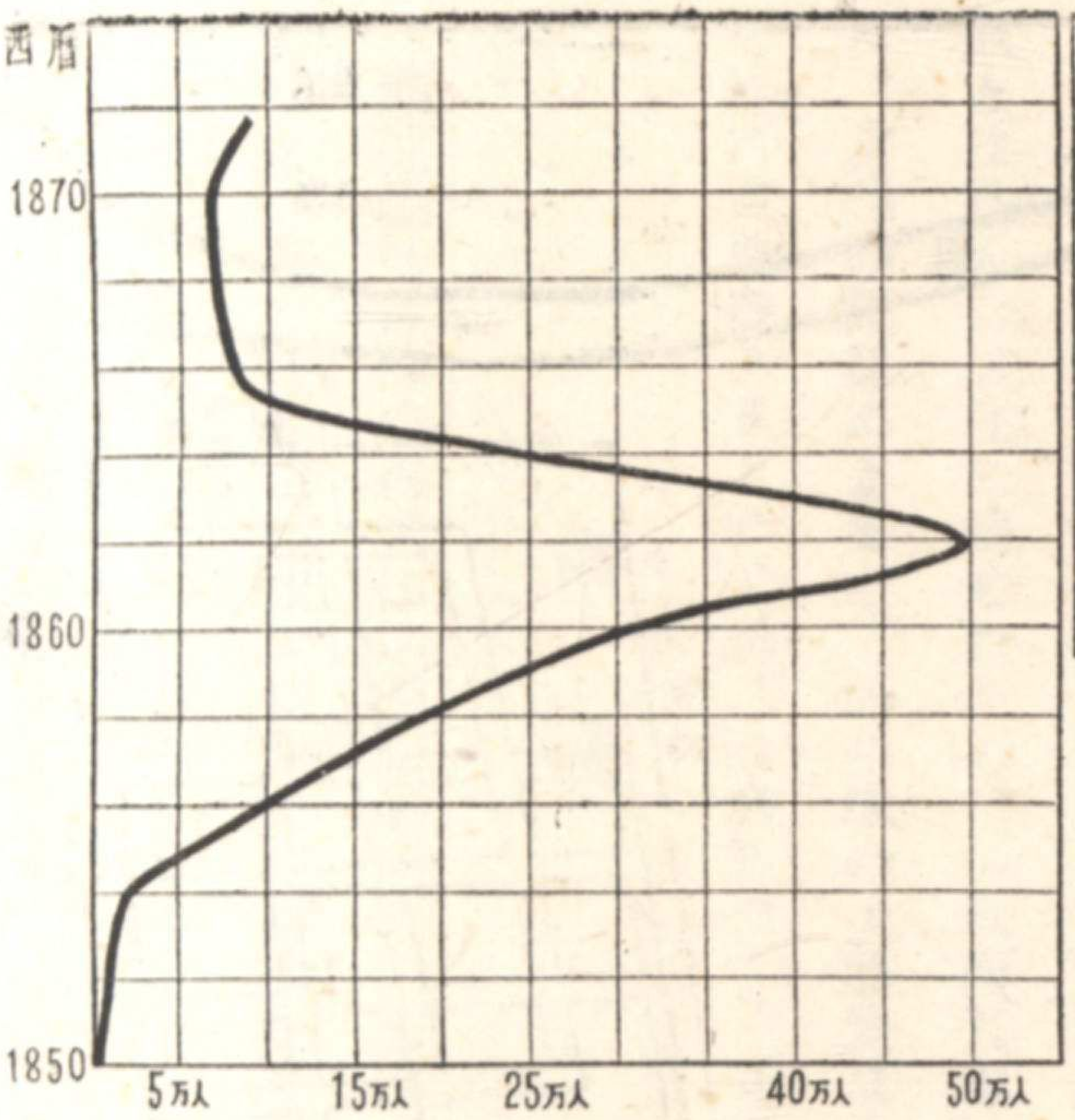
教會路――福州路。

北門街――廣東路。

南北の道路

が多くあつて氣前よく屋賃を拂つたので家屋を急造した投機者連は隨分と旨い汁を吸つた。そして此の幸運に夢中になつて狂へる者のやうに小屋を建て行つた連中も、叛亂が終末を告げて、避難民がなだれ込んで來た時と同じやうに慌て租界から出て行つたので、非常な損失を招き、中には破産する者もあつた。」(The Gateway to China, p.16)

租界初期の支那人人口



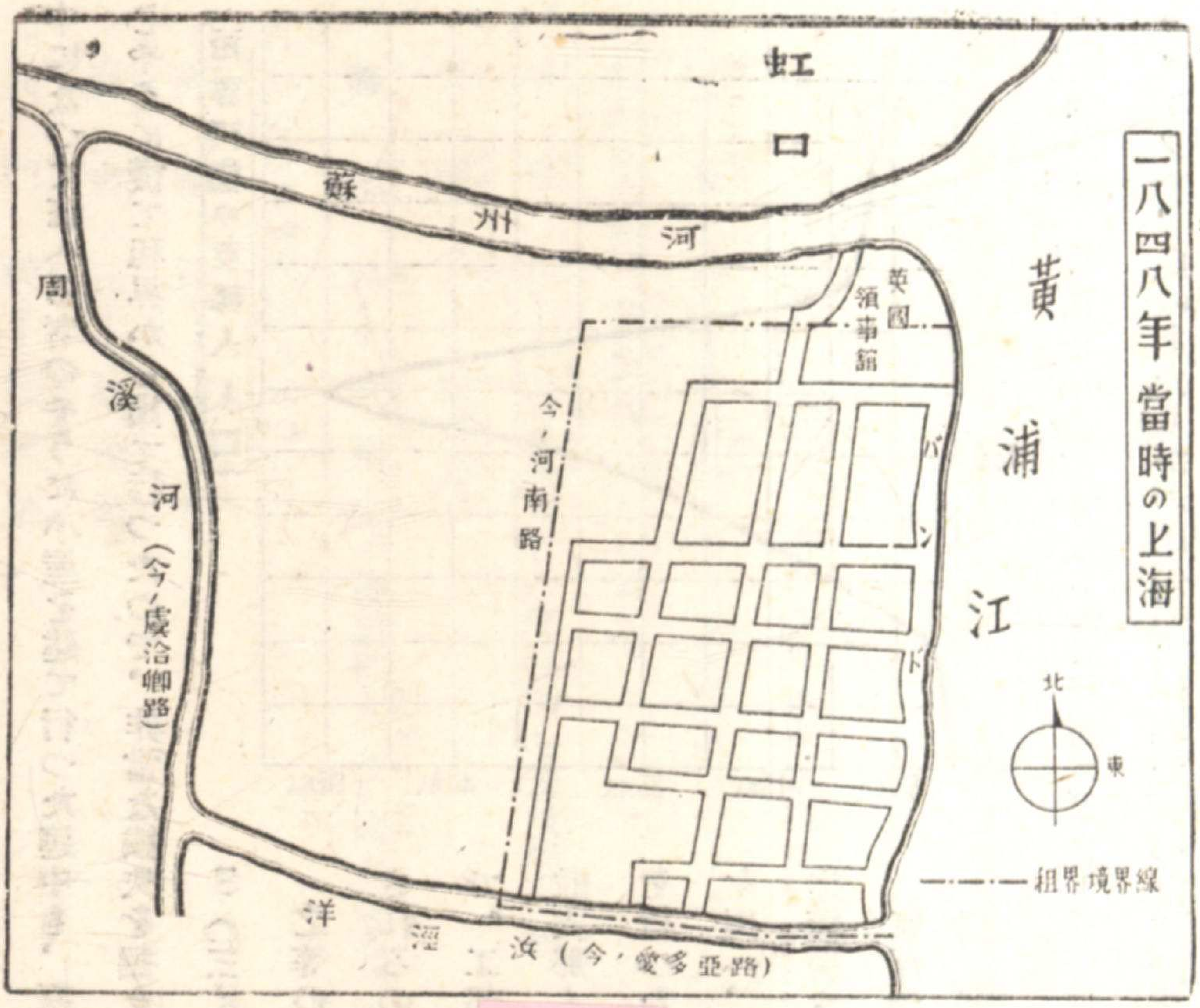
之等の支那人にはそれ迄の路名が、特にそれが英國式に發音されるので異國情緒はありながら、分りにくいものであつたので、工部局最初の市參事會員の一人であるメドハースト氏は一般支那人にも分り易くする事を提案し、一八六二年路名の變更を行つた。此の變更方針は、東西を走る道路には支那の都市名を與へ、南北の道路には省名を與へる事で、大部分それが現在迄續稱されてゐる。

東西の道路

蘇州河灘（スーツユウテ）——蘇州路（スーツユル）

洋涇浜灘（ヤンキンパンテ）——松江路（スンコンル）。後更に英國エドワード七世より愛多亞路（エトオル）と改名した。此の道は昔は洋涇浜と云ふクリークで、此のあたりが所謂夷場、洋場であつた。對岸の浦東の洋涇に相應じてゐるので洋涇浜と稱した。洋涇だけでもう完全な意味があるのに（第一竟參照）、更に同意義の「浜」を附けて使用された。であるから此の

ふものに工部局なる名を與へた。次で教堂街（チヨドンカ）、橋街（ヂヨカ）、廟街（ミヨカ）、球場弄（ヂユザンロン）等の大小の道路が築造されたが、之等は主に中心物特に建物の名を採つて路名とした。



一八四八年當時の上海

110-4

路名變更の原因　一方當時の租界內の支那人の人口を見ると、租界內に支那人が居住する事を許可してゐなかつたので、租界內に居る者はアマ、ボーイの如き者で、一八五三年に之等の者が約五百人居つた。其の後の租界內に於ける支那人の人口狀態を見ると次のグラフの如くになる。即ち一八五三年から翌年にかけて小刀會なる匪賊が上海縣城を占領したので、租界內に逃避する者が急增し、一八五五年には工部局側も折れて土地章程を變更して租界內に於ける支那人の居住を認めるに至つた。其の頃又太平賊が江南の地を荒掠したので、一八六〇年には一躍三十萬人、同六二年には五十萬人がなだれ込んだ。之等の顚末をゲイムウェル女史は簡潔に旨く述べて居る。「之等避難民を收容するために假小屋が建てられ、此の小屋は葦のやうに、一夜にして數百と增して行つた。之等避難民の中には富者

第三章　舊英租界

濫觴

一八四二年支那は阿片戰爭に敗れ、翌年外國貿易が開かれて外人が移り住むやうになつたが、城内の汚穢と臭氣とは外人の居住に適せぬため、一八四五年城外に土地を得て家屋を建築した。それも數棟に過ぎぬ有樣であつた。當時の記錄によると、此の地の大部分は土盛りしてあつて耕作には適したが、低地で沼狀の所もある始末、それに多數のクリーク、溝、池があつて、夏には蘆が繁茂した。

道路

舊道路　當時の租界は（附圖參照）、東はバンド、北は北京路、南は今の愛多亞路（エトオル）、西は河南路あたりまでゞあつた。其の時最初の四大道路である次のものが建設された。

海關路（ヘークエル）（今の漢口路）
縴道路（イドオル）（今の九江路）
公園弄（コンユル）（今の南京路）
領事館路（リンズークエル）（今の北京路）

當時の租界當局は之等道路の築造や碼頭施設をなものが主要な仕事でつたから、日本でならば市役所とでも云

滬城八景

上海の名勝を稱へたものに滬城八景、淞溜八詠、滬北十景があるが、滬北十景は餘りに抽象的に過ぎて記載の價値なく、淞溜八詠は滬西の部で記すとして、此處では縣志所載の滬城八景を註して懷古錄としよう。

海天旭日

黃浦秋濤

龍華晚鐘

吳淞煙雨　今の蘇州河。

石梁夜月　小東門外に架つた萬雲橋を指す。學士橋、又嘉靖二一年陸深が捐建したので俗に陸家石橋と稱し浦上巨觀であつた。

野渡蘪葭　日本側發行の案內書の類には、野渡は蘇州河上流の黃渡(前出)であると大膽に說明して居る。然し之では滬城八景の中に入らぬ。縣志も註を避けて居る位なので斷定は出來ぬが、浦東の陸家嘴附近(第一章附圖參照)に蘆子渡なる渡場があつたので、蘆荻が繁茂してゐた事が分る。更にその附近に官渡を設けたとあるから、此の官渡に對して野渡があつたであらう事は想像に難くない

鳳樓遠景　丹鳳樓(前出)よりの展望。

江皐霽雪　黃浦江岸の雪景。

より、楓林路は楓林橋より、謹記路は謹記橋（謹記號と云ふ老舖より由來）より、天鑰橋路は字の通り天鑰（天の下し給へる錠前）橋から由來して居る。此の內魯班路の魯班は支那の「大工の神」の意であるが、實は此の北續きは佛蘭西駐支公使から由來してゐる佛租界內の呂班路があるので、之を借用したものであるが、此の魯班路に果して大工の店が多ければ實に面白い命名と云はねばならぬ。但し魯班閣なる閣（咸豐八年粤幇造船匠公建在裏虹口）は縣志に見える。謹記路は俗名であつて、本名は西廟橋路又は豫豐路と云ふが、一九一四年近代式に開築せられて柏油路（コールタールの路）と改稱せられた。

龍華　此の方面で東西の大道は斜土路、瞿眞人路、康衢路、龍華路である。康衢路は龍華路のない以前此の方面の大道であつたので、廣小路を意味する。龍華路は南市隨一の大路で、一八九一年製造局により開築せられた。之を西進すると古い歷史を持つ龍華寺に出るから此の稱がある（第一章參照）。現在の寺は咸豐十年兵火に罹つて後直ちに後殿、鐘鼓樓を建立したものゝ姿である。但し塔のみは兵火にも燒失しなかつたらしく、宋太平興國二年重建以來八百有餘年を經過すると云ふが、多少の疑問なきを得ない。又塔名に就ても縣志類に明白な記載がなく、「寺前有塔」とか「古龍華塔」とかあるだけである。處が塔門の扁額（民國九年張慕韓題）には「報恩塔」とあり、又同寺の和尚も以前からこのやうに呼ばれてゐたと證言して居るから、報恩塔が本名で、龍華寺塔とは俗名であらう。城內露香園の水蜜桃が絕えて吾園へ移され、後龍華に移植されたので、此の地は今尙桃の名勝地である。龍華寺附近に水泥公司路が一九〇八年開設せられた。水泥はセメントで、セメント會社があるからである。瓜豆園路は一八九四年瓜豆園主人の陸雲僧が開築したのによる。

の使用例は一八七四年で（牛津辭典）、偶然にも「上海研究資料」に同年佛人米拉(メナール)が日本から人力車を上海に輸入したとある。然し一八六三年當時のバンドを寫した繪に東洋車が點在して居るから、今少し以前からの輸入に係るのかも知れない。「滬游雜記」（一八七六年）にも東洋車が租界を横行したとの記事がある。最初は二人乘であつたが、風紀上面白くないとの理由で一人乘となり、車體を黄色の桐油塗としたので黄包車と俗稱されるに至つた。西歐の人力車愛用家は之を grown-up's perambulator と愛稱する。

中部方面　更に歩を轉じて西門外に出れば黄家闕路(ウオンカチユエル)に到る。元代に此の附近に黄銘なる者が住んで、その黄家の門のある道と云ふ意で、支那人間に有名である。それより目出度い大吉路(ダチール)を經て西進すれば方斜路(フオンヂヤル)に行當る。斜橋の方に傾斜して居る故此の名がある。此の道を南下すると機器局路(チーチーヂヨル)となる。之は江南機器局なる兵器製造所があつたからで（もと虹口にあつた）、同治元年（一八六二年）李鴻章の奏請によつて設立された。その門前の道を局門路(チユーメンル)と云ふ。その突當りには高昌廟（宋の建立）なる廟があつたから高昌廟路(コウツオンミヨオル)（又は高昌路(コウツアンル)）と云ひ、更に進めば南站の南方の半淞園路(ピユスンユルル)に出る。之は此の道の南端即ち華中水電南市發電所の附近に支那式西洋式兼備の半淞園があるからである。黄浦の畔にあるから何故半黄園としなかつたかとの疑問が起るが、之は杜甫の「剪取吳淞半江水」に依つたもので、園内に剪江樓があるのでも分る。邑人姚伯鶴の設計になるものである。その東に宣統元年邑人沈志賢が造つた沈家園(チエンチヤユエン)があるので、その道を花園路(ホーユル)と云ふ。

西部橋名路　製造局より西方の南北に走る道路は、その北端にある徐家匯クリークに架る橋名から採用されて居るものが多い。新橋路(シンジヨール)は新橋より、魯班路(ルーペール)は魯班橋より、打浦路(タンプール)は打浦橋より、日暉路(ザホイル)は日暉（ヒガサ）橋

第二章　南市

領域

南市とは城内をも含み、十六鋪以南の所謂南島の地を稱し、北市即ち夷場（外人居留地）に對する地である。此の内城内は前章で說いたから、本章では支那バンドから南下して龍華に至る區域を扱ふ事とする。

街路

東部方面　南市東部の幹線道路は外馬路（馬路は大街道の意）と裏馬路とである。外馬路は中國外灘（支那バンド）とも呼ばれ、碼頭、渡船場、材木屋、米穀店が櫛比して居る。裏馬路は果物、海産物、藥物を扱ふ商業中心地である。其の他の街路はその地の名家の名を採つた毛家衖、朱家衖とか、碼頭名の新碼頭街、鹽碼頭街等があり、城内と同じく城門から由來した東門路、跨龍路（南門の異稱）がある。大碼頭路は東西を走る幹線で城内の肇嘉路を經て西方の和平路に出て佛租界と聯絡して居る。

此のあたりで特色的な路は鹹爪街である。外と裏との兩街に分れて居るが、昔華かなりし頃は柳暗花明の地で書館、妓院、青樓が相並んで居つた。十六鋪小東門外は中外分界處で、此處で車に乘換へねばならなかつたから「小東門外東洋車聚渾無數」であつた。因に東洋車の起源を考へると、江戸の八百屋鈴木德次郎の創意になるもので、明治二年（一八七〇年）福岡藩士等が協力して製造したものである。人力車なる言葉の英語に於ける最初

門内に往くとよい。火腿街は昔ハム店が多く、魚行路は魚店が多かつた町であらう。然し城内の商業中心地は小東門の附近で、銀細工物、絹織物、毛皮、樂器店等が櫛比して居り、近年國貨市場や映畫館が建てられた。

其の他　縣署の西南にある紫霞閣は舊名を欒珠閣、又の名を小蓬萊と云つたので、今は蓬萊路となつて殘つてゐる。福田路は福田庵の跡である。其の他方浜に虹形の美しい橋のあつた虹橋街、昔の宿場の跡である館驛街、費氏が畜馬したと傳へられる馬姚街（古くは馬園街と呼んだ）等があり、艾家街はヨモギを賣る店が多かつたゝめか、艾氏の家があつたゝめか今明かでない。

現　狀　民國となつて城壁の必要がなくなり、又不便且つ不體裁であるので、一九一一年之を崩して道路としその路に電車が走るに至つて面目が一新した。北半分を民國路、南半分を中華路と夫々中華民國名から命名した然し支那側は租界の繁榮を嫉視して之を奪はんため、第一次上海事變前後より此の地を捨て、江灣に中心區を作り始めたので、次第に衰微するに至り、今次の事變では南市一帶が敵の一據點であつたゝめ、我軍の兵火を受けて大なる損傷を蒙つた。事變後稍々復興したとは云へ、昔の俤はない。

廟名路　城內には古い廟や園が多くあり、路名がそれから由來するものがある。西北隅に大境路（ダチンル）があるが、之は大境廟があるからで、此の廟は一名月下老人廟とも云はれ、青年男女の參詣する者が多い。此の廟の通路に立番して居る黒面像があるが、之を外人側ではビッグバッド・ゼネラル（惡大將軍）と綽名して居る。文廟路（ヴエンミヤオル）は文廟即ち孔子廟があるからで（文武の中孔子を以て文の代表者となすので、孔子廟を文廟と呼ぶ）、その起源は六百餘年前に遡り、五回移轉して現在に及んでゐる。此處には一九二七年開園した文廟公園や動物園がある。

園名路　露香園路（ルシヤンユエル）は同名の名園から由來するので、昔は甘味な水蜜桃の產地であつた事は、「水蜜桃譜」一卷（嘉慶十八年著）によつて知る事が出來るが、今は斷種である。此の園は明の嘉靖の頃道守顧名儒が築いた萬竹山（萬竹街（ワエツオカ）となつて殘る）と云ふのを、その弟の顧名世が取擴げた私園である。園中の池を穿つに當つて篆字で露香園と題した一石を得たので園名とした。此の附近に九畝地（チユームテイ）と云ふ昔の演武場の跡があるが、九畝（一畝は六千方尺）の面積があるからであらう。豫園路（ユイーユエル）は豫園から由來する事は餘りに周知の事である。豫園は西湖の三潭印月を模したと云はれる湖心亭（ウシンデイン）を中心にして、東園（トンユエ）、西園（シーユエ）の二園に分れる。湖心亭は明代に出來たもので、其處で客に勸める茶器に柳のマークがあるので、外人間には楊記茶亭（ウヰロー・パターン・ナイー・ハウス）で通つてゐる。此のあたり城內の歡樂の中心地であつた。

商店名街　支那人は幫（ポン）（俗に幇又は帮に作る）の字の示す如く、類を以て集るの風強く、街々によつて店舖が定つてゐる。料器、珠寶、瓷皿、玩具類を欲する人は城隍廟（ゼンワンミヨオ）（城の池が元義で、轉じて城壁のある市街の守護神となつた）裏に行くとよろしく、筆は小東門內、衣類は粉衣街や大東門內、眼鏡は新北門內、古玩玉器も新北

邑人は爭つて此の樓に登つたと云ふ。

名家街　之は城内と云はず支那街一般の特色であるが、その土地の名家の名を以て街路名としてゐるのが多い城内のみで云へば黃體仁から黃家街(ワンチヤカ)、兪文榮から兪家街(ユカカ)、梅宣使から梅家街(メイカカ)が出來た類である。之等の歷史を一々說くと冗長になるので、城内北部にある潘家街(パンチヤカ)を說いてその一例とする。上海人潘恩(一四九六—一五八三年)は字を子仁と云ひ、二十八歲で進士となり、それより各地の官吏を歷任して功があり、六十八歲で引退して上海に歸り、風月を友として暮した。文章をよくして數種の著作あり、家族が多くてその邸は周圍一里あつたと云ふ此の人の邸宅から潘家街が命名された。之等の記事は縣志に明かな處である。

美稱路　美麗な名前や目出度い名前を附けたがるのは支那人のみでなく、人情の然らしむる處であるが、支那人には特に此の點が顯著である。前記の夢花樓街、丹鳳路(紅い瑞兆の鳥)以外に銀和路(インウオル)、安仁路(エゼンル)、青蓮里街(チンリーカ)、紫金路(ツチンル)(最上質の金)、彩衣街(ツアイイカ)、吉慶路(チチンル)、凝和路(ニンウオル)等がある。凝和路には有名な也是園(エーズユ)(又の名を南園と云ふ)があり、もと渡鶴樓のあつた地で、李心怡の別業である。此の園名を文字通りに解すれば「之も亦園である」の意で謙遜的命名と思へる。一說に英語のヤード(園)を漢字に當嵌めたものと云はれる。亦園(イエユ)や南匯にある豈是園(チズーユエン)と共に面白い園名である。此の也是園の總稱を蕊珠園(ゼーツーユ)(仙境の意)と云ふ。

之等の道路は名こそ雅麗であるが、實は石條(石こう路)、淤浜(どろ路)、磚街(煉瓦屑の路)、城根泥路で臭氣紛々たるものがあつたが、前世紀末から今世紀初頭にかけて總て石疊の路に改築された。然し之とて甚だ清潔とは云へない。

之等の漢字には少し宛意味の相違がある。

瀝　微流、シタヽリ流ル

涇　濁リタル小流

浦　大水ニ小ロアリテ別ニ通ズルヲ云フ

塘　土石ヲ築イテ水ヲタメタルモノ、故ニ堤ノ義モアル

溝　井田十歩間ノミゾ筋デ、渠ヨリ小

渠　溝ヨリ大ナルモノ

浜　舟ヲ納ル、モノ、濱ト區別ハ明カデナイ

港　水ノ分流、小水ノ旁出セル所ノ船ヲ入レルモノ、浜ト大差ナイ

川　水ノ地ヲ穿チテ流ル、モノ、流水ノ通稱

河　大流

樓名街　城內の西南隅、文廟の近くに夢花樓街(モンホールーカ)と云ふ幻想的な街があるが、之は久しい歷史を物語つてゐる。明の嘉靖三十二年に倭寇の見張をするために城內に高い樓が建てられ、之に截蜃樓(ツエゼンルウ)(蜃氣樓を切るが如き高き樓)なる名が與へられた。然し見晴の良い高い哨兵所を總て望海樓と云つたので、此の截蜃樓も一名望海樓の名があつた。處が望海と夢花とは土音で略一致して居るので、俗に夢花樓と書かれ、昔の哨兵所の名が路名となつて殘つて居る譯である。丹鳳(チウンル)路も昔丹鳳樓があつた所で、端午節句には黃浦に龍舟が競渡するのを見るため、

つたが、之等の門には夫々異稱があつて、此の異稱から城内外の街路が命名されてゐるのが少くない。今城内のみを見れば、寶帶路《ポオタール》は小東門から、晏海路《エンヘル》(靜かなる海)は老北門から、尙文路《ツンヴエンル》(文を貴ぶ)は小西門から、拱辰路《クンチエンル》(西方の人が歸化する)は小北門から、福佑路《ソヨウル》(福が助ける)は新東門から、障川路《シャンチエンル》(水を防ぐ)は新北門の別名から夫々命名された。最後の障川の意味を考へても、如何に支那人が水害に惱み怖れ、治水に專念したかゞ分る。

クリーク 築城後の城内の街路はどのやうであつたか知る由もないが、十九世紀になつてからは略この模樣が分る。北と南とに方浜《ファンパン》と肇嘉浜《ゾーカーパン》と云ふ大きなクリークが流れ、其の他多くのクリークが錯流してゐた。然し之等のクリークは民國になつて城壁が毀されるに至つて埋立てられ、前記の兩クリークは方浜路《ファンパンル》、肇嘉路《ゾーカール》となつて殘つて居る。肇嘉路には規模宏大な關老爺(關羽の俗稱)を祠つてある關帝廟《クエテイミヨオ》がある。因にクリークとは中世英語のクリケから發達した言葉で、「曲る」が元義である。事實クリークには曲つたのが多い。現在歐米では入江、小灣の意であるが、米・英殖民地や、中・南支では人工的運河と區別して、自然に出來た小河を意味する。然し之は嚴密な區別ではない。そして此の意味ではよくクリクと短く發音される。漢字では之を樣々に表現するので、楊樹浦、走馬塘、洋涇浜(涇もクリークを意味するから二重用法)潘涇、楊家溝、小來港、横瀝、新河、練渠、練川等である。故に二重に走馬塘クリークなど云ふ必要はない。洋涇浜クリークは最も極端な例で三重用法である。之等のクリークが埋立てられて路名となつて殘つて居り、橋もないのに橋名があるのが上海中に多くあつて、新來の人は奇異の感を懷く事がある。

大臣の位となり、一六〇八年には伊太利耶蘇會士で一六〇一年北京に入り初めて支那に布教したマテオ・リッチ竇の弟子となつて深く天主教に歸依し、師の口述により天文、地理、水利、暦數を筆錄して後世に遺し、南門外に天主堂を建立し、當時の文化の中心をなした。

近代の發達　清代（一六六二―一九一一年）に入つてからは上海は益々榮え、一八一二年の人口調査では五二八、〇〇〇を數へた。一八五三年から翌年にかけて小刀會の賊軍が城内を占據して大破した。城門は最初六門であつたが、其の後四門が增設せられて總計十を數ふるに至つた。上海縣署は增修改建三十數度に及んだが、一九一五年には縣署を昔の楊家橋、今の蓬萊路に移轉した。革命後民國となつてから西洋化した租界の近接地に老朽敗殘の城壁のあるのは見苦しく、又交通の障碍ともなるので、之を取崩すと共に外濠及びクリークの類は皆埋められた。春申君の時代より悠々二千二百有餘年、置縣以來五百八十年の榮枯盛衰を見たる上海は、之より近代的息吹の洗禮を受けて、最近の活動期に入るのである。

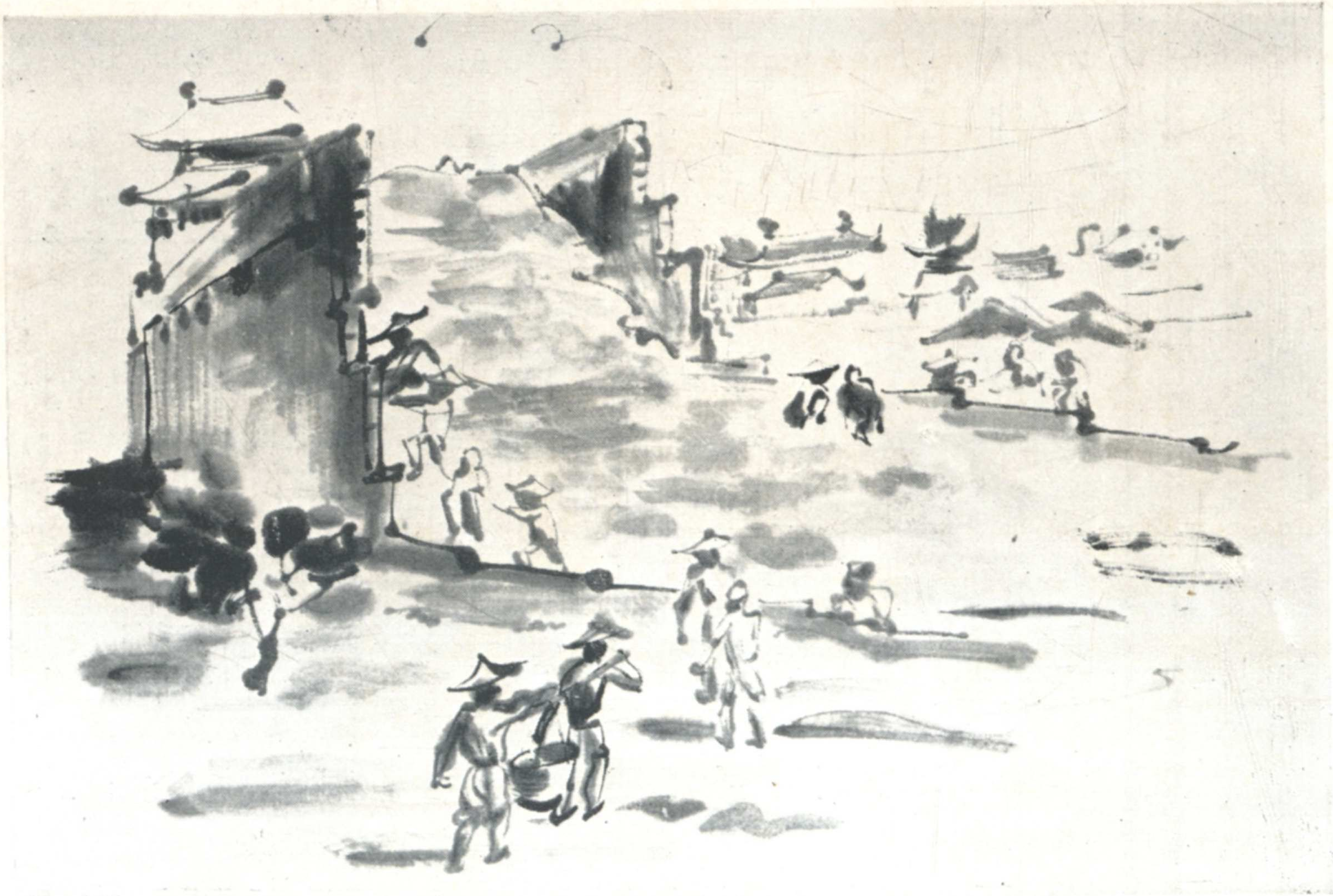
（註）倭寇との間に海戰が行はれたと云ふ高昌渡に就て、第一に考へられるのは南市の半淞園の側であるが、之は少し上流に過ぎるので、もつと下流の昔高昌鄉のあつた附近と推定して見たが、同治縣志には高昌渡は陸家浜（やはり半淞園附近）にあるとしてゐる。

街　路

城門名路　城内の十門は東門（トンモン）、小東門（ショートンモン）、新北門（シンポモン）、西門（シーモン）、小西門（ショーシーモン）、南門、小南門（ショーネモン）、北門（ポモン）、小北門（ショーポモン）、新北門（シンポモン）であ

楊璠（字元誠）、呉濳（字毅夫）等があり、湧泉亭や龍華の古塔に就て之等文人騒客が多く詠み、又呉松江の南に葵萬本を植ゑて葵軒と稱し、詞人名士で此の地を過ぐる者は必ず寄つて之を賞した。邑人の風氣も淳朴であつたが（弘治上海志）、外國人との接觸により、又流氓の蝟集により次第に人情の惡化を見るに至つた。

築城　一三六八年には倭寇は崇明島を占領し、一五五三年には倭寇が海上を横行し、同年四月十九日支那側が敗退してからは知縣兪顯科は遁走し、全市が蹂躪せられた。五月初旬には又々高昌渡の海戰で支那側が大敗し、市民は逃散し、同月十二日には「倭寇率三百餘艘、從周浦及海口兩路大擧入寇」してゐる。兎に角嘉靖年間は倭寇が猖獗を極めたゝめ一時上海は衰微した形跡がある。此の倭寇を防ぐため種々の方法が講ぜられたが、中にも有名なのは晉の虞潭が築き袁山松が修築した滬瀆壘である。東西二壘あつて、一つは今の永安公司附近、他は曹家渡にあつたが、今は勿論跡形もない。此の二壘の附近に夫々蘆浦（蘆の繁茂したクリーク）なる河があつたので俗に蘆子城とも云ひ、築造主の名を採つて袁山松城、袁城とも呼ばれ、他に滬瀆城の名もあり、扈瀆壘と書かれる事もある。然し此の壘は大した効果もなかつたらしく、嘉靖三十二年には倭寇の難に堪へず、縣人顧從禮の請願によつて城壁を廻らす事になつた。時に戸數一萬五千。此の城壁は周圍約一里半、高さ二丈四尺、六箇所に城門を設けた。其の後城壁は幾度も修築擴張された。滬城外に眼を轉ずれば一五六四年には里人張道用がその頽廢を見るに忍びず、滬西に漕河（ゾオウーミヨオ）廟を重修し、一五七二年には龍華に百歩橋が架設せられ、百歩の長さのある大橋で海邑諸橋の冠であつた。除光啓は上海の生んだ人物中の傑物であつた。一五六二年の生れであるが、長じて



上海築城圖

一八六〇年のバンド

もあり、古くは八團鎮（パドエツエン）と云ひ、團は賊を防ぐための村落の集合である。柘林は倭寇の一根據地で、林を拓いて巣窟となしたのによる。法華郷志に古蹟として傳へるものに禦倭牆（ユーウーヂヤン）があり、明代倭寇を防ぐため郷人王氏が作つた垣である。

通州の倭子墳

文化　明（一三六八―一六六一年）にも松江府上海縣に屬した。上海は古來商港で、文化の見るべき物はさしてなかつたが、明の中葉に至つて、顧謙（字自修）、儲泳（字文卿）、任仁發(字子明)、王逢（字原吉）、陸倜（字養正）、顧彧（字孔文）、彭汝器（字宗璉）等の文人が輩出した。又陶振（字子昌）は釣鼇集を以て、朱梗は壽梅集を以て、錢鼒（字子良）は砥齋集を以て夫々名があつた。流寓詩文には江陰人孫作（字大雅）、建安人章賫（字質夫）、錢塘人

と増し、戸數七二、〇〇〇戸に達して居る。元寇は颶風のため壞滅したが、同時に上海の地にも大颶風が襲來して非常な風害があつた。此の外水害、旱害、疫害が續いたが、最も大なる影響を與へたのは所謂倭寇(ウオコウ)である。上代以來日本への支那人移住は多く、日本からも出向いて居るが、元寇後は南朝の遺臣とか、九州方面の野心家とか、其の他日本に志を得ない者とかゞ、單獨に又は元寇で捕虜となつた支那人を手引にして支那沿岸を掠めた。全部が海賊と云ふ譯ではなく、正當に取引しようと云ふ商人も多くあり、中には元寇の仇討をしようと云ふ考へを持つた者もあつたであらう。又中には支那人で倭寇の名を欺つて惡事を働いた者もあつた。處が支那政府が頑迷で通商を峻拒したゝめ、背に腹は代へられず中には亂暴を働く者も出て來た。後年英佛が武力で以て開港を迫つたのと大同小異であるから、之を一概に倭寇と片附けるのは面白くない。

浦東高橋區の永福禪寺西南に倭子墳(墩)(ウーツウエントン)があり、倭寇を亡し埋めたものと云ふ。之に對し縣志には「嘉靖間倭寇剽掠村人殺而焚之埋骨於之」とある。但し墨餘錄及び快心醒睡錄には次の如き異說がある「浦東舊有倭子墳、云係倭寇積骸處、而不知其非也、蓋嘉靖間、有馬勝者、口操北音、而未詳其籍、身短微髭業、操舟廬、結浦江、東人咸呼爲馬倭子、素習水性、洪濤巨浪中、能伏經時、每遇大風海盜必棹小舟巡視、浦濱救援覆溺、而不索酬、人咸德之、死後里人即其居處、掘地營葬、呼爲矮子墳、今之以矮爲倭者、乃世俗流傳之誤也」とあるが、今何れとも決する事が出來ぬ。又通州の南門より狼山に至る小運河の傍に高さ二丈計りの土饅頭があつて、名けて倭子墳(ウーツウエン)と云ひ、倭寇が平定に歸したのを紀念したゝめと云ふ。倭寇の地名に與へた影響も大なるものがあり、川沙縣には海岸に沿ふて禦寇河(ユイコーウ)なるクリークがある。川沙そのものゝ名も「其窪而積水深、爲賊舟易泊者、曰川沙」で川沙窪の名

マテオ、マルコの三外人が來たのも一二六四―一二六五年間の事であり、上海鎭の商港としての位置は漸く定るに至つた。兵火に罹つて燒失した龍華塔の址には唐の嗣聖四年創めて殿が建てられたが軈て頽廢し、嘉靖及び萬曆上海縣志に依れば、「宋の太平興國二年吳越王忠懿が一夜黃浦上に宿泊した時、風雨驟然と至つて、雜草の間から神光が天を照すのが見え、梵鐘が低く鳴つた。怪んでその地を問ふと古龍華寺の址なる答を得たので、命じて重建さす」とある。但し弘治上海志には龍華寺に就ては聊かの言及もない事は注意に値する。

倭寇　元（一二七年―一三六七年）には松江府に從屬し、至元二九年上海縣が置かれた。又至元間里人羅昇が市場を創設した。その場所を羅店鎭と云ふ。此の時代には縣署は今の城內の地より遙か南方にあつたので米穀其の他を蘇州地方より回漕するのに、蘇州河口迄出て更に黃浦を遡航する事は非常な迂路であつたので、梵王渡（ハンワント）上流附近からクリークによつて上海に運ばれた。今も徐家匯の南に漕河涇（ゾオウーチン）が殘るのは此の史實を物語るものである。月浦（ユエープツエン）鎭には月浦橋なる橋があり、元の虞集が嘗て此の浦に船を浮べて月を賞したのによると云ふ。又太倉（ダーツアン）は海外交通の要地であつたので、元の至元一九年宣慰朱、清張瑄等が建議して海運倉庫を作つたのに依る。上海の發展を促した一大原因は、此の頃その濱海特に下沙地方(今の南匯方面)は松江府下の最大鹽場であつた事で、之を運送する船が輻輳した。今でも鹽鐵塘、運鹽河、鹽船港が殘るのは此のためである（第十章參照）。

又上海の周邊には古くより木棉が栽培されたが、元代に崖州より黃氏なる一老嫗來つて紡績の業を敎へ、之より紡織業が興つて鄕民で之に依つて生計の資を得る者が益した事も、上海發展の一原因である(第十章參照)。

元寇は杭州灣から出發したので、その近接の町である上海にも戰爭準備のため大影響を與へ、その繁榮を一段

が江南河川の變遷には慌しいものがあり、かの清澄を誇つた劉河も泥土の堆積で大船の航行不可能となり、當時漸く群り來る者の多くあつた滬瀆の地が劉河口に取つて代る事となり、青龍鎭も一村落に顚落するに至つた。

松　江　滬瀆即ち松江、後の呉松江（ウースンコン）（又は呉淞江）には色々の異稱がある。先づ松江なる名稱は後漢書左慈傳に「所少呉松江鱸魚」と出てゐるのが最も古く、弘治上海志に「松江一名呉淞因水患水去從松」とあるから、古くは呉淞と書かれたらしい。呉松江の初出は陳書侯瑱傳「與景戰於呉松江」である。又松江の別名を笠澤（リツエ）と云つて、史記正義や春秋傳註中に見えるが語源不明である。呉地記說に「松江一名松陵、又名笠澤」とあつて松陵江との異稱もある。松江には以上の外呉江、呉淑江、南江等の稱があり、南江の名稱に就ては古來種々の疑義があるが、漢書地理志によれば「會稽呉縣、南江在南、東入海」とある。又松江に關する記事に逃て見逃してならぬのは、史記正義の「松江は東して夏駕浦に至り、更に東して青龍江となり、南蹌浦口より海に入る」である。夏駕浦（又は夏駕河）は崑山縣東南十七支里にあり、青龍江は青龍鎭の側を流れる松江の一部で、南蹌浦口とは松江と黄浦との合流點で、弘治上海志所載の地圖（巻頭圖參照）に蹌口とあるのに相當する。同地圖には浦東に南蹌巡檢司があるから、同地方を南蹌と云つたのであらう。尚呉松江に就ては第六章の支那地名路參照。

上海鎭　五代には蘇州華亭縣に屬し、宋（九六〇―一二七八年）には嘉興府（カシンフ）華亭縣に從した。嘉定十年崑山縣の一部を割いて一縣としたので嘉定縣と呼ぶに至つた。一一三一―一一六二年間には市舶提擧司（シーペテイチユズ）、權貨場（チユアンフホザン）を置いて上海鎭と稱した。市舶提擧司とは外國船・貿易に關する事務を司るもので、海關監督に似たものであり、權貨場とは徵稅所である。壽永二年（一一八三年）日本人七三名飄ふて華亭縣に至ると云ふ記錄があり、ニコロ

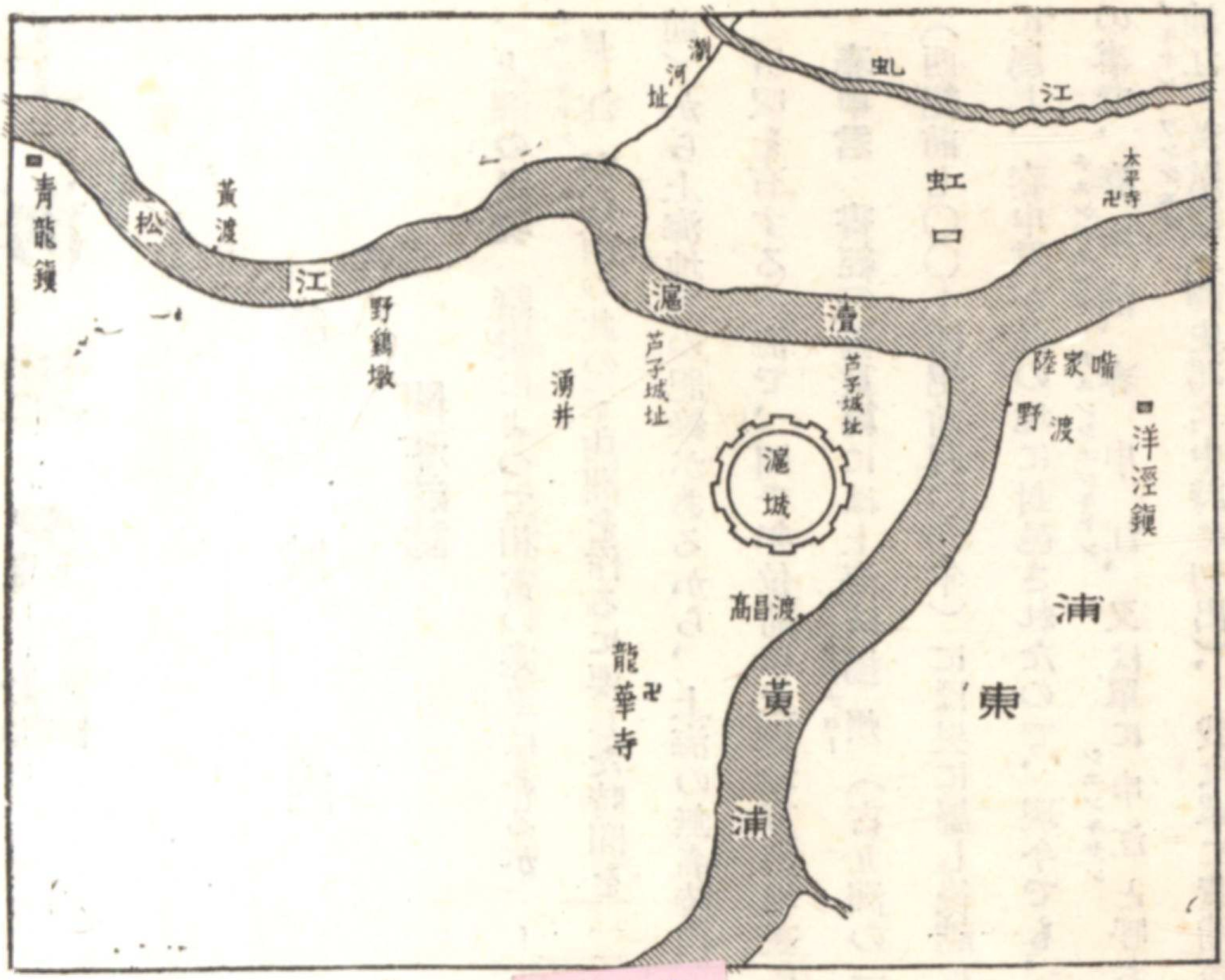
た。此の名は壽夢が華亭なる亭を造つた事に由來すると云ふ。天寶五年（七四六年）蘇州河上流二〇浬の地點に青龍鎭（チンルンチエン）なる港市が置かれた。青龍とは字の通り青色の龍で、古來瑞兆とされ、此の地で青龍戰艦を建造したのに依ると云ふ。當時の此の附近の地理を考へると、現在とは大分趣を異にし、蘇州河（スーユッツーウ）（古くは松江（スンコン）と稱した）は幅七哩以上もある大河で、黃浦との合流點附近で海に注いだ。此の河口附近は滬瀆（フーナー）（晉書虞潭傳に初出）と呼ばれた。滬は上海の別名であるが、滬が水邊で魚を捕へる竹器を意味するから、上海が昔一漁村であつた事は容易に首肯出來る。城內を滬城と云ひ、又上海を滬上、滬市、滬江と云ふのも皆此のためである。扨瀆とは「溝」とか「濁る」の意であるから、滬瀆とは「上海の側を濁流して海に入る河」の意になる。然し錢大昕養新錄には「謂滬瀆即黃渡之轉」と考へて居る。かく音の轉化によつて解決せられる地名も多くて、此の考へ方は興味もあり極めて誘惑的であるが、之のみに拘泥すると牽强附會に陷る。音轉の一例を擧げれば、滬西碑坊路を北進して蘇州河畔に出た所に野鷄墩（ヤーチートン）なる墳があるが、之は楚王項羽の妾の虞美人を葬つたものと傳へて居るので虞姬墩（ユーチートン）のやゝ輕蔑的半ば諧謔的の音轉化と考へられる。但し漁姬墩の名もあるので、虞美人を葬つたものであるか否か不明である。

扨外洋船がアラビヤ商人の出入した當時の殷盛な青龍鎭に行くには、當時の一漁村であつた上海は無視せられて、瀏河（リユーホー）より吳淞江に出て青龍鎭に達して居つた。古記錄によると青龍鎭は「瀕海巨鎭」とあるので、如何に雜鬧してゐたかゞ分る。又弘治上海志に「東海在縣東海中島夷唯倭國最近宋元間入貢皆由青龍市舶司司後澌徒於四明」ともある。文中四明とは寧波を指す。瀏河とは「水清き河」の意で、河口の瀏河口も殷賑な港であつた。處

相たること二十餘年、門下の食客三千人あり。趙人李園の女を娶り、其の娠むや之を考烈王に納る。遂に男子を生む。立て太子となし、李園の妹を后とす。王死し太子立て幽王となる。李園また貴くして事を用ふ。乃ち春申君を忌み、甲士を朝内に伏せて之を刺殺せり（東洋歷史辭典）。

二古寺　秦時（西紀前二五〇―西紀前二〇〇年）初めて縣を置いて會稽郡鄮縣と稱した。會稽郡とは同郡内に有名なる會稽山（紹興縣の東南十三支里）があるのに由來する。漢時（西紀前二〇〇―西紀二四年）には會稽郡婁縣に屬した。婁縣は太湖より流出する婁江があるからの稱呼で、婁は塿に通じて小阜の意である。後漢（二五―二二〇年）には呉郡婁縣であつた。呉郡は今の蘇州の地である。三國呉（二二二―二八〇年）にも呉郡婁縣で、此の赤烏十年（二四七年）呉王孫權が一日黄浦の畔で怪しい光輝に出會ひ、それが昇天するのを見た。之を龍の光となし、それを紀念するため十三座塔を建立し、その一座を龍華塔となした。かく龍華とは龍の光を見たとの傳說もあるが、字義は菩薩の一人である彌勒がその下で法を說いたと云はれる樹で、その花の形が龍に似て居ると云ふ之も傳說的な花である。此の龍華塔は後兵火により燒失し暫らくは此の地は草原の儘であつた。此の龍華塔と時を同じくして蘇州河北岸に重元寺即ち今の靜安寺が建てられ、此の二寺のため上海の地は人口に膾炙されるに至つた。

滬濱　晉（二六五―四一九年）には呉郡婁縣に屬し、西紀前二一七年頃より渡來した佛教は此の頃確立するに至つた。宋にも齊にも等しく呉郡婁縣で、梁（五〇二―五五六年）には呉郡信義縣となり後崑山縣となつた。陳、隋共に同じで、唐（六一八―九〇七年）には蘇州（武德四年呉郡を改めて蘇州となす）華亭縣となし



ら急に宣傳されてゐるので、その傳說の基礎に不安があるので、果して黃浦が黃歇に由來するかどうか頗る疑はしい。潮色黃なる故にと云ふ常識的解釋の方が當つて居るかも知れない。但し上海附近には春申君に關係ある遺址と稱せられるものが數箇所にあつて、虹橋鎭附近の橫(ワン)瀝塘(リタン)に春申橋が架り、その附近に春申塘なるクリークがあつた。野鷄墩の上流北亭鄉には黃歇渡(ワンシエト)(或は單に黃渡(ワント))なる地名が殘つて居り、春申君が渡つた所と相傳へて居る。嘉定縣には黃歇鎭(ワンシエッエン)があつて、周烈王十五年に春申君が治水したのに依ると云ふ。莘莊鎭の南方長人鄉には春申君廟(或は春申道院)があつて、明君の像を安置して功績を稱へ、又北門外に三茅閣があつて春申君を專祠したものと云ふ。此の閣は今はないが三茅閣橋と云ふ十字路の名となつて今でも殘つて居る。但し春申廟にしろ三茅閣にしろ、春申君を祠つたと云ふのは何れも傳說的事項である。因に春申君は戰國時代四君の一で、黔中(湖南沅陵縣西)の人である。楚の相となり春申君と號す。

110－3

上海地名誌

沖田一著

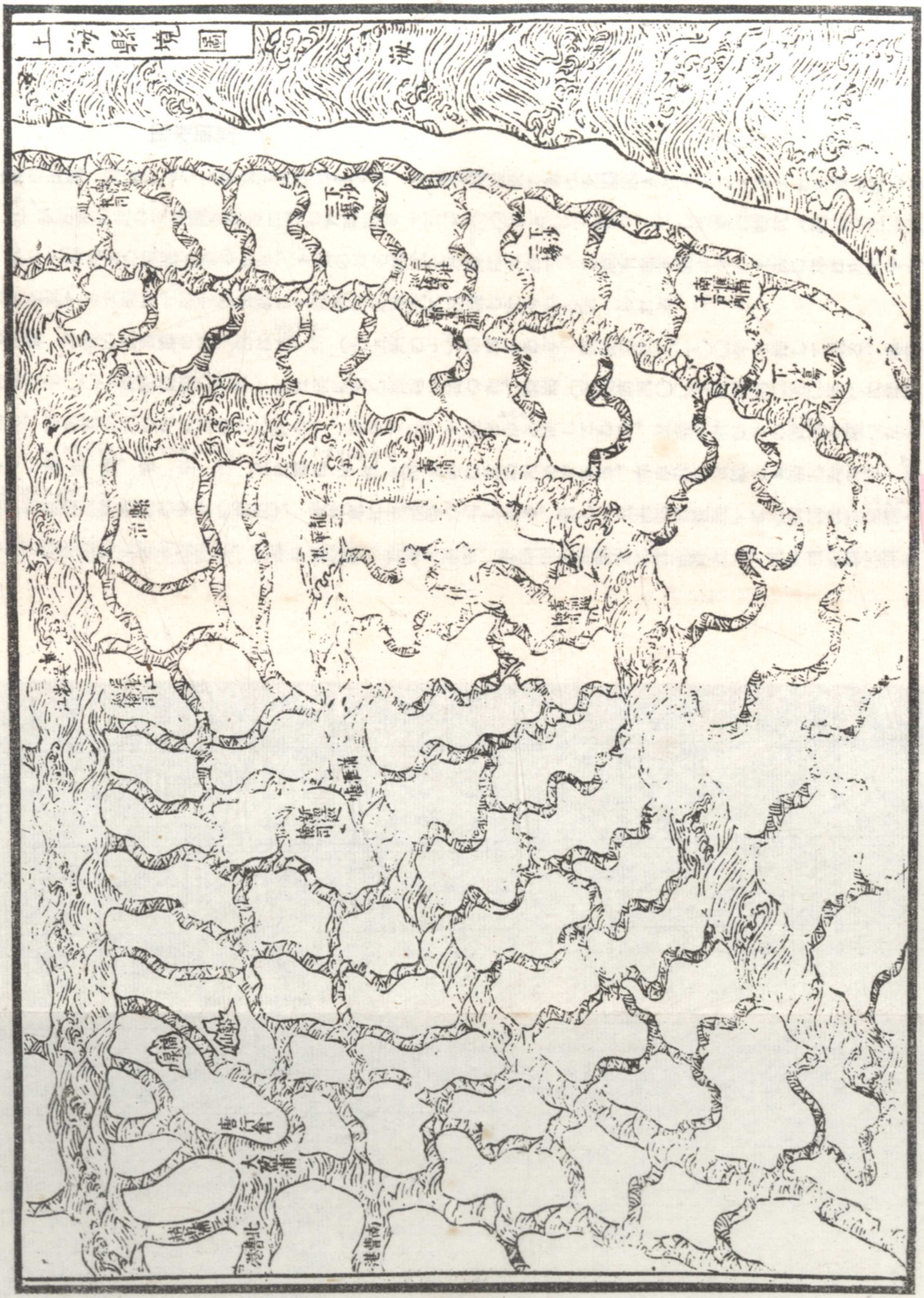
第一章　城内

開港前誌

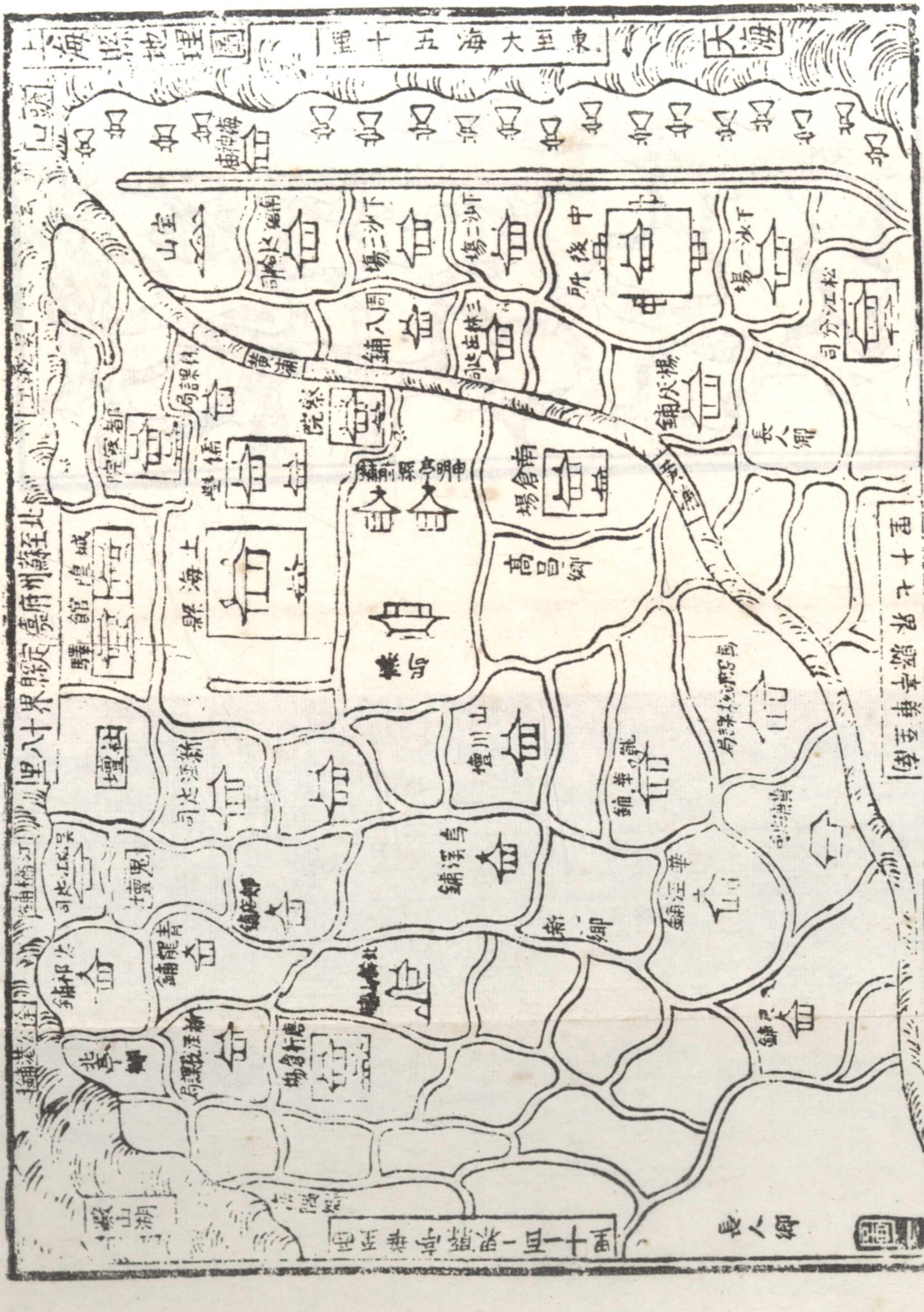
上海の出現　諸家によつて相當の差違はあるが、上海港灣局長であつた獨逸人ハイデンスタムの計算に依ると長江（チャンキャン）が江南の此の三角洲を作るに要した時間を一三、五〇〇年としてゐる。そして夏の時代（約三千百年以前）から上海地方の記錄があるから、上海の無名時代を計算に入れて、二萬有餘年前は今の上海の地は水深平均三百呎を有する大海で、四千年位前に上海地方が地表に出現したものと考へられる。

春申君　書經の禹貢篇には上海は揚州（ヤンチヨー）（古九洲の一）の域とあり、西紀前約二二〇〇年を指して居る。春秋（西紀前七〇〇―西紀前四〇〇年）には吳に屬し後越に從つた。戰國（西紀前四〇〇―西紀前二五〇年）には楚に屬し、春申君が此の地に封邑されたので、現今でも、上海を申（シエン）と稱してゐる。又春申君が今の黃浦（ワンプ）を鑿つたとの事で、春申浦（チュンシエンプ）、春申江（チュンシエンキャン）、又は單に申江（シエンキャン）と呼ぶのは此のためである。春申君を黃歇とも稱したので、黃浦江（ワンプキャン）、黃歇浦（ワンシエプ）（御史馮名中詩に初出）、或は單に黃浦等の名もある。但し「上海縣竹枝詞」には黃浦は黃龍浦（ワンルンプ）とも稱し、黃色潮なる故と說明し、又春申君開鑿の故事も弘治、嘉靖兩上海縣志には記載なく、其の後の縣志類か

上海縣境圖　「嘉靖上海縣志」所載



上海縣地圖　「弘治上海志」所載



110-1

支那名路……五一

第七章　楊樹浦……六五
起源と沿革
道路（路名の改革―外人名路―其の他）……六五

第八章　閘北……七一
起源と沿革
路名……七一

第九章　新市街……七四
事變前―事變直後―現在……七四

第十章　上海の周邊……七六
寶山地方―嘉定方面―虹橋南部―浦東地方―川沙地方……七六

附錄
補遺と訂正……一
參考文獻……七
虞姬墩……一七
徐家滙……二五
外國語索引

滬城八景……一九
第三章　舊英租界……二〇
濫　觴
道　路（舊道路―路名變更の原因―東西の道路―南北の道路―路名の俗稱―西藏路―泥地戰―外人名路―其の他の支那地名路―外國名路―商店街）……二〇
雜　錄（嘴と叉袋角―外灘公園と外白渡橋）……三〇
第四章　佛蘭西租界……三二
租界と公董局
街　路（擴張―十六舖―佛租界路名の特徴―公使及び大使―上海駐在領事―市參事會員―公董局職員―佛國居留民―宣敎師―佛國名士―將軍―佛國關係物及び人物―支那人名―支那地名―其の他）……三二
第五章　滬　西……四三
區　域―上海の語源―上海の世評―滬西の發達―越界道路―滬西越界道路―滬西支那路……四三
第六章　虹　口……五一
虹口の語源―虹口の黎明―初期の邦人―邦人の漸增―虹口の發達と現在―外國人名道路―支那地名路―揚子江の語源―土地の特色を示した路名―土地・家屋の所有主名―花名路―

上海地名誌目次

漢字索引
自序……一
凡例……四
上海縣地理圖（弘治上海志所載）
上海縣境圖（嘉靖上海縣志所載）
第一章　城內……一
開港前誌（上海の出現―春申君―二古寺―滬瀆―松江―上海鎭―倭寇―文化―築城―近代の發達）……一
街路（城門名路―クリーク―樓名街―名家街―美稱路―廟名路―園名路―商店名街―其の他―現狀）……一〇
第二章　南市……一六
領域
街路（東部方面―中部方面―西部橋名路―龍華）……一六

凡例

(一)上海と云つても廣大で、特に今事變後は寶山、嘉定、上海、奉賢、南匯、川沙の各縣の外崇明島まで含み、文字通りの大上海となつたので、之の含む全部の地名を本書の如き小著で扱ふ事は、興味のない技であると共に殆ど不可能であるので、本書では共同租界、佛租界及びそれを圍む支那街に中心を置いた。之とて決して小範圍でないので、勢ひ代表的なものを擧げて概括的に述べた。

(二)檢出上の便を考へて漢字名の索引を卷頭に置き、外國名索引を卷末に加へた。前者は字劃順に排列した。

(三)一々本文中に參考文獻を擧げる煩雜さを省くため、卷末に私の使用した文献表を添付した。但し必要ある場合には一々引用書を附記して置いた。

(四)固有名詞の發音は、支那固有のものは右側に振假名を附けて上海音を表はし、外國語より由來するものは、右側に外國音を示し、左側に上海音を示した。

益する所があれば私の努力は報いられたのであります。見聞狭く、未だその起源を分明にする事が出來ぬものも多くあり、感興の赴く儘に鎖事に亘り過ぎてゐる點もあり、又思はぬ過誤を犯してゐるやも知れない。大方識者の御叱正を得ば幸甚であります。

終に種々の暗示を與へられ、又同氏所藏の貴重な書籍を自由に見る機會を與へられた蘆澤駿之助氏並に表紙及び扉の題辭を賜りたる滄浪外史王廷珏先生に深く感謝します。

昭和十六年三月

沖田一誌

れると返答に窮するのです。又「向ける」とは何故現在のやうな意味があるか、と云ふやうな事の詮索になると誰も明答出來ず、それ以上は通俗語源說（フォーク・エチモロヂー）に墮して了ふものである。

上海でよく使はれるチツプを意味すをカミソンなる言葉は、英語のコミシヨンが轉化（コラプト）したものと思ふが（或學者は北京語から由來すると主張する）、此のコミシヨンは羅典語コミツシヨ「委任狀」から出來たものであるが、それではコミツシヨとは何から由來するかと追跡せられると明答出來ないのであります。天麩羅は西班牙語・伊太利語のテンポーラから由來する言葉で、もと天主教で「金曜日の祭の名」であつたが、此の日は主の日に當るので潔齋して獸肉、鳥肉を食はず、但し魚肉、鷄卵は食したので、因つて此の日の魚の油料理の名に轉用されるに至つた。そのテンポーラのもとは何かと云へば羅典語のテンプス「切取る」で、之が「任意に切取つた一定時」の意になり、更に「任意に切取つた一地域」となつては、英語のテンプル「寺院」と變化した。吾々には羅典語を媒介としなくとも天麩羅と寺院とは精進と云ふ意味で通俗的に聯絡してゐるのであります。天麩羅の第一次的乃至第二次的語源はこのやうにして分るが、第三次以上の語源となると困却するのです。

語源學が此のやうな狀態であるのに、普通名詞より尙困難とされる固有名詞、特に支那の地名の語源を採らんとする事は無謀も甚しい。その多くは東洋神秘主義の帳（とばり）の中に深く鎖されて、之に科學的メスを加へる事は絕望視されてゐる。私の努力は、此の厚い帳に薄いメスの痕を一寸付けた程度であつて、第一次的起源が闡明されて居れば、それで滿足して戴き度い。之以上の研究は諸學科の根本的綜合的知識を必要とします。

吾々上海に居住する者として、上海に對する關心と云ふより、寧ろ認識を持つべきの秋、私の小著が幾分でも

自序

八年前來滬當時より、上海に讀みにくい地名・街路名が多くあり、之を讀み併せてその起源や由來を探る事は單に私に興味ある以外に、大方に寄與する處も大であらう、とは考へて居つたのであります。然し來滬早々の事とて事情にも疎く、參考書も無い儘に荏苒日を過してゐたのであります。

今上海戰當時、京都の某博士から閘北の語源を聞かれ、即答が出來なくて大に恥ぢ、益々研究を刺戟されたのでありますが、やはり參考書はない。唯地名や路名を集めて分類したものは數種あるが、之では私を滿足させない。東亞攻究會文庫や工部局圖書館で資料を得、自分でも少し宛資料を集めてゐる中に、次第に或部分が分明になつて來たが、未だ糢糊の中にあるものが多い。

私の此の小著は、地名・路名の意義・起源・由來を探る事によつて、上海史への一據點を與へる事に努力が集中されてゐる。從つて此の小著は地名から見た上海史とも云ふ事が出來ます。處が地名の語源的研究は無害なる勞作（ハームレスドラッヂ）で、得る處あれば寄與する處大ですが、實は勞して甚だ實の少いものである。

語源學そのものが洋の東西を問はず未だ不備で、或程度以上遡航する事が出來ない狀態である。普通名詞で簡單な例を擧げれば、餞別の意の「はなむけ」でも、元義は「別れ行く人が、乘つてゐる馬の鼻を、見送る人が別れ行く人の行くべき方向に向ける事」にあるが、それでは人間や動物の顏のあの一部分が何故「はな」と呼ばれるか、それは鼻は顏の端にあるので端（ハナ）が元義だとの見當は付いても、それではその「ハナ」とは何かと追究せら

龍華 一八
龍華路 一八
龍華嘴 三〇
緯道路 二三
濟寧路 六六
環龍路 三八

十八畫

璧利南路 四七
臨青路 六六
薩坡賽路 三六
禮查路 六三
謹記路 一八
瞿眞人路 一八
蟠龍塘 七八

十九畫

寶山 七六
寶山路 七一
寶安路 七一
羅別根路 四七
韜朋路 六九
羅店鎮 六
瀏河 四
寶昌路 七一
關帝廟 一一
寶通路 七一
寶帶路 一一
寶善街 二五
寶源路 七一
藍維靄路 三七
檳榔路 四八
寶德路 七一
寶興路 七一

二十畫

蘆子渡 二九
蘆子城 九
鹹瓜街 一六
蘇州 三
蘇州河 六一
蘇州河灘 二三
露香園路 一四
蘆浦 九
騰越路 六七
鹹塘 七九
寶樂安路 五八

二十一畫

鐵士蘭路 三七
鐵馬路 六三
鹽船港 六
蘭笱山 七七
蘭路 六八
鹽碼頭路 一六
鹽鐵塘 七九

二十四畫

靈桂路 四一

新橋路 一七
跨龍塘 七八
葛羅路 三四
運鹽河 七九
愛儷園 二八

十四畫

嵩山路 三四
漢口路 二三
障川路 一一
熊本通 七四
赫司格爾路 五八
蒲石路 三七
趙主教路 三八
滬西 四三
墨克登路 六九
福佑路 一一
窪泥涇 七九
瀧河潭 七九
語兒涇 七八
領事館路 二三
漕河涇 六
漕河廟 九
夢花樓街 一二
銀和路 一三
蒲柏路 三四
滿庭坊 三〇
慊悌路 三四
漎涇 四四
蒲淞 七七
製造局路 一七
漁姬墩 四
榮華里 六四
辣斐德路 三九
廟路 二四
維新路 七五
齊齊哈爾路 六九
維爾蒙路 三六
肇嘉浜 一一
赫德路 二八
漢壁禮路 五九
瑪禮孫路 五八
滬瀆 三
滬瀆城 九
滬瀆壘 九
臺灣路 三三

十五畫

廣中路 七三
黎平路 六六
廟行鎮 七六
廣州路 六六
廣西路 二五
練祁塘 七七
廣東路 三三
廣信路 六六
廣島通 七四
魯班路 一七
潘家路 一三
鄧脫路 六八
歐陽路 七三
鄱陽路 六七
蓬路 五二
蓬萊路 一五
餘慶坊 六四
嘴 三〇
潘興路 四〇

十六畫

靜安寺 三
靜安寺路 二九
興亞西路 七五
興亞東路 七五
澳門路 二九
憶定盤路 四七
凝和路 一三
禦兒 七八
禦倭牆 八
禦寇河 七
蕊珠園 一三
遼陽路 六九
積善里 六四
蕪湖路 六八
豫園路 一四
橋街 二四
興聖路 四三
鴨綠路 六〇
橫瀝 一一
橫濱路 七二
豫豐路 一八
蘊藻濱 七六
頭壩路 六三
館驛街 一五

十七畫

濟物浦路 六九
霞飛路 三九
麋鹿路 三五
薛華立路 三八

斂體尼蔭路 三五
康衢路 一八

十二畫

揚子路 二四
欽公塘 七九
極司非而路 四六
勞合路 二八
閱行路 六〇
華成路 三五
揚州 一
甯武路 六七
寬克路 二三
博物院路 二九
甯波路 四一
甯波會館 三五
華亭島 七五
華亭縣 一三
勞神父路 三八
越界道路 四五
越界築路 四五
勞勃生路 四七
翔殷路 七五
彭浦 七六
裴倫路 五九
湯恩路 五九
普恩濟世路 四〇
報恩塔 一八
開納路 四八
華格臬路 三五
華倫路 四八
黃浦 一
黃浦江 一
黃浦路 六三
黃浦灘 二四
黃家街 一三
黃家闕路 一七
甯國路 六六
黃陸路 六三
朝陽路 六九
喬敦路 四八
黃渡 二
黃道婆祠 七八
黃歇渡 二
黃歇浦 一
黃歇鎮 二
華德路 六九
棋盤街 二五
無錫路 二八
黃龍浦 一
黃興路 七五
善鐘路 四一

十三畫

滙山路 六九
靶子路 三七、五七
愛文義路 七一
飯田道 七四
閘北 七一
聖母院路 四二
福田路 一五
雷米路 三七
愷自邇路 三五
楊行鎮 七六
愛多亞路 三
愛而近路 五九
愛而考克路 六八
賈西義路 四〇
萬竹街 一四
福州路 三三
奧利和路 三六
碑坊路 四九
圓明園路 二九
愛來格路 三八
楓林路 一八
福建路 二四
虞洽卿路 二六
裏虹口 五七
開殷路 七五
裏馬路 一六
源深路 七八
新康路 二九
愛麥虞根路 四一
虞姬墩 四
愚園路 四八
愛棠路 三五
福開森路 四〇
福甯路 六六
新聞路 七一
賈業愛路 三五
福煦路 三九
靖遠街 二五
福履理路 三七
會稽郡 三
新碼頭街 一六
塘橋路 七八
楊樹浦 六五

南翔路 四一
南園 一三
盆湯街 二五
南島 一六
南匯 七九
哈爾濱路 六九
威爾司橋 三一
厚德里 六四
南潯路 六〇
紅廟弄 三〇
虹橋路 四七
虹橋街 一五
軍營路 七五
恒豐里 六四

十畫

高乃伊路 三八
馬牛門脫路 四九
倭子墳 七
倭子墳墩 七
袁山松城 九
穿心溝 七九
殷行鎭 七六
海州路 六六
彩衣街 一三
浙江路 二四
烏泥涇 七八
留青小築 六四
高昌路 一七
高昌鄉 一〇
高昌廟路 一七
高昌嘴 三〇
馬姚街 一五
高家行 七九
海高路 七九
海格路 四一
徐家滙路 四一
哥倫比亞路 四九
晏海路 一一
特務通 七五
海眼 三〇
倭寇 六
袁崧城 九
桂陽路 六六
馬園街 一五
教會路 三三
海寧路 六〇
致遠街 二五
高墩沙 七九
海關路 三三

十一畫

崑山花園 六〇
莫干山路 二八
斜土路 一八
梵王渡 四三
麥尼尼路 三七
眞如 七七
涼州路 六六
魚行路 一五
望志路 三七
莫利愛路 三八
麥克利奧路 四九
麥克利克路 六八
麥底安路 三七
國和路 七四
紫金路 一三
陸家宅 七八
陸家嘴 三〇
陸家嘴路 七八
麥拿里 六三
麥根路 二八
麥高包祿路 四〇
麥特赫司脫路 二八
曹家渡 七七
曹家嘴 三〇
喇格納路 三四
梅家街 一三
密勒路 五九
教堂街 二三
野渡 一九
野猫塘 七九
培開爾路 六九
畢勛路 三四
球場弄 二三
康腦脫路 四七
陶爾斐斯路 三七
敏德坊 六四
斜橋路 二九
婁縣 三
晝錦里 二五
笠澤 五
黑龍路 六九
麥賽爾蒂羅路 三七
匽瀆壘 九
野鷄墩 四
偸鷄橋 二五

貝當路 三九
貝禘鏖路 三七
李樅涇 四四

八畫

長人鄉 七九
松井通 七五
倘文路 一一
東本願寺別院 五五
和平路 一六
杭州路 三三
定西路 五〇
泥地戰 二六
松江 五
松江路 二三
長谷川通 七五
東虬江 七三
東京路 六七
東門路 一六
拓林 八
阿拉白司脫路 五八
林肯路 四九
披阿司路 六三
怡和路 七〇
其美路 七五
河南路 二四
孟神父路 三八
金神父路 三八
泥城橋 二六
東洋車 一六
東南路 七八
青浦鎮 七七
定海路 六七
周家嘴 三〇
法租界 三三
法租界外灘路 三三
茄勒路 三五
松陵江 五
東鄉通 七四
法華寺 四四
法華路 四九
拉都路 三七
花園里 六三
河間路 二四
近勝路 六八
阿瑞里 六三
祁齊路 三六
典當街 四二
花園路 一七
亞爾培路 四〇
松潘路 六七
法磊斯路 四八
近衛通 七四
東鴨綠路 六九
青龍鎮 四

九畫

軍工路 七五
虹口 五一
虹口公園 五七
重元寺 三
春申君 一
春申浦 一
春申江 一
春申塘 二
春申君廟 二
星加坡路 四八
姚主教路 三八
南江 五
眉州路 六六
軍行路 七四
皇軍路 七五
哈同路 二七
哈同園 二七
保安司徒廟 三〇
洋行街 三三
拱辰路 一一
哈拉路 六九
柏油路 一八
昭和通 七四
昭和島 七五
浦東 六八
洋涇 七九
洋涇浜灘 三
後馬路 二五
兪家街 一三
施高塔路 五九
紀家花園 六〇
洞庭路 六七
茂海路 六八
封家濱 七七
保康里 三〇
城隍廟 一四
界街 二四
界路 六三
畑路 七五
香港路 二八

北西藏路 二六
白克而路 二七
白萊尼蒙馬浪路 三五
平定路 六七
四明公所 三六
古拔路 三九
北河南路 六三
北京路 三三
北門街 三三
外虬口 五七
加納通 七五
乍浦路 六〇
打浦路 一七
外馬路 一六
四馬路 二五
平涼路 六七
石梁 一九
民國路 一五
半淞園 一七
四達路 七二
北揚子路 二四
石路 二四
巨福路 三七
白爾路 三六
民慶路 七四
巨潑來斯路 三九
平濟利路 三六
白賽仲路 三七
玉盤橋 七九
外灘公園 三〇
巨籟達路 三五

六畫

舟山路 三三
老公園路 二三
老北門街 四二
江心沙 七五
江西路 二四
百老滙 五二
安西路 五〇
合作路 七五
同孚路 二八
瓜豆園路 一八
西克路 二五
百步橋 九
吉林路 六九
自來火行西街 四二
自來火行東街 四二
安和寺路 四九
西和路 五〇
安城路
安納金路 三六
艾家街 一五
朱家街 一六
扛魚浦 七九
西陸戰隊通 七四
西華德路 六八
夷場 一六
西愛咸斯路 三七
朱葆三路 四一
老靶子路 五七
老閘路 二四
西寧路 五〇
吉慶路 一三
西廟橋路 一八
西摩路 二八
兆豐公園 四六
地豐路 四八
西藏路 三六
江蘇路 二四
江灣路 六〇

七畫

佘山 七七
攻山路 四二
佑尼干路 四九
虬江路 七三
吳江 五
武昌路 五六
武定路 六七
克明路 六四
吳松江 五
局門路 一七
杜神父路 三八
杜美路 三九
克能海路 五九
呂班路 三四
走馬塘 七六
沈家園 一七
貝勒路 四〇
李梅路 三五
吳淑江 五
吳淞路 五六
吳淞鎮 七六
吳淞江路 四一
拋球場 二五
大新街 二五

索引

二畫

十六舖 三三
九江路 二三
八字橋 七三
九畝地 一四
二馬路 二五
七浦路 六〇
八團鎮 八
七寶鎮 七七

三畫

乃木通 七四
川公路 七三
三民路 七五
大正通 七四
大自鳴鐘 三三
大西路 四八
大吉路 一七
山西路 二四
小沙渡路 二九
川沙 七
三林塘 七九
大沽路 二九
大和街 五四
山東路 二四
也是園 一三
三茅閣 二
三茅閣橋 二
上海 四三
上海浦 七六
下海 四三
大馬路 二五
三馬路 二五
五馬路 二五
上海鎮 五
大連灣路 六九
叉袋角 三〇
小黃浦 七九
大場鎮 七六
三義里 七三
千愛里 六四
大境路 一四
大碼頭路 一六

四畫

及川通 七五
中山路 四九
天文台路 三八
太平路 六九
太古路 三三
天主堂街 四二
比亞士路 四八
水泥公司路 一八
仁記路 二九
毛家街 一六
六馬路 二五
太倉 六
月浦鎮 六
方浜 一一
方斜路 一七
中國外灘 一六
引翔 七六
丹陽路 六七
戈登路 二七
文極司脫路 二八
中華路 一五
公園弄 三三
日暉路 一七
五權路 七五
巴爾福路 二七
火腿街 一五
丹鳳路 一二
火輪磨坊街 四二
文監師路 五二
文廟路 一四
公館馬路 三二
天鑰橋路 一八

五畫

四川路 二四
甘世東路 三五
皮少耐路 三五
民生路 七八
外白渡橋 三〇
北四川路 五七
申 一
申江 一
永安里 六三

上海歷史地理研究會刊

ACCESSION
NO. 12266

沖田一著

上海地名誌

滄浪外史署